

九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告8：箱崎遺跡

九州大学埋蔵文化財調査室

<https://hdl.handle.net/2324/7407626>

出版情報：九州大学埋蔵文化財調査室報告. 11, 2025-04-30. Archaeological Heritage Management Office, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



九州大学埋蔵文化財調査室報告 第11集

九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 8

箱崎遺跡

—HZK1602・2006 地点—



2025

九州大学埋蔵文化財調査室

九州大学埋蔵文化財調査室報告 第11集

九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 8

箱崎遺跡

—HZK1602・2006 地点—



2025

九州大学埋蔵文化財調査室



HZK2006地点 A 区埋葬遺構 SX01馬骨出土状況 (西から)



HZK2006地点 A 区火葬土坑 SK25人骨出土状況 (南から)



HZK2006地点 A 区火葬土坑 SK30 (南西から)



HZK2006地点 A 区火葬土坑 SK42 (南東から)



HZK2006地点 G 区火葬土坑 SK13 (北西から)



HZK2006地点 G 区火葬土坑 SK19 (北東から)



HZK2006地点 G 区火葬土坑 SK33 (東から)



HZK2006地点 G 区木棺墓 ST35遺物出土状況 (西から)

序 文

九州大学埋蔵文化財調査室は、箱崎キャンパス跡地の埋蔵文化財調査を行うため、2015年度に調査室を再編し、2016年度から箱崎キャンパス跡地の埋蔵文化財調査を開始した。その過程で、2016年8月には旧中央図書館南側のHZK1603地点で元寇防塁跡を発見して以来、2020年度まで継続的に調査することにより、旧農学部二号館から旧工学部二号館に至るまでの石積遺構とその背後の大溝からなる元寇防塁跡を検出した。その結果、2020年3月には旧中央図書館南側から旧工学部工学研究科共同棟までの元寇防塁跡が、さらに2021年10月には旧中央図書館北側から旧農学部一号館までの元寇防塁跡が、国の史跡として追加指定されている。

登録指定文化財となっている箱崎サテライトの南側は、中世箱崎遺跡が延びることが福岡市経済観光文化局文化財活用部（以下、福岡市文化財部と略称）による試掘調査において確認されていたので、2017年から順次発掘を進め、2021年度のHZK2101地点の発掘調査を以て、箱崎キャンパス跡地の埋蔵文化財調査を終了することができた。この箱崎サテライトの南側では、12世紀から15・16世紀の中世を3段階に分けて居住遺跡が変遷する様子が確認され、14世紀後半から15・16世紀の室町期になると寺院関連遺構が出現することが明らかとなった。こうした発掘調査の成果は、九州大学埋蔵文化財調査報告第9・10集において、既に公開しているところである。

一方、箱崎サテライト北側の旧船舶海洋工学実験室周辺では、2016年に福岡市文化財部による試掘調査（HZK1602地点）において、近世古人骨片や甕棺片が採集されていた。しかし、福岡市文化財部によって、本調査ではなく工事掘削時における慎重調査の判断が下された。九州大学埋蔵文化財調査室では、近世墳墓が存在する可能性が高いと判断し、学術調査に切り替え、旧船舶風洞実験室西地点（HZK1801地点）での発掘を実施したところ、55基以上の近世甕棺墓や桶棺墓とともに多量の古人骨が発見された。そのため、遺跡が続くと判断されたHZK2006地点とHZK2007地点も発掘調査を実施した。その結果、HZK2006地点では、12～14世紀の木棺墓と15・16世紀の火葬墓、HZK2007地点には15・16世紀の火葬墓と近世墳墓が存在することが判明した。箱崎サテライト北側は、中・近世の墓地であることが判明し、しかも12～14世紀の木棺墓から15・16世紀の火葬墓と次第に位置を北側に移し、最終的に近世の甕棺墓と桶棺墓がその北側に変遷していくことが判明した。このように、箱崎サテライト南側は中世の集落遺跡であり、北側は中・近世の墓地遺跡であることが明らかとなった。九州大学埋蔵文化財調査報告第11集～第14集では、箱崎遺跡のHZK2006地点、HZK2007地点、HZK1801地点の遺構・遺物編、そしてこれら墓地遺跡出土の人骨編の四つに内容を分けながら、中・近世墓地遺跡の調査成果を報告するものである。

最後に、古人骨の形質人類学的分析を行っていただいた九州大学比較社会文化研究院の舟橋京子准教授と九州大学総合研究博物館の米元史織准教授には、深甚の謝意を申し上げたい。

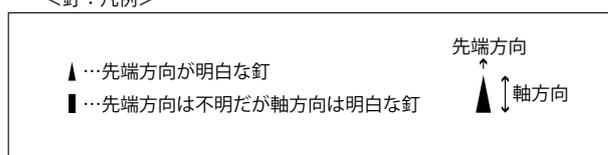
令和6（2024）年3月29日

九州大学埋蔵文化財室長
宮本 一夫

例 言

1. 本書は、九州大学箱崎キャンパス跡地において2016～2021年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の成果報告書である。「跡地」までが正式名称だが、本書では煩瑣を避け、「箱崎キャンパス」と表記する。
2. 本書には2016～2020年度に実施した立会・試掘調査のうち HZK1602地点を含む墓地に関する部分の概要と、2020年度に実施した HZK2006地点の調査成果を掲載する。
3. 本書の内容は同じ箱崎キャンパス北側で行われた HZK1801地点、HZK2007地点の調査成果を掲載した『九州大学埋蔵文化財調査室報告第12～14集』と補完しあっており、本書とあわせて適宜参照していただきたい。
4. 調査主体は九州大学埋蔵文化財調査室である。
5. 発掘調査・整理作業の担当者・参加者は報告箇所に記した。
6. 検出遺構および土層の実測は、齋藤瑞穂、福永将大が行った。製図は福永、石井若香菜、田邊八子、門脇義徳、田中えみが行った。
7. 出土遺物の実測は、板倉佳代子、尾座本洋子、甲斐千秋、樫本真理、白井恭子、田中、谷直子、藤田房佳が行い、製図は甲斐、樫本、白井が行った。
8. 遺構写真は齋藤、福永が、遺物写真は石井が撮影した。
9. 本書で使用した地形図は、2020年1月に調整した電子地形図25000「福岡」である。
10. 遺構図等における X・Y の数値は平面直角座標第Ⅱ系（原点：北緯33度0分0秒、東経131度0分0秒）における座標値（m）を、方位は同座標系の座標北を表す。標高値は東京湾平均海面を基準とする海拔高（m）で表す。
11. 土層の色調は、『新版標準土色帖』（2010年度版、農林水産省農林水産技術会議事務局監修／財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠して表現した。
12. 本書で使用する遺構記号は、次のとおりである。
SD：溝、SK：土坑、SP：ピット、ST：墓、SX：その他性格不明遺構等
13. 本書の遺構図の中で、出土した釘の凡例は以下のとおりである。

<釘：凡例>



14. 本書の執筆は齋藤、福永、谷が分担し、担当部分を末尾に記した。
15. 表紙デザインは、石井が担当した。
16. 本書に掲載した調査記録・写真および出土遺物は、九州大学埋蔵文化財調査室が収蔵保管する。
17. 本書の編集は、宮本一夫監修のもと谷が担当した。

目次

巻頭図版

序文

例言

目次

挿図・表目次

写真図版一覧

I 箱崎遺跡—九州大学箱崎キャンパス地区—について

- | | |
|--------------------------------------|---|
| 1. 2023・2024年度の箱崎キャンパス埋蔵文化財調査体制…………… | 1 |
| 2. 2024年度の調査及び報告地点について…………… | 3 |

II HZK2006地点（本部第二庁舎地点）

- | | |
|---------------|----|
| 1. 調査の経緯…………… | 15 |
| 2. 遺構と遺物…………… | 16 |
| 3. 小結…………… | 52 |

写真図版

報告書抄録

挿図・表目次

I 箱崎遺跡—九州大学箱崎キャンパス地区—について	
第1図 箱崎遺跡とその周辺	2
第2図 九州大学箱崎キャンパス 発掘調査グリッド	4
第3図 2020年度の発掘調査地点と本報告調査地点	5
第4図 立試1859地点の土層と検出遺構	7
第5図 HZK1602・立試1849・1859・2010地点出土遺物	10
第6図 立試1925地点甕棺墓 ST2501～2505出土遺物	11
第7図 立試1925地点甕棺墓 ST2506・調査地点一括出土遺物	12
第1表 HZK1602地点出土遺物観察表	13
第2表 立試1849地点出土遺物観察表	13
第3表 立試1859地点出土遺物観察表	13
第4表 立試1925地点出土遺物観察表	13
第5表 立試2010地点出土遺物観察表	14
II HZK2006地点（本部第二庁舎地点）	
第1図 HZK2006地点遺構配置図	17
第2図 HZK2006地点 A 区埋葬遺構 SX01平面図	19
第3図 HZK2006地点 A 区埋葬遺構 SX01出土遺物	19
第4図 HZK2006地点 A 区木棺墓 ST02平面・断面図	20
第5図 HZK2006地点 A 区木棺墓 ST02出土遺物	20
第6図 HZK2006地点 A 区土坑 SK03・04・ピット SP05・06・土坑 SK07平面・断面図	21
第7図 HZK2006地点 A 区土坑 SK08・09・火葬土坑 SK10・土坑 SK11・12平面・断面図	22
第8図 HZK2006地点 A 区土坑 SK13・18平面・断面図	23
第9図 HZK2006地点 A 区土坑 SK12・18出土遺物	23
第10図 HZK2006地点 A 区土坑 SK14a・14b 平面・断面図	24
第11図 HZK2006地点 A 区土坑 SK14b 出土遺物	24
第12図 HZK2006地点 A 区火葬土坑 SK15・礫集中 SX16a・土坑 SK16b 平面・断面図	25
第13図 HZK2006地点 A 区土坑 SK17・ピット SP19～21・火葬土坑 SK22平面・断面図	26
第14図 HZK2006地点 A 区土坑 SK17出土遺物	27
第15図 HZK2006地点 A 区火葬土坑 SK23・土坑 SK24・火葬土坑 SK25・30平面・断面図	28
第16図 HZK2006地点 A 区火葬土坑 SK23・土坑 SK29・火葬土坑 SK30・礫集中 SX32a 出土遺物	28
第17図 HZK2006地点 A 区土坑 SK27～29・火葬土坑 SK31・礫集中 SX32a・土坑 SK32b 平面・断面図	29
第18図 HZK2006地点 A 区土坑 SK33～35・火葬土坑 SK36・37平面・断面図	31
第19図 HZK2006地点 A 区土坑 SK38～SK40a・40b 平面・断面図	32
第20図 HZK2006地点 A 区土坑 SK38・40a・ピット SP49・土坑 SK58出土遺物	33
第21図 HZK2006地点 A 区火葬土坑 SK41・42平面・断面図	34
第22図 HZK2006地点 A 区火葬土坑 SK41・42出土遺物	34
第23図 HZK2006地点 A 区土坑 SK43・火葬土坑 SK44・土坑 SK59平面・断面図	35
第24図 HZK2006地点 A 区火葬土坑 SK44出土遺物	35
第25図 HZK2006地点 A 区礫集中 SX56・土坑 SK57a・57b 平面・断面図	36
第26図 HZK2006地点 A 区土坑 SK57出土遺物	36
第27図 HZK2006地点 A 区土坑 SK45・溝 SD46・ピット SP47・土坑 SK48・ピット SP49・50平面・断面図	38
第28図 HZK2006地点 A 区ピット SP51・52・礫集中 SX53・ピット SP54・火葬土坑 SK55平面・断面図	39
第29図 HZK2006地点 A 区遺構外出土遺物	39
第30図 HZK2006地点 G 区火葬土坑 SK13平面・断面図	40
第31図 HZK2006地点 G 区火葬土坑 SK13出土遺物	40
第32図 HZK2006地点 G 区火葬土坑 SK16平面・断面図	41
第33図 HZK2006地点 G 区火葬土坑 SK19平面・断面図	41
第34図 HZK2006地点 G 区火葬土坑 SK33平面・断面図	42
第35図 HZK2006地点 G 区火葬土坑 SK33出土遺物	42
第36図 HZK2006地点 G 区木棺墓 ST35平面図	43
第37図 HZK2006地点 G 区木棺墓 ST35出土遺物	43
第38図 HZK2006地点 G 区溝 SD09平面・断面図	44
第39図 HZK2006地点 G 区溝 SD30平面・断面図	45
第40図 HZK2006地点 G 区溝 SD09・30出土遺物	46
第41図 HZK2006地点 G 区土坑 SK01平面・断面図	46
第42図 HZK2006地点 G 区土坑 SK02平面・断面図	47
第43図 HZK2006地点 G 区土坑 SK02出土遺物	48

第44図	HZK2006地点 G 区土坑 SK03平面・断面図	48	第51図	HZK2006地点 G 区土坑 SK21平面・断面図	50
第45図	HZK2006地点 G 区土坑 SK05・06平面・断面図	48	第52図	HZK2006地点 G 区土坑 SK23・24平面・断面図	50
第46図	HZK2006地点 G 区土坑 SK10平面・断面図	48	第53図	HZK2006地点 G 区土坑 SK31・32平面・断面図	51
第47図	HZK2006地点 G 区土坑 SK17平面・断面図	49	第54図	HZK2006地点 G 区土坑 SK31 (旧 SK27含む) 出土遺物.....	51
第48図	HZK2006地点 G 区土坑 SK17出土遺物.....	49	第55図	HZK2006地点 G 区遺構外出土遺物.....	52
第49図	HZK2006地点 G 区土坑 SK18平面・断面図	49	第 1 表	HZK2006地点 A 区出土遺物観察表.....	53
第50図	HZK2006地点 G 区土坑 SK18出土遺物.....	49	第 2 表	HZK2006地点 G 区出土遺物観察表.....	56

写真図版一覽

巻頭図版 1	HZK2006地点 A 区埋葬遺構 SX01馬骨出土 状況 (西から) / HZK2006地点 A 区火葬土 坑 SK25人骨出土状況 (南から)	3-2	HZK2006地点 A 区 埋葬遺構 SX01 馬骨 (北から)
巻頭図版 2	HZK2006地点 A 区火葬土坑 SK30 (南西か ら) / HZK2006地点 A 区火葬土坑 SK42 (南東から)	3-3	HZK2006地点 A 区 埋葬遺構 SX01 石組 (西から)
巻頭図版 3	HZK2006地点 G 区火葬土坑 SK13 (北西か ら) / HZK2006地点 G 区火葬土坑 SK19 (北東から)	3-4	HZK2006地点 A 区 埋葬遺構 SX01 人骨 (南東から)
巻頭図版 4	HZK2006地点 G 区火葬土坑 SK33 (東から) / HZK2006地点 G 区木棺墓 ST35遺物出土 状況 (西から)	3-5	HZK2006地点 A 区 木棺墓 ST02遺 物 (南西から)
写真図版 1	1-1 HZK1602地点 掘削状況 (南から) 1-2 HZK1602地点 甕棺 2 検出状況 (南 西から) 1-3 HZK1602地点 甕棺 3 検出状況 (南 から) 1-4 HZK1602地点 出土甕棺 3 1-5 立試1849地点 立会地点 (南東から) 1-6 立試1849地点 甕棺出土状況 (南西 から) 1-7 立試1859地点 土師器出土状況 (南 西から) 1-8 立試1859地点 SX02 (北から)	3-6	HZK2006地点 A 区 木棺墓 ST02完 掘 (西から)
写真図版 2	2-1 立試1859地点 SX02人骨出土状況 (南西から) 2-2 立試1859地点 SX06人骨出土状況 2-3 立試1859地点 SX06完掘 2-4 立試1859地点 完掘 (南東から) 2-5 立試1859地点 完掘 (北西から) 2-6 立試1925地点 掘削状況 (西から) 2-7 立試1925地点 調査区 (北東から) 2-8 立試2010地点 境界堀撤去 (北西か ら)	3-7	HZK2006地点 A 区 土坑 SK11遺物 出土状況 (南から)
写真図版 3	3-1 HZK2006地点 A 区 調査区遠景 (北 東から)	3-8	HZK2006地点 A 区 土坑 SK13 (北 西から)
		写真図版 4	4-1 HZK2006地点 A 区 土坑 SK14 1面 (西から) 4-2 HZK2006地点 A 区 土坑 SK14 3面 (西から) 4-3 HZK2006地点 A 区 火葬土坑 SK15 (北東から) 4-4 HZK2006地点 A 区 礫集中 SX16a (北西から) 4-5 HZK2006地点 A 区 ピット SP21 (北 から) 4-6 HZK2006地点 A 区 火葬土坑 SK22 半裁 (南東から) 4-7 HZK2006地点 A 区 火葬土坑 SK22 出土状況 (南から) 4-8 HZK2006地点 A 区 火葬土坑 SK23 (東から)
		写真図版 5	5-1 HZK2006地点 A 区 土坑 SK24 (南 東から) 5-2 HZK2006地点 A 区 火葬土坑 SK25 (南から) 5-3 HZK2006地点 A 区 火葬土坑 SK30 (西から)

	5-4	HZK2006地点 A 区	火葬土坑 SK31 (東から)	写真図版 8	8-1	HZK2006地点 G 区	火葬土坑 SK19 半裁 (南東から)
	5-5	HZK2006地点 A 区	礫集中 SX32a (南から)		8-2	HZK2006地点 G 区	火葬土坑 SK19 (南から)
	5-6	HZK2006地点 A 区	火葬土坑 SK36 (東から)		8-3	HZK2006地点 G 区	溝 SD30 (東か ら)
	5-7	HZK2006地点 A 区	火葬土坑 SK37 (西から)		8-4	HZK2006地点 G 区	土坑 SK31・32完 掘 (北西から)
	5-8	HZK2006地点 A 区	火葬土坑 SK37 (南から)		8-5	HZK2006地点 G 区	火葬土坑 SK33 (南から)
写真図版 6	6-1	HZK2006地点 A 区	土坑 SK40a (南 西から)		8-6	HZK2006地点 G 区	木棺墓 ST35遺物 出土状況 (北西から)
	6-2	HZK2006地点 A 区	火葬土坑 SK41 (南西から)		8-7	HZK2006地点 G 区	木棺墓 ST35遺物 出土状況 (西から)
	6-3	HZK2006地点 A 区	火葬土坑 SK42 (南東から)		8-8	HZK2006地点 G 区	調査区完掘 (北 から)
	6-4	HZK2006地点 A 区	土坑 SK43 (西 から)	写真図版 9	I 章 HZK1602地点 立会・試掘1859・ 1925地点出土遺物 第5図4／第5図4／第5図9／第5図5／第5図5 ／第5図10／第5図6／第5図6／第5図11／第 5図7／第5図7／第5図12／第5図8／第5図8 ／第5図13／第5図15／第6図9／第6図10／ 第6図11／第6図12／第6図13		
	6-5	HZK2006地点 A 区	火葬土坑 SK44 (東から)		写真図版10 I 章 立会・試掘1925・2010地点出土遺物 第6図16／第6図17／第6図18／第7図5／第7 図6／第7図7／第7図12／第7図12／第7図13 ／第6図4／第7図1／第5図3		
	6-6	HZK2006地点 A 区	礫集中 SX53 (北 西から)		写真図版11 II 章 HZK2006地点 A 区出土遺物 第3図1／第3図2／第3図3／第3図8／第5図1 ／第9図1／第16図7／第9図3／第9図2／第 16図8／第16図10／第16図11／第16図12／ 第16図13／第16図14／第26図3／第29図1／ 第29図5／第29図6／第29図7／第29図8		
	6-7	HZK2006地点 A 区	火葬土坑 SK55 (南西から)		写真図版12 II 章 HZK2006地点 G 区出土遺物 第31図1／第31図2／第31図3／第31図4／第 31図5／第31図6／第31図7／第37図1／第37 図2／第37図3／第37図4／第37図5／第40図 5／第40図6／第40図7／第43図2／第43図3 ／第43図4／第43図11／第55図2／第55図7		
	6-8	HZK2006地点 A 区	礫集中 SX56 (南 東から)				
写真図版 7	7-1	HZK2006地点 G 区	土坑 SK02断面 (北西から)				
	7-2	HZK2006地点 G 区	土坑 SK05・06 (北から)				
	7-3	HZK2006地点 G 区	溝 SD09 (西か ら)				
	7-4	HZK2006地点 G 区	火葬土坑 SK13 (北から)				
	7-5	HZK2006地点 G 区	火葬土坑 SK16 断面 (西から)				
	7-6	HZK2006地点 G 区	火葬土坑 SK16 完掘 (北西から)				
	7-7	HZK2006地点 G 区	土坑 SK17遺物 出土状況 (南東から)				
	7-8	HZK2006地点 G 区	土坑 SK18人骨 出土状況 (北西から)				

I 箱崎遺跡－九州大学箱崎キャンパス地区－について

1. 2023・2024年度の箱崎キャンパス埋蔵文化財調査体制

九州大学埋蔵文化財調査室では、本学キャンパスの統合移転事業に伴って、箱崎キャンパスにおける埋蔵文化財発掘調査を2016年度から継続的に実施し、2021年度に発掘調査を完了した。その間30件の調査を行い、その成果のうち元寇防塁に関わるものとして、合計5冊の発掘調査成果報告書を公開している。特に5冊目では元寇防塁の総括報告を行い、2016年度から続いた元寇防塁の発掘調査の成果の集大成とした。

一方、箱崎キャンパスの調査によって、中世箱崎遺跡の北縁部分や近世の墓地も見つかったが、国指定史跡元寇防塁の追加指定に向けて元寇防塁の発掘調査成果報告書の作成を急いだため、未報告となっていた。そのため2022年度から未報告地点の報告書作成作業を始め、2023年度には中世箱崎遺跡の北縁部分に当たる地点の発掘調査成果報告書2冊を刊行している。

2024年度は、残された近世を中心とした墓地群の発掘調査成果報告書を作成することとした。報告書は調査地点ごとに南側から順に刊行することとし、出土人骨については、発掘調査の回数順にまとめて出土人骨編として刊行することとした。

調査室は昨年度まで室長以下、助教2名、学術研究員1名で調査・整理作業を行ってきたが、助教2名が転出し、助教1名となった。2023・2024年度の九州大学箱崎キャンパス埋蔵文化財調査体制は以下の通りである。

2023年度

九州大学キャンパス計画及び施設管理委員会

委員長	福田 晋	理事・副学長（キャンパス整備・管理）
副委員長	坂井 猛	キャンパス計画室副室長
委員	橋彌 和秀	教育学部長
	山本 元司	工学研究院長
	中村 雅史	病院長
	横山 士吉	先導物質化学研究所長
	尾本 章	芸術工学研究院長
	西田 憲史	理事（事務局長）
	成相 圭二	企画部長
	井上 賢一	総務部長
	伊藤 宏明	研究・産学官連携推進部長
	下田 力	財務部長
	平野 正幸	施設部長
	後藤 成雅	学務部長
	中本 浩司	統合移転推進部長
	田上 健一	副理事（キャンパス整備）

I 箱崎遺跡—九州大学箱崎キャンパス地区—について



文化財ワーキンググループ

WG 長	宮本 一夫	人文科学研究院教授
委員	清水 和裕	人文科学研究院長
	藤岡健太郎	大学文書館教授
	辻田淳一郎	人文科学研究院准教授
	溝口 孝司	比較社会文化研究院教授
	田尻 義了	比較社会文化研究院准教授
	堀 賀貴	人間環境学研究院教授
	渡辺 敦史	農学研究院教授
	鶴崎 直樹	キャンパス計画室准教授
	山下 孝宣	施設部施設企画課長
	遠藤 佑	総務部総務課長
	安東 裕之	財務部資産活用課長
	安部 貴之	統合移転推進部統合移転推進課長
	佐竹 晃佳	企画部社会共創課長

九州大学埋蔵文化財調査室運営委員会

委員長	宮本 一夫	人文科学研究院教授・埋蔵文化財調査室長
	堀 賀貴	人間環境学研究院教授
	溝口 孝司	比較社会文化研究院教授
	辻田淳一郎	人文科学研究院准教授
	田尻 義了	比較社会文化研究院准教授

九州大学埋蔵文化財調査室

室長	宮本 一夫
助教	谷 直子

2. 2024年度の調査及び報告地点について

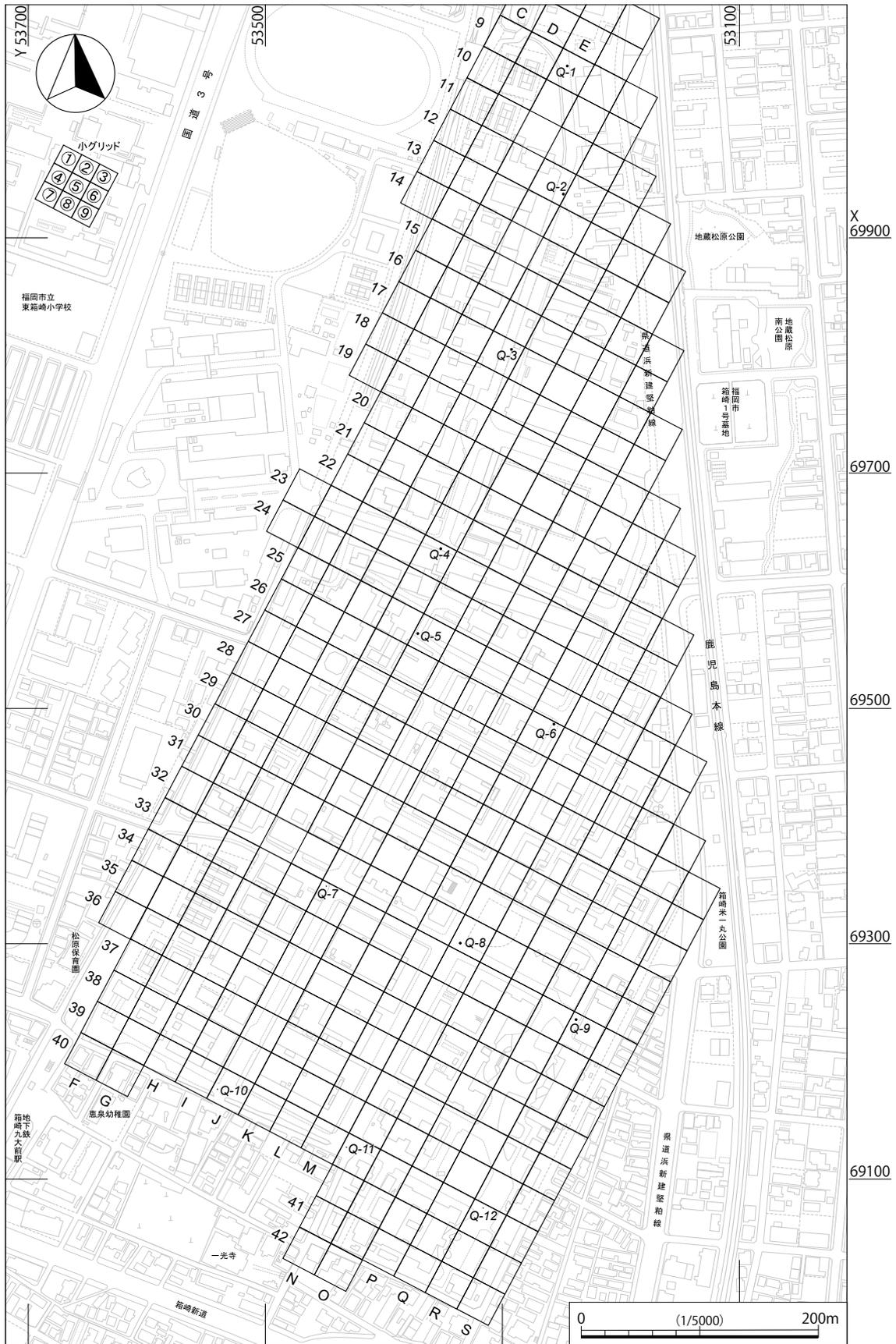
(1) 調査対象範囲と調査地点

調査対象範囲は箱崎キャンパス東側の理系地区である（第2図）。すでに当該地区には、世界測地系対応の2級基準点3点（Q-1、Q-10、Q-12）3級基準点9点（Q-2、Q-3、Q-4、Q-5、Q-6、Q-7、Q-8、Q-9、Q-11）が確保されており、これらを用いて正確な位置情報の記録を行ってきた。

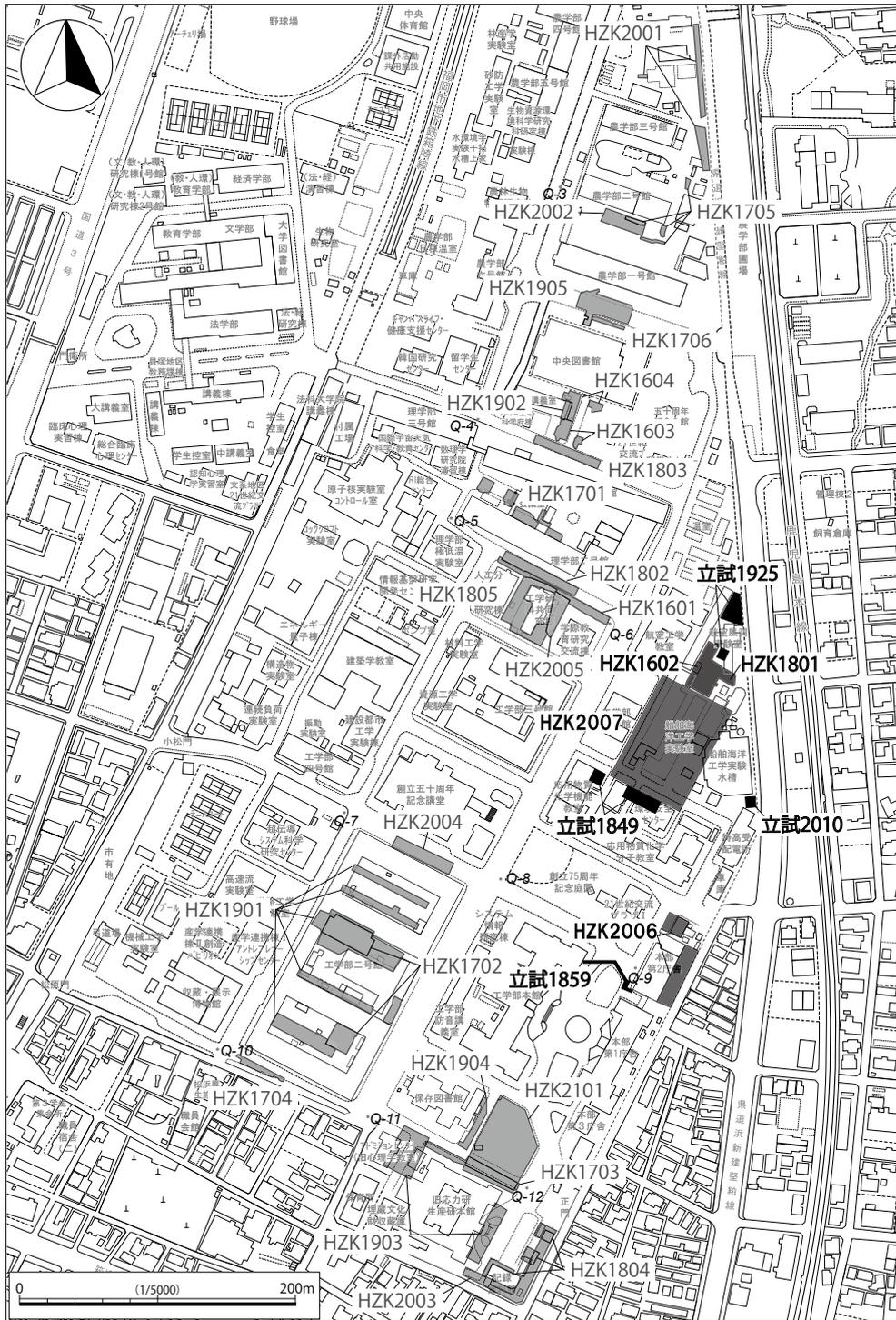
理系地区全体には西鉄貝塚駅北東に原点をおく30mメッシュの大グリッドが設定されている。北から東に27.767385°傾くタテのラインと、それに直交するヨコのラインとで形作られており、原点から東へA～Sの記号、南へ1～42の数字が与えられている。大グリッドは10mメッシュの小グリッド9つに分割される。北西を起点として上段に①・②・③区、中段に西から④・⑤・⑥区を、同じく下段に⑦・⑧・⑨区を置く。以下位置を説明する場合 R36-⑨区、R37-③区のように表現する。

調査地点名はこれまで、「箱崎遺跡 九州大学箱崎キャンパス」の略号 HZK を頭文字とし、事業年度の下2桁と各年度の調査番号2桁の計4桁の番号からなる名称を与えている。また、箱崎キャン

I 箱崎遺跡—九州大学箱崎キャンパス地区—について



第2図 九州大学箱崎キャンパス 発掘調査グリッド



第3図 2020年度の発掘調査地点と本報告調査地点

パスにおける解体前の建物群との位置関係を別称として添えてきた。これを踏襲して、本報告書内での調査地点名とする。

(2) 箱崎キャンパスにおける2023・2024年度の埋蔵文化財調査

発掘調査は2021年度で終了しており、2023・2024年度は、立会調査や試掘調査も行われなかった。

(3) 2024年度報告の調査地点と調査の経緯

2024年度報告の調査地点は、いずれも中近世の墓地を主体とする。箱崎キャンパス南側から HZK2006 地点、HZK2007 地点、HZK1801 地点と立会・試掘に伴なって調査地点付近で検出された墓である。

明治33（1900）年測量の陸地測量部によって作成された地図に基づく、箱崎キャンパス内に位置する地蔵の森の北東付近にかけて墓地が広がっていたことが分かる。一方明治44（1911）年測量の同地図では墓地があった地区は松林に変更されているのと同時に、現在の JR 鹿児島本線西側の箱崎 1 号墓地周辺に新たな墓地が造成されている。こうした状況から、箱崎キャンパス内には九州帝國大學創設以前に墓地が存在したことが明らかであり、また『九大風雪記』にも同様の記載がある（鬼頭 1948）。

2016年 8 月に福岡市および本学埋蔵文化財検討ワーキンググループが実施した船舶海洋工学実験室周辺の試掘調査（登録番号1607）では、第 3 トレンチで GL-150cm から近世から近代の甕棺 3 基と人骨が検出され、この付近一帯が当該期の墓地であったことが裏付けられた。そのためこの地点を HZK1602 地点と呼称し、調査地点として取り扱うこととした。

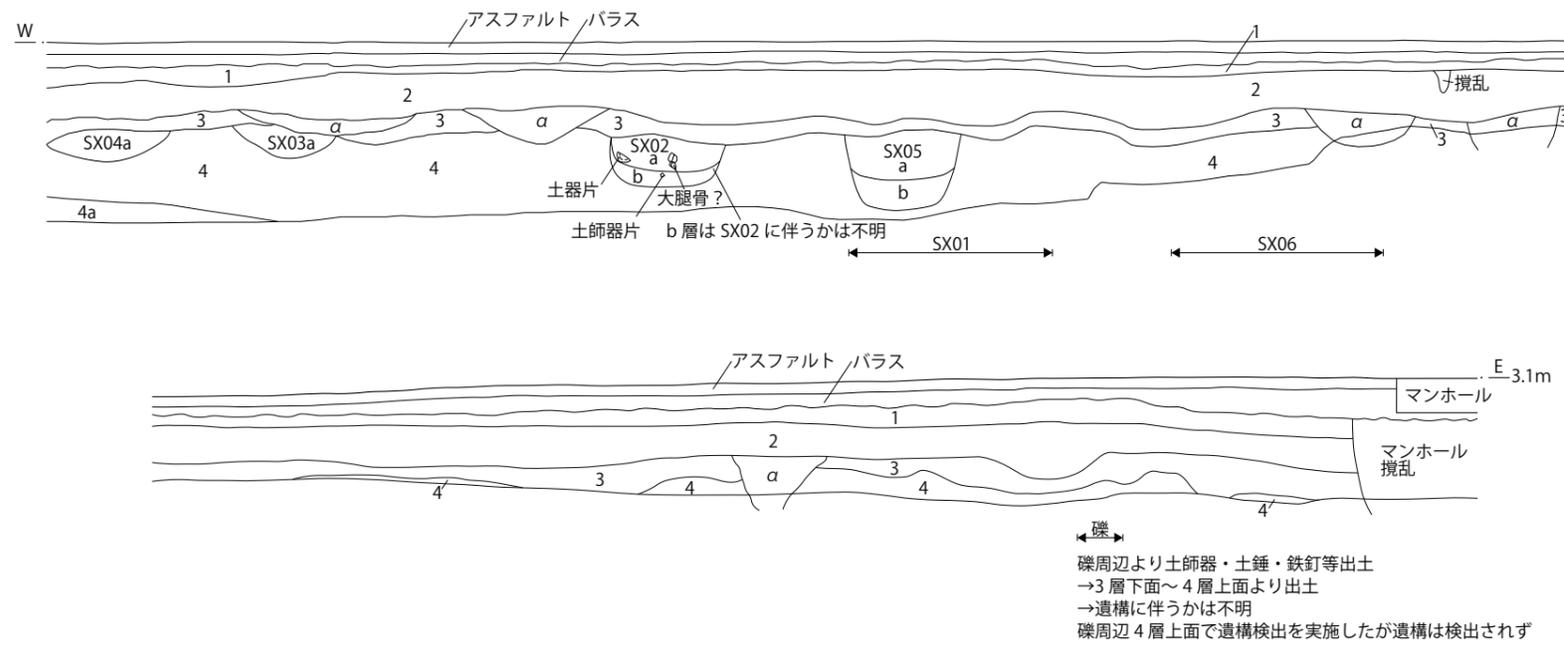
その後2018年 5 月からは、HZK1602 地点第 3 トレンチに一部重なる地点である船舶風洞実験室西地点においても遺跡の実態を解明し、その価値を評価するために HZK1801 地点として発掘調査を行った（詳細は九州大学埋蔵文化財調査室報告第13集・第14集を参照）。その結果、木棺墓・土坑墓・甕棺墓を主体とする墓地であることが判明した。

2018年10月には旧応用部室化学分子教室跡地で配管の抜き取り工事のため、福岡市および本学埋蔵文化財検討ワーキンググループによる立会調査を実施した。立試1849地点と呼称する。その結果 GL-130cm の深さから、近世の甕棺墓 1 基を検出した。内部からは人骨片が出土したが、改葬を受けているらしく、主だった人骨や副葬品は出土していない。

2019年 2 月には、工学部本館と第一庁舎の北端をつなぐ地点で、配電線路等改修工事のため、福岡市および本学埋蔵文化財検討ワーキンググループによる立会調査を実施した。立試1859地点と呼称する。工事掘削中に中世の貿易陶磁器が出土したため、付近の精査を行った。その結果、GL-40cm ほどのところで配管溝の土層に骨片が薄く残っている部分があり、これらの陶磁器が中世の土坑（木棺）墓の副葬品であることが判明した。また土坑墓の西側からは GL-50cm のところで土師器の甕と鉄釘も出土した。調査時の土層断面図と調査時に検出された遺構図を第 4 図に示す。それによると、SX01～06 までの遺構が確認されており、いずれも人骨を含んでいる。SX01・06 は土坑墓の可能性があるが、トレンチ内での調査のため詳細は不明である。

2020年 1 月には HZK1801 地点の北東側で汚染土撤去のため、福岡市および本学埋蔵文化財検討ワーキンググループによる立会調査を実施した。立試1925地点と呼称する。南側地点から近世の甕棺墓 6 基を検出し、甕棺内部からは遺物のほか、人骨も出土した。

2020年11月からは、HZK1602 地点・HZK1801 地点の南側に位置する本部第 2 庁舎地点において、立試1859地点と同様の中世墓が検出されると予想されたため、中世墓を含めた墓の痕跡の有無を確認



基本層序

- 1 10YR4/2 灰黄褐、強くしまる、中砂(粗砂含む)現代造成土(アスファルト敷設時の埋土か?)
- 2 10YR3/1 黒褐、しまる、中砂(粗砂含む)、炭化物(石炭か?)多量を含む、近現代造成土か?(九大創設時に伴うものか?)
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐、弱くしまる、中砂(粗砂含む)2・3層の漸次層
- 4 10YR5/8 黄褐、中砂(粗砂含む)、遺物(中世土器・陶磁器片)少量含む、炭化物ごく少量含む
- 4a 10YR4/4 褐、中砂(粗砂含む)

<攪乱埋土>

- a 10YR3/3 暗褐、しまる、中砂(粗砂含む)、炭化物近現代の攪乱と推定される

SX01

- 10YR4/4 褐、中砂(粗砂含む)、炭化物ごく少量含む、土器片、人骨含む近現代の攪乱と推定される

SX02

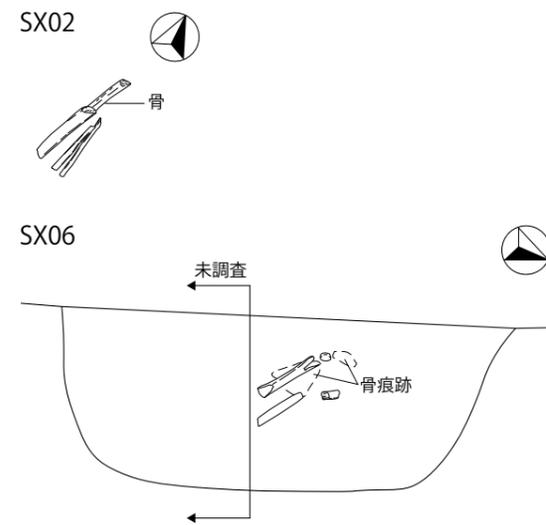
- a 10YR4/4 褐、中砂(粗砂含む)、炭化物ごく少量含む、土器片、人骨含む近現代の攪乱と推定される
- b 10YR4/6 褐、中砂(粗砂含む)、土器器小片含む

SX03・04

- a 10YR4/4 褐、中砂(粗砂含む)、炭化物ごく少量含む、人骨含む近現代の攪乱と推定される

SX05

- a 10YR4/4 褐、中砂(粗砂含む)、炭化物ごく少量含む、人骨含む近現代の攪乱と推定される
- b 10YR4/6 褐、中砂(粗砂含む)



第4図 立試1859地点の土層と検出遺構

するため、発掘調査を行った（詳細は本報告書第Ⅱ章および九州大学埋蔵文化財調査室報告第14集を参照）。HZK2006地点と呼称する。その結果、火葬土坑や木棺墓を含む中世の墓域であると判明した。

2021年2月からは、HZK1801地点南側に隣接する船舶海洋工学実験室地点において、HZK1801地点に連なる近世墓地および、HZK2006地点から展開する中世の墓域の実態を解明するために発掘調査を行った（詳細は九州大学埋蔵文化財調査室報告第12集・第14集を参照）。HZK2007地点と呼称する。その結果、中世・近世の火葬土坑・土坑墓・木棺墓、近世の甕棺墓が多数検出された。

2020年8月には特高受配電所の東境界堀撤去工事のため、福岡市および本学埋蔵文化財検討ワーキンググループによる立会調査を実施した。立試2010地点と呼称する。工事掘削中にGL-90cm以下から、陶器の骨壺が出土した。

（4）立会・試掘地点の出土遺物

上記の立会・試掘時に出土した遺物についてはここで報告を行う。なお本調査の地点は本年度刊行の報告書（九州大学埋蔵文化財調査室報告第11～14集）で報告を行う。

HZK1602地点出土遺物（第5図）

第5図1は出土写真の甕棺2にあたる陶器の甕棺で、口縁部がT字状を呈し、頸部は明瞭に屈曲する。胴部上半に7条の沈線がめぐり、17世紀後半の所産である（東中川 2000）。11は鉄製の毛抜で、輪の部分を欠損する。12は鉄製の鋏で、櫛と思われる木質が付着する。13は12の鋏の柄と考えられる。14は銭貨で鉄銭を含む。15はキセルの雁首で羅字の一部が残存する。

立試1849地点出土遺物（第5図）

第5図2は陶器の甕棺で口縁部を欠損する。肩部と胴部下半に沈線が3条ずつめぐり、18～19世紀の所産である（東中川 2000）。

立試1859地点出土遺物（第5図）

第5図4～7は白磁の皿である。口縁部は直口で厚く施釉し、底部は平底で施釉後に釉を削り取る。内面見込みが平坦で草花文の凹印を施す。大宰府編年の白磁皿Ⅷ-2b類で12世紀中頃から後半の所産である。8は青磁碗で、外面に鎬蓮弁文を施す。大宰府編年の龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類で、13世紀初頭から前半の所産である（宮崎編 2000）。9は断面四角形の鉄釘である。10は土師器の甕の口縁部である。口縁部はくの字に開き、内外面にハケメを施す。

立試1925地点出土遺物（第6・7図）

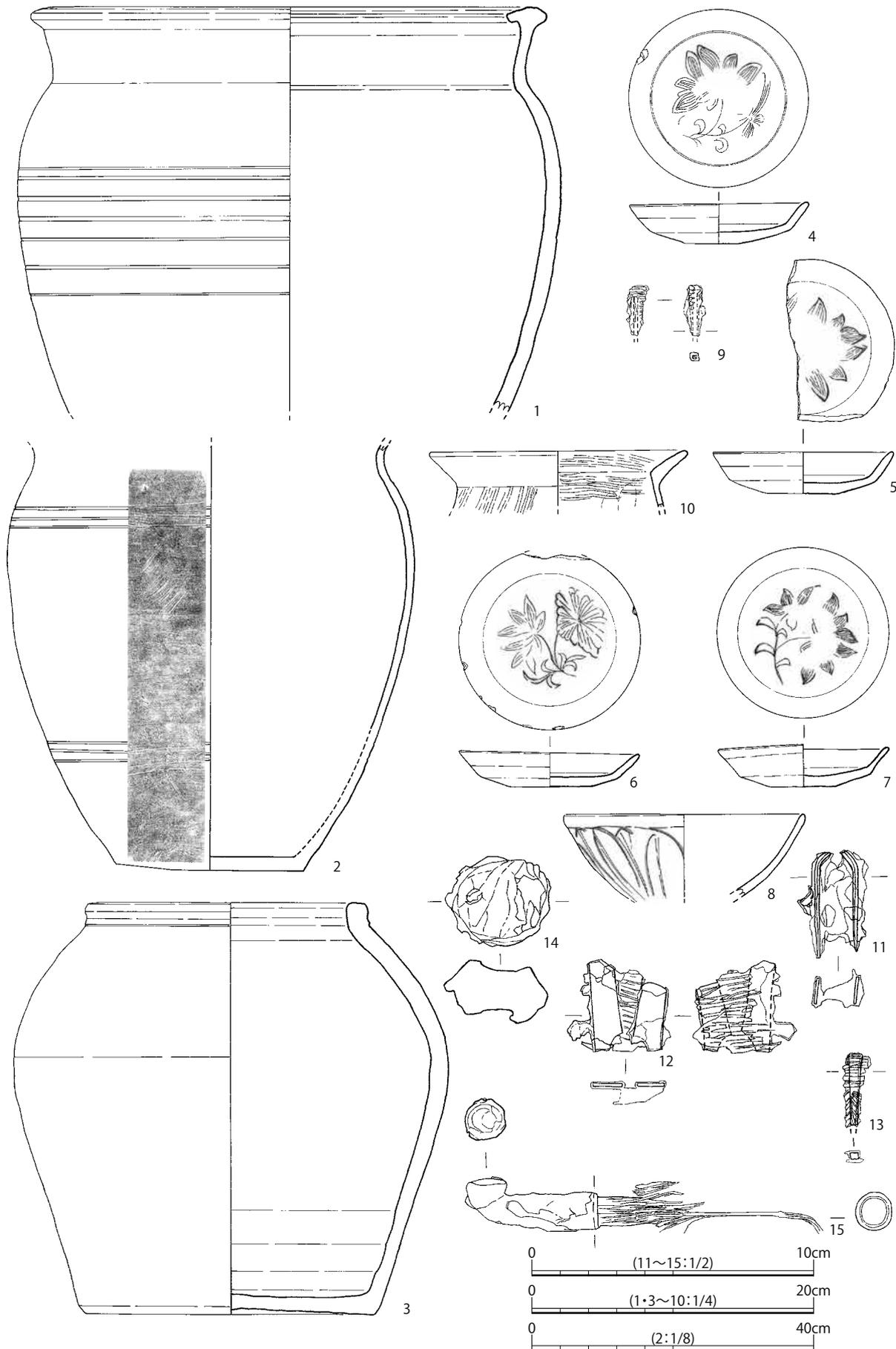
第6図1・2はST2501出土である。1は陶器の甕棺で、上半部を欠損する。底部外面に墨書がある。2は糸切り底の土師皿である。

第6図3はST2502出土の陶器の甕棺で、口縁部を欠損する。肩部に2条、胴部下半に3条沈線がめぐり、18～19世紀の所産である（東中川 2000）。

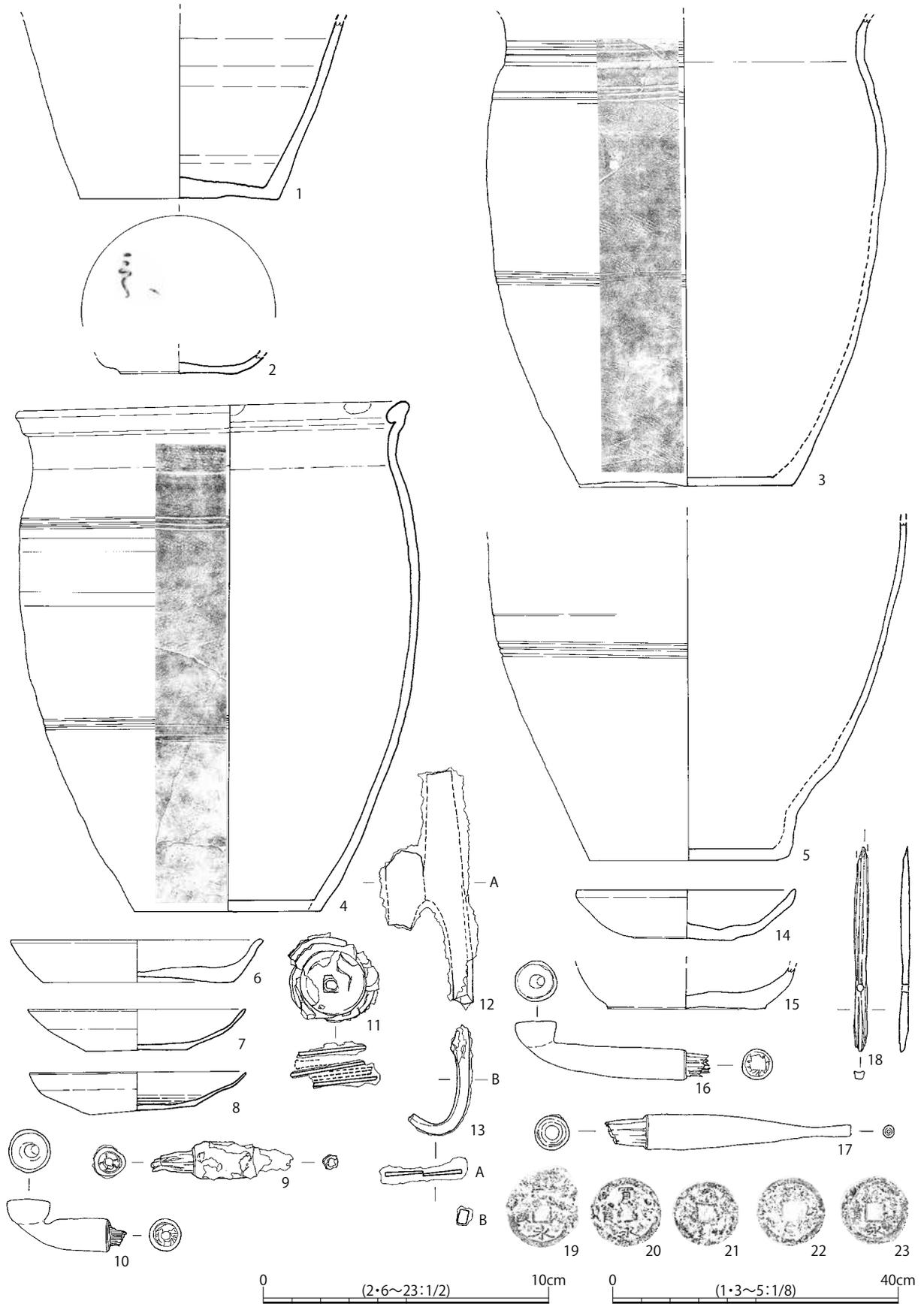
第6図4はST2503出土の陶器の甕棺で、口縁部内側に粘土紐を貼り付けて丸く仕上げる。肩部と胴部下半に沈線が3条ずつめぐり、18～19世紀の所産である（東中川 2000）。

第6図5～13はST2504出土である。5は陶器の甕棺である。上半部を欠損し、胴部下半に沈線が3条めぐり、6～8は糸切り底の土師皿で、6は棺外出土である。9・10は同一個体のキセルで、9が吸口、10が雁首である。いずれも羅字の一部が残る。11は銭貨で、銅銭を中心に6枚重なる。12・13は同一個体と思われる鉄製の鋏である。

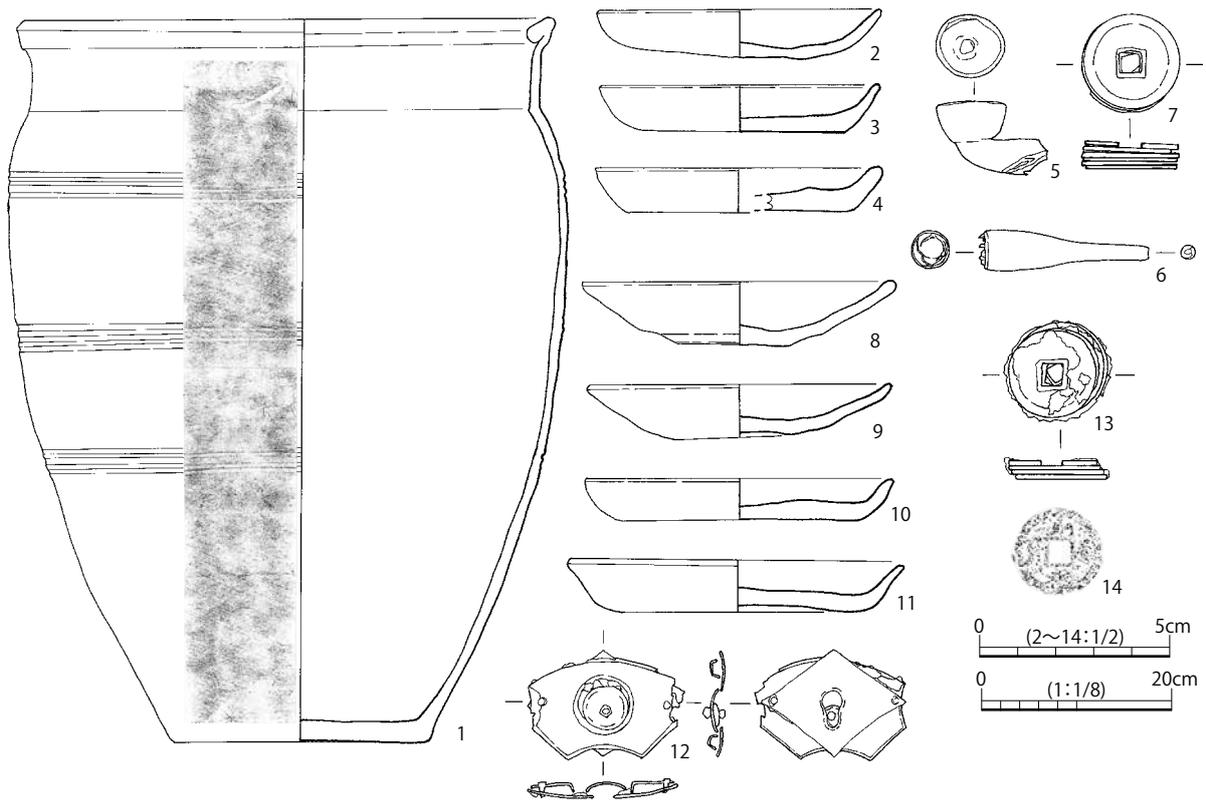
第6図14～23はST2505出土である。14・15は糸切り底の土師皿である。16・17は同一個体のキセルで、16が雁首、17が吸口である。いずれも羅字の一部が残る。18は扇の親骨と思われる、要の孔部分



第5図 HZK1602・立試1849・1859・2010地点出土遺物



第6図 立試1925地点甕棺墓 ST2501~2505出土遺物



第7図 立試1925地点甕棺墓 ST2506・調査地点一括出土遺物

が残る。19～23は銭貨で、本来は5枚重なって出土していた。19が上から1枚目、20が2枚目でいずれも寛永通寶である。21・22が3・4枚目でいずれも鑄出しが悪く、文字は不明瞭である。23は5枚目で寛永通寶である。

第7図1～7はST2506出土である。1は陶器の甕棺で、口縁部内側に粘土紐を带状に貼り付けて仕上げる。頸部の屈曲は明瞭で、肩部と胴部中央、胴部下半に沈線が3条ずつめぐる。18～19世紀の所産である（東中川 2000）。2～4は糸切り底の土師皿である。5・6は同一個体のキセルで、5が雁首、6が吸い口である。6には羅字の一部が残る。7は銭貨で銅銭が6枚重なる。

第7図8～14は調査地点一括出土である。8～11は糸切り底の土師皿である。12は銅製の金具で、近代の所産である。13・14は銭貨で、13は4枚重なる。14は寛永通寶である。

立試2010地点出土遺物（第5図）

第5図3は無釉の陶器壺である。短い口縁部が付く無頸壺で、底部径は器高や胴部最大径に比して大きい。
（谷 直子）

引用文献

- 鬼頭鎮雄 1948『九大風雪記』（2003年に九州大学史料室編集・校訂）
 齋藤瑞穂（編）2020『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告3 箱崎遺跡—HZK1802・1803・1805・1902地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第4集 九州大学埋蔵文化財調査室
 東中川忠美 2000「陶器の編年」『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』九州近世陶磁学会
 福田正宏・森貴教（編）2018『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第1集 九州大学埋蔵文化財調査室

福永将大（編）2021『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告4 箱崎遺跡—HZK1901・1905・2001・2002・2004地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第3集 九州大学埋蔵文化財調査室
 福永将大（編）2022『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告5 箱崎キャンパス地区 元寇防塁 調査総括報告書』九州大学埋蔵文化財調査室報告第5集 九州大学埋蔵文化財調査室
 三阪一徳・谷直子（編）2019『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点—付 HZK1802・1803地点概要報告』九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集 九州大学埋蔵文化財調査室
 宮崎亮一（編）2000『大宰府条坊跡X V—陶磁器分類編—』太宰府市教育委員会

第1表 HZK1602地点出土遺物観察表

図	遺構	種類	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	胎土	焼成	色調	調整	備考
5-1	甕棺2	陶器 甕棺	(36.8)		[29.0]	緻密, 白色粒子を含む	良好	外: 5YR3/2暗赤褐 内: 5YR2/2黒褐	外: タタキ, ナデ, 施釉, 施文 内: タタキ, ナデ, 施釉	頸部は露胎
5-11	甕棺2	鉄製品 毛抜	[4.0]	[2.5]	1.5					
5-12	甕棺2	鉄製品 鉄	[3.3]	[3.7]	0.9					櫛付着
5-13	甕棺2	鉄製品 鉄	[2.7]	[1.1]	0.6					櫛付着
5-14	甕棺2	銅・鉄製品 銭	3.2	3.7	2.3					銭貨複数枚
5-15	甕棺2	銅製品 キセル首部	[12.7]	1.5	2.0					羅宇の一部が残存

第2表 立試1849地点出土遺物観察表

図	遺構	種類	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	胎土	焼成	色調	調整	備考
5-2	立試1849	陶器 甕棺		26.0	[60.3]	緻密, 直径3~5mm大の砂粒・黒色粒子を含む	良好	5YR2/3 極暗赤褐	外: タタキ, ナデ, 施釉, 施文 内: タタキ, ナデ, 施釉	

第3表 立試1859地点出土遺物観察表

図	遺構	種類	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	胎土	焼成	色調	調整	備考
5-4	工学部本館 北東部3地点	白磁 皿	12.8	4.7	3.0	緻密	良好	5Y7/1 灰白	外: 施釉, 露胎 内: 施釉, 施文	大宰府編年 白磁皿VIII-2b 類
5-5	工学部本館 北東部3地点	白磁 皿	[12.8]	5.0	3.0	緻密	良好	5Y7/2 灰白	外: 施釉, 露胎 内: 施釉, 施文	白磁皿VIII-2b 類
5-6	工学部本館 北東部廃土中	白磁 皿	13.0	5.6	2.6	緻密	良好	5Y7/1 灰白	外: 施釉, 露胎 内: 施釉, 施文	白磁皿VIII-2b 類
5-7	工学部本館 北東部廃土中	白磁 皿	12.2	4.6	3.0	緻密	良好	5Y7/1 灰白	外: 施釉, 露胎 内: 施釉, 施文	白磁皿VIII-2b 類
5-8	工学部本館 北東部廃土中	青磁 碗	(17.2)		[6.0]	緻密	良好	10Y6/2 オリーブ灰	外: 施釉, 施文 内: 施釉	龍泉窯系青磁碗 II-b 類
5-9	4地点取上 No.2 黄褐色中砂	鉄製品 釘	[3.6]	[1.6]	0.6					木質付着
5-10	4地点取上 No.1 黄褐色中砂	土師器 甕	(18.4)		[4.0]	緻密, 直径1~2mmの砂粒を含む	良好	外: 5YR5/4にぶい赤褐 内: 10YR6/4にぶい黄橙	外: ハケメ, ナデ 内: ハケメ	

第4表 立試1925地点出土遺物観察表

図	遺構	種類	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	胎土	焼成	色調	調整	備考
6-1	ST2501	陶器 甕棺		27.7	[25.2]	緻密, 直径2~3mmの砂粒をわずかに含む	良好	外: 2.5YR6/6橙 内: 2.5YR6/4にぶい橙	外: ナデ, 施釉 内: ナデ, 施釉	底部外面に墨書有
6-2	ST2501	土師器 皿		(4.2)	[0.8]	緻密	良好	外: 7.5YR7/3にぶい橙 内: 7.5YR7/4にぶい橙	外: ナデ, 系切り 内: ナデ	
6-3	ST2502	陶器 甕棺		30.0	[66.0]	緻密, 直径3mm大の砂粒・赤色粒子を含む	良好	外: 7.5YR4/3褐 内: 7.5YR2/2黒褐	外: タタキ, ナデ, 施釉 内: タタキ, ナデ, 施釉	
6-4	ST2503	陶器 甕棺	55.0	26.2	72.0	緻密, 直径1~2mmの赤色粒子・黒色粒子を少し含む	良好	外: 2.5Y8/4淡黄 内: 7.5YR2/2黒褐	外: タタキ, ナデ, 施釉 内: タタキ, ナデ, 施釉	口縁部と底部外面に砂メアト有
6-5	ST2504	陶器 甕棺		27.8	[48.0]	緻密, 直径1~2mmの砂粒・赤色粒子・黒色粒子を含む	良好	外: 5YR3/3暗赤褐 内: 5YR3/4暗赤褐	外: タタキ, ナデ, 施釉 内: タタキ, ナデ, 施釉	底部外面にメアト有
6-6	ST2504 格外	土師器 皿	8.8	6.6	1.5	緻密, 直径1mm大の砂粒・雲母片を含む	良好	7.5YR7/4 にぶい橙	外: ナデ, 系切り, 板状圧痕 内: ナデ	

I 箱崎遺跡—九州大学箱崎キャンパス地区—について

図	遺構	種類	口径/ 長さ	底径/ 幅	器高/ 厚さ	胎土	焼成	色調	調整	備考
6-7	ST2504	土師器 皿	7.6	3.4	1.5	緻密, 雲母片を含む	良好	外: 10YR7/3にぶい黄橙 内: 10YR7/2にぶい黄橙	外: ナデ, 糸切り, 板状圧痕 内: ナデ	
6-8	ST2504	土師器 皿	7.5	3.6	1.5	緻密, 雲母片を含む	良好	10YR7/2 にぶい黄橙	外: ナデ, 糸切り, 板状圧痕 内: ナデ	
6-9	ST2504	銅製品 キセル吸口	[5.0]	1.2	1.4					羅宇の一部が残存
6-10	ST2504	銅製品 キセル首部	[4.2]	1.5	1.8					羅宇の一部が残存
6-11	ST2504	銅製品 銭	3.2	3.3	1.6					6枚錆着
6-12	ST2504	鉄製品 鉄	[8.5]	[3.5]	1.0					
6-13	ST2504	鉄製品 鉄	[3.9]	[2.3]	0.7					
6-14	ST2505	土師器 皿	7.8	3.5	1.8	緻密, 直径1mm弱の砂 粒・雲母片を少し含む	良好	7.5YR7/4 にぶい橙	外: ナデ, 糸切り 内: ナデ	
6-15	ST2505	土師器 皿		(5.4)	[1.6]	緻密, 直径1~2mmの砂 粒を少し含む	良好	7.5YR7/4 にぶい橙	外: ナデ, 糸切り 内: ナデ	
6-16	ST2505	銅製品 キセル首部	[6.8]	1.5	2.1					羅宇の一部が残存
6-17	ST2505	銅製品 キセル吸口	[8.6]	1.2	1.2					羅宇の一部が残存
6-18	ST2505	木製品 扇	[7.3]	[0.5]	0.3					親骨
6-19	ST2505	銅製品 銭	2.6	2.5	0.6					寛永通寶
6-20	ST2505	銅製品 銭	2.5	2.6	0.3					寛永通寶
6-21	ST2505	銅製品 銭	2.4	2.4	0.2					
6-22	ST2505	銅製品 銭	2.3	2.3	0.3					
6-23	ST2505	銅製品 銭	2.5	2.4	0.3					寛永通寶
7-1	ST2506	陶器 甕棺	56.0	27.5	77.4	緻密	良好	外: 10YR7/2にぶい黄橙 内: 7.5YR6/2灰褐	外: 施釉, タタキ, ナデ, 施文 内: 施釉, タタキ, ナデ	
7-2	ST2506	土師器 皿	7.6	4.0	1.4	緻密, 直径2mm大の砂 粒・雲母片を少し含む	良好	7.5YR7/4 にぶい橙	外: ナデ, 糸切り 内: ナデ	
7-3	ST2506	土師器 皿	7.5	5.4	1.3	緻密, 直径1mm大の砂 粒・雲母片を多く含む	良好	10YR7/4 にぶい黄橙	外: ナデ, 糸切り 内: ナデ	スス付着
7-4	ST2506	土師器 皿	(7.6)	(5.7)	1.2	緻密, 直径1mm弱の砂 粒・赤色粒子・雲母片 を含む	良好	7.5YR6/3 にぶい褐	外: ナデ, 糸切り 内: ナデ	
7-5	ST2506	銅製品 キセル首部	[2.9]	1.8	2.0					
7-6	ST2506	銅製品 キセル吸口	[4.5]	[1.0]	1.1					羅宇の一部が残存
7-7	ST2506	銅製品 銭	2.6	2.5	0.8					6枚錆着
7-8	同一甕棺 出土	土師器 皿	8.3	3.0	1.7	緻密, 直径1mm大の砂 粒をわずかに含む	良好	10YR6/3 にぶい黄橙	外: ナデ, 糸切り 内: ナデ	
7-9	同一甕棺 出土	土師器 皿	8.0	3.4	1.5	緻密, 直径2mm大の砂 粒をわずかに含む	良好	外: 7.5YR7/4にぶい橙 内: 7.5YR8/4浅黄橙	外: ナデ, 糸切り 内: ナデ	
7-10	一括	土師器 皿	8.1	6.2	1.1	緻密, 直径2mm大の砂 粒・雲母片を含む	良好	7.5YR7/4 にぶい橙	外: ナデ, 糸切り, 板状圧痕 内: ナデ	
7-11	一括	土師器 皿	8.9	6.0	1.3	緻密, 直径2mm大の砂 粒・雲母片を含む	良好	10YR7/4 にぶい黄橙	外: ナデ, 糸切り, 板状圧痕 内: ナデ	
7-12	同一甕棺 出土	銅製品 金具	2.9	[4.1]	0.5					
7-13	同一甕棺 出土	銅製品 銭	2.7	2.8	0.6					4枚錆着
7-14	同一甕棺 出土	銅製品 銭	2.4	2.4	0.2					寛永通寶

第5表 立試2010地点出土遺物観察表

図	遺構	種類	口径/ 長さ	底径/ 幅	器高/ 厚さ	胎土	焼成	色調	調整	備考
5-3	立試2010	陶器 壺	19.9	20.4	29.6	緻密, 白色粒子・雲母 片を含む	良好	外: 10Y4/1灰 内: N3/ 暗灰	外: ナデ 内: ナデ	内部に骨片残存 (蔵骨器)

Ⅱ HZK2006地点（本部第二庁舎地点）

1. 調査の経緯

（1）調査の目的と経過

本調査地点は、箱崎キャンパス中央部東側に所在した本部第2庁舎の北側と南東側に位置しており、キャンパス全体の発掘調査グリッド（本報告書第I章第2図）ではS32・33にあたる。HZK2007地点（九州大学埋蔵文化財調査室報告第12集）の南側に位置している。

2016年度・2018年度に調査したHZK1602地点（本報告書第I章）とHZK1801地点（九州大学埋蔵文化財調査室報告第13集）は、本調査地点の北側に位置しており、近世の甕棺墓が多数確認されている。工学部本館付近から北側一帯は、中世から近世にかけての墓域が広がっていた可能性がある。

また、2019年度に、本調査地点の西側に位置する旧工学部本館北東側周辺で、配電線路等の改修工事に伴う立会調査が実施された（登録番号：1859）。調査の結果、中世墓の存在が確認されており、中国陶磁器や人骨が出土している。しかし、立会調査で調査面積も小規模だったこともあり、中世墓の実態については十分把握することができなかった。なお、旧工学部本館西側では福岡市教育委員会による発掘調査が実施されており（箱崎遺跡第102次・第108次調査）、12世紀後半と考えられる木棺墓が複数確認されている（阿部編 2022、本田編 2023）。

本調査地点は、上述した2019年度立会調査地点の東側に隣接しており、当該地点においても中世墓が見つかることが予想された。そこで、当該地点における中世墓を含めた墓の痕跡の有無を確かめるため、発掘調査の実施を計画した。建物基礎などで明らかに遺跡が破壊されている箇所を避けて調査区を設定し、本部第2庁舎の北側をA区、南東側をG区として調査を行うこととした（第1図）。令和2年10月6日付の福岡県教育委員会あて「九大統統第58号」にて埋蔵文化財発掘届を提出し、これに対して、福岡県教育委員会より令和2年10月20日付「2教文第561号-4」にて許可通知があった。11月16日に本調査地点の重機掘削を開始し、A区は12月1日から本格的な調査を、G区は1月6日から現地調査を開始した。（福永将大）

A区ははじめ、南北14m×東西15mの区域とその東側に4m×4m、南側に2m×13mの張り出し部が付いた調査区を本部第2庁舎の北側に設定した。南側の2m×13mの張り出し部分は配管により大きく攪乱を受けていた。設定調査区からはSX01～SK18の遺構を検出した。その後遺構が西側にも続くことから、西側に調査区を共同溝の攪乱部分まで南北11m×東西7m拡張した。南側に大きな攪乱が入っていたものの西側拡張区からはSP19～SK32の遺構を検出した。また北側にも遺構が広がる可能性が高いことから、調査区北側に南北14m×東西15mの拡張区を設けた。こちらも中央部分に大きな攪乱があったが、SK33～SK59の遺構を検出した。その結果南東部に較べて南西部や北部は遺構の密度が高いことが判明した。調査は令和3年3月31日に無事終了した。（谷直子）

G区は、本部第2庁舎の南東側に、南北47m×東西5mの調査区を設定した。重機によって調査区内を掘り進めたが、近現代以降の造成・攪乱が及んでおり、遺跡の大部分が破壊されていることが判明した。特に調査区西側は、本部第2庁舎建設に伴う工事の手が及んでおり、遺跡の破壊が著しい。幸いなことに、調査区東側半分の地表下1.2m付近において、遺構が複数残存していた。近現代以降の攪乱層を除去しつつ、これら遺構の調査を進めることとした。

遺構の調査を完了したのち、砂丘の堆積状況や形成過程を把握するため、調査区全体を深掘りして、

調査区東壁の土層断面を観察した。地表下1.5mほどで、細砂～中砂と粗砂が互層状に堆積して縞模様を呈する自然堆積層を確認した。本調査地点の西側に位置するHZK1901地点やHZK2004地点（福永編 2021）では、西下がりの緩やかな傾斜で縞模様を確認している。一方、本調査地点で確認した縞模様にはそうした傾斜を認めることができなかった。自然堆積層の縞模様の傾斜は、当時の砂丘の傾斜方向を示していると考えられる。少なくとも当該地点においては、北東－南西方向に砂丘が傾斜している様子は確認できないことが指摘できよう。なお、後述するように、この深堀りの過程で完形の白磁が出土し、木棺墓ST35を発見することになった。

発掘調査は令和3年3月5日に無事終了した。（福永将大）

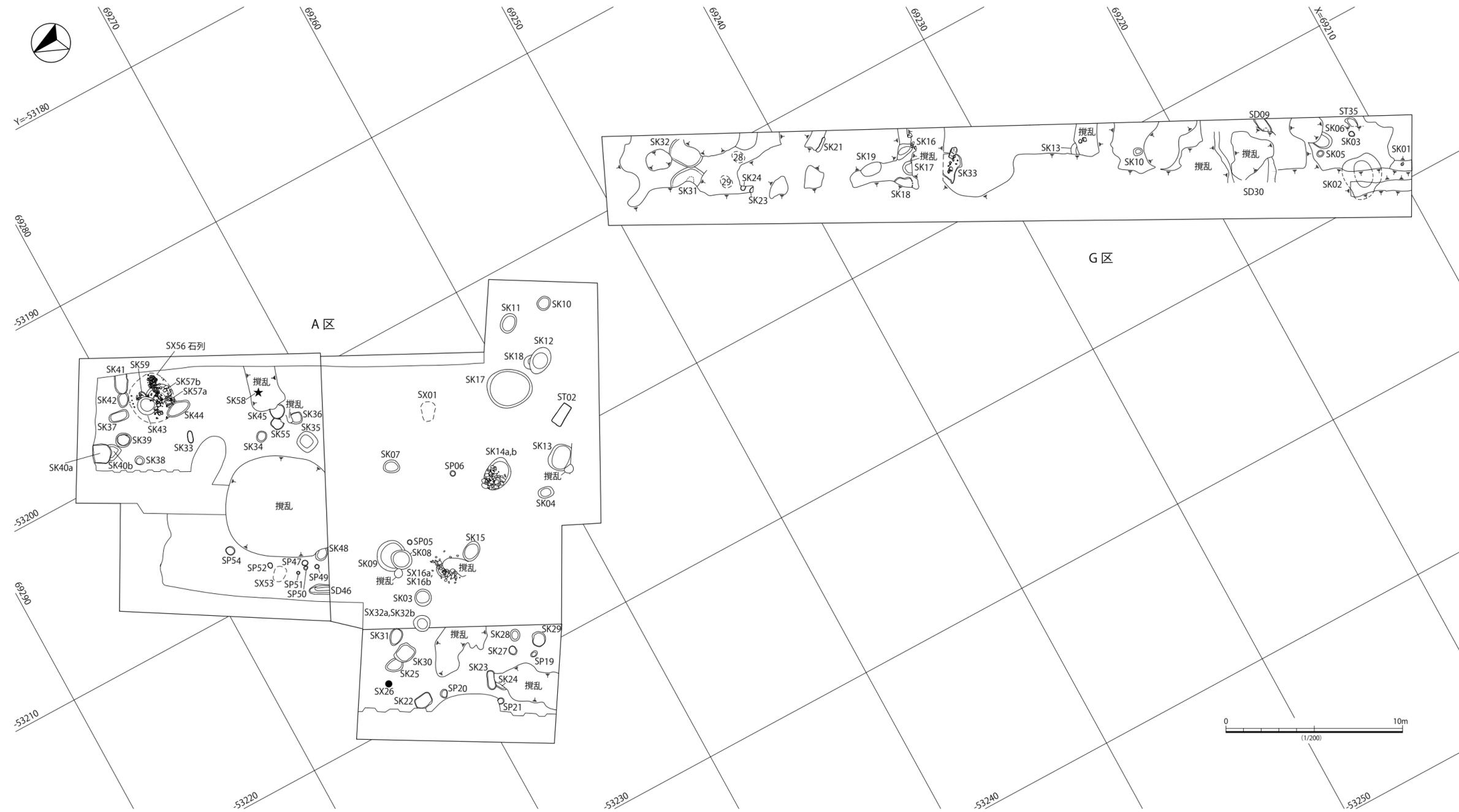
（2）調査要項

遺跡名	箱崎遺跡
地点名	九州大学箱崎キャンパス HZK2006地点（本部第二庁舎地点）
調査名	九州大学埋蔵文化財調査室調査番号：HZK2006 福岡市調査番号：2034、箱崎遺跡第114次調査
所在地	福岡市東区箱崎6-10-1
調査面積	1000㎡（HZK2006地点全体の調査面積）
調査原因	学術研究
調査期間	令和2年11月16日～令和3年3月31日
遺物量	コンテナ（内寸54cm×34cm×15cm）26箱
調査主体	九州大学埋蔵文化財調査室
発掘担当者	齋藤瑞穂 福永将大
調査作業員	浅田ふえ 穴井淳子 安部みゆき 有井みずえ 伊藤未紀 井上光江 犬山颯真 犬山琉清 岩田亜希子 浦崎てい子 奥 敦子 春日ゆかり 門脇尚子 金子伸子 川口裕子 川崎美保子 岸本佐知子 城野勝彦 釘崎知子 高武奈美 古閑美智子 定永靖史 真田 明 鈴村圭祐 節政喜憲 竹本葉子 田尻倫也 田代 薫 田中悦子 田中裕子 手島由美 永濱弘子 仲前富美子 中村尚美 中山大輔 西浦喜久子 西田和廣 東島真弓 日並ゆみ子 深野人美 藤田房佳 松尾美恵 松下さゆり 松下由希子 三辻香奈子 見藤素子 美濃洋子 宮元亜希世 武藤マリ子 守 治美 安里由利子 山下聡子 山田幹裕 吉田辰義 渡辺みゆき
遺物整理担当	谷 直子
整理作業員	石井若香葉 板倉佳代子 伊藤未紀 岩田亜希子 尾座本洋子 小名真理子 甲斐千秋 榎本真理 門脇美徳 坂口由美子 白井恭子 田中えみ 田邊八子 富田文代 藤田房佳

2. 遺構と遺物

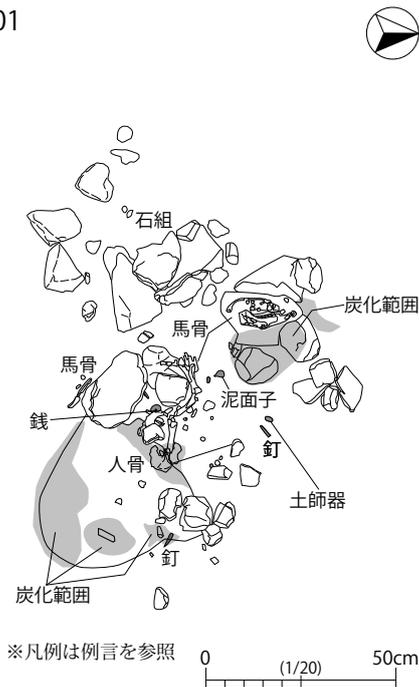
A 区

埋葬遺構SX01（第2図） 九大設置以降の整地層を剥ぐと、すでに骨片が散布し始める。この面で遺構等の存否を確認した際にまず検出されたのがSX01で、他の遺構より検出面は高い。骨・炭・

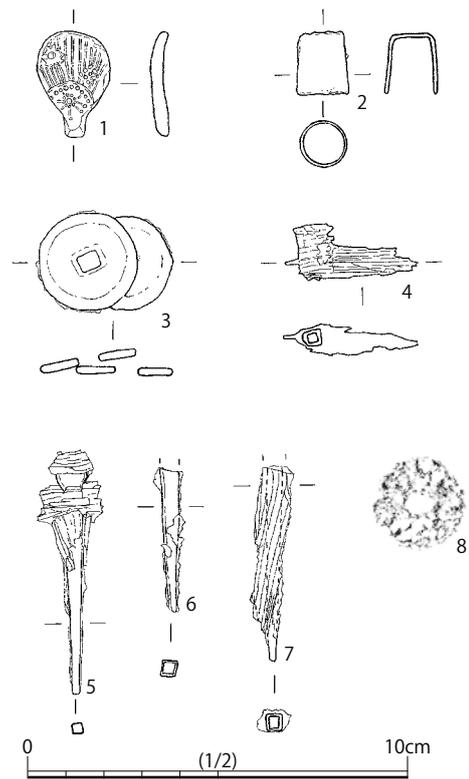


第1图 HZK2006地点遺構配置図

SX01



第2図 HZK2006地点A区埋葬遺構 SX01平面図

第3図 HZK2006地点A区
埋葬遺構 SX01出土遺物

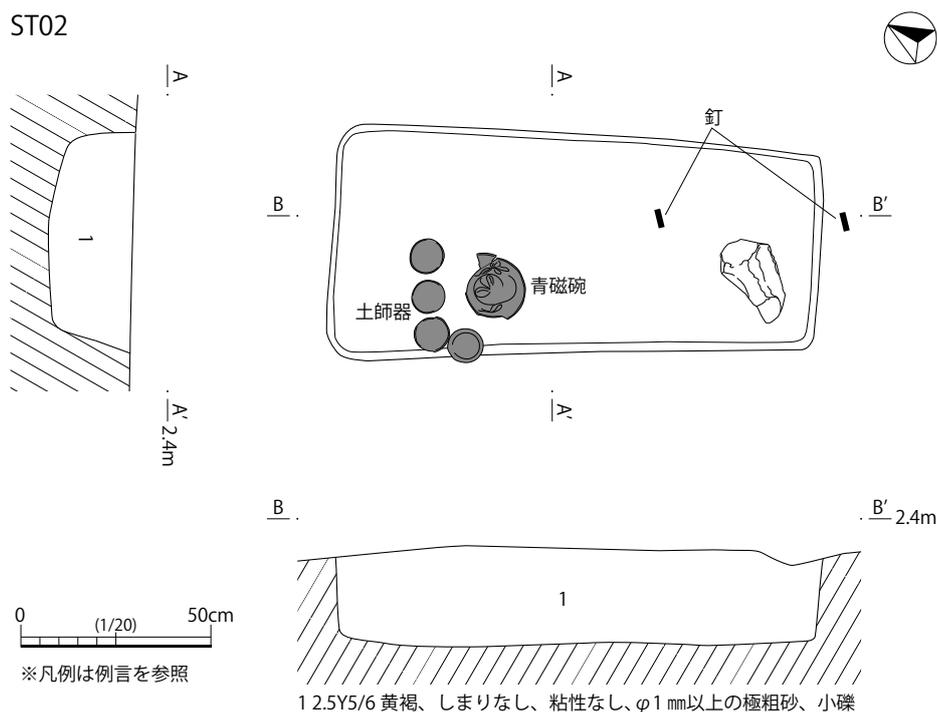
陶磁器・ゴミなどがまとまり、それらを除いていくと大ぶりの礫の上下に馬骨が、その下方に人骨の散らばりが認められた。馬骨は解剖学的位置を保つが、全体が遺存しているわけでない。他方、人骨は解剖学的位置を保っていない。銭貨や泥面子は人骨に伴うものと推測される。馬頭の東方に墓石の部材などを用いた石組が検出されたが、その内部からは何も出土しなかった。（齋藤瑞穂）

出土遺物（第3図） 1～8はSX01出土である。1は泥面子で、団扇を模している。2は指ぬき状の金属製品である。3は銅銭が2枚重なったものである。4～7は断面四角形の鉄釘である。4・5・7には木質が残る。8は無文銭である。他に土師器の坏・皿、須恵質の捏鉢、近世から近代の陶磁器、瓦が出土したが、小片で図化し得ない。（谷 直子）

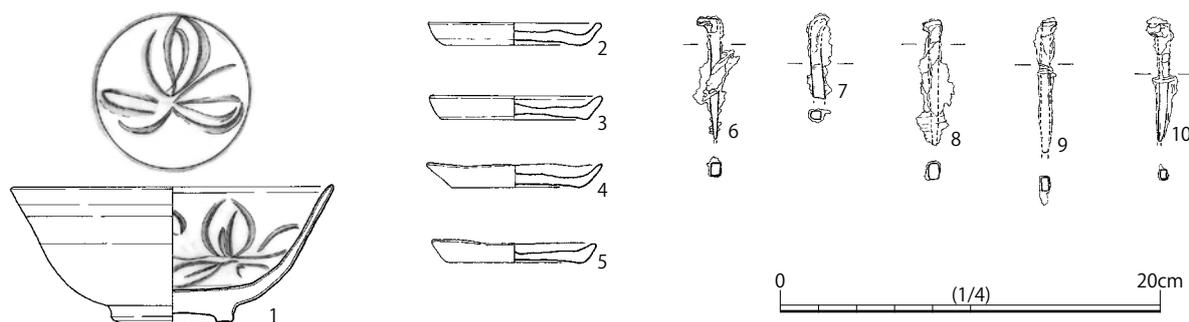
木棺墓 ST02（第4図） 隅丸長方形のプランで検出された木棺墓である。長軸130cm、短軸60cmを測り、形状から北頭位と推測される。確認面において、完形の土師皿および碗が上半身寄り（北側）に、大ぶりの礫が下半身寄り（南側）に検出された。また、鉄釘が検出されている。釘は確認面附近でのみ認められることからすると、蓋を棺身に打ち付ける際に用いたものであろう。土師皿や碗は蓋の上に置かれたものと推測される。（齋藤瑞穂）

出土遺物（第5図） 1は内面に片彫りで草花文を施す青磁碗である。高台内部の削りは浅く、底部は肉厚で、内面の花文は2単位である。大宰府編年の龍泉窯系青磁碗 I -2a' 類で、12世紀中頃から13世紀初頭の所産である（宮崎編 2000）。2～5は糸切り底の土師皿である。6～10は鉄釘である。いずれも断面四角形で、頂部を折り曲げ、木質が残る。（谷 直子）

土坑 SK03（第6図） 径97cm×93cmの円形土坑で、確認面からの深さは32cmである。遺物は出土していない。



第4図 HZK2006地点 A 区木棺墓 ST02平面・断面図



第5図 HZK2006地点 A 区木棺墓 ST02出土遺物

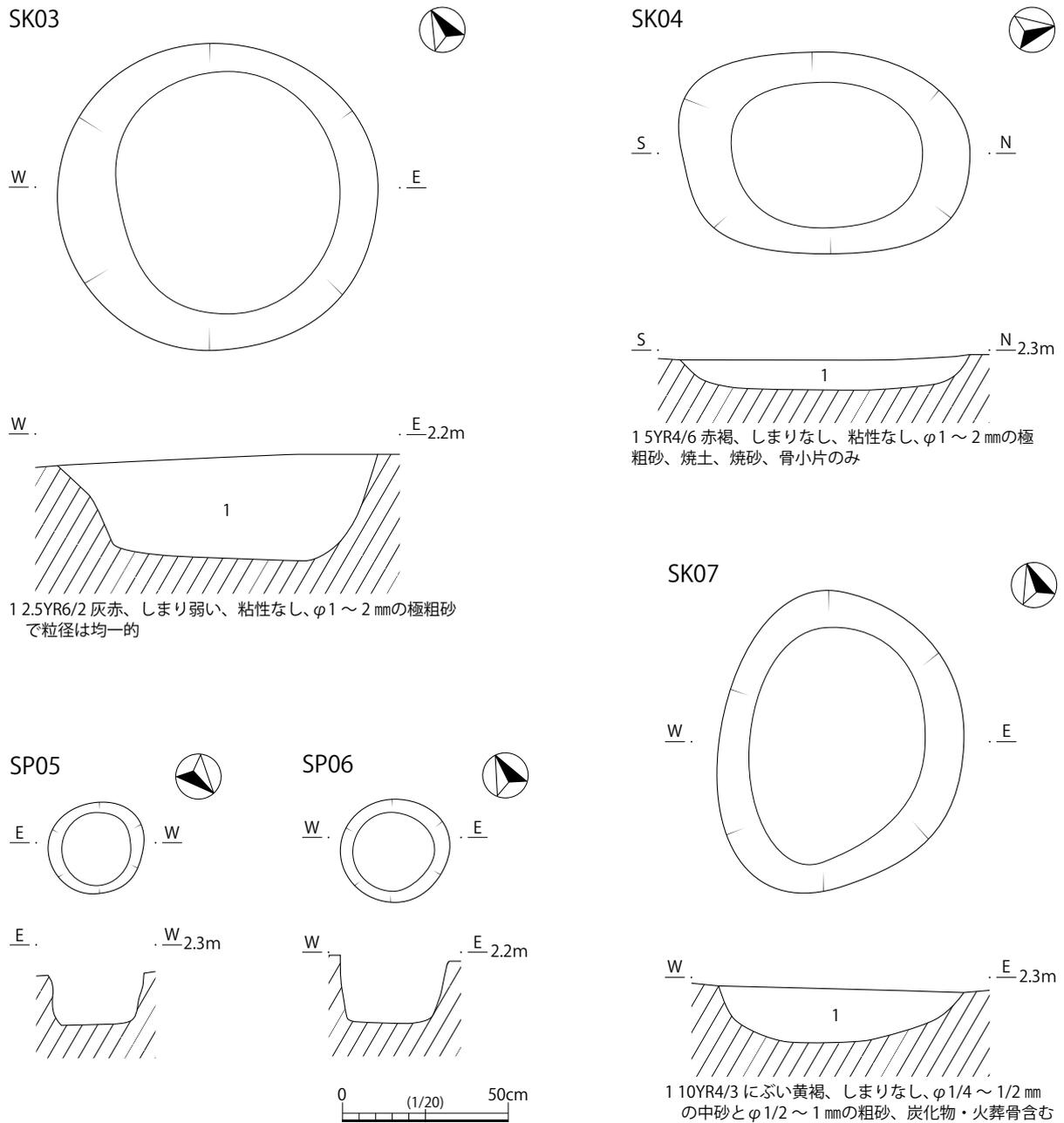
土坑 SK04（第6図） 長軸87cm、短軸61.5cm の楕円形土坑で、確認面からの深さは9cm である。赤変した砂が堆積して、火葬骨を少々含む。中央部は炭を多く含み焼土の赤みも強い。遺物は出土していない。

ピット SP05（第6図） 径28cm の円形ピットである。確認面からの深さは15cm を測る。遺物は出土していない。

ピット SP06（第6図） 径33cm の円形ピットである。確認面からの深さは20cm を測る。遺物は小片で図化し得ない。

土坑 SK07（第6図） 長軸91cm、短軸75cm の楕円形土坑で、確認面からの深さは16cm である。覆土に炭化物や火葬骨を含む。土師器片が出土したが、小片で図化し得ない。

土坑 SK08・SK09（第7図） SK09が古く、SK08がそれを切る。SK09は径173cm の円形土坑で、確認面からの深さは33cm を測る。他方、SK08は長軸123cm、短軸112cm の楕円形土坑で、確認面からの深さは31cm である。両土坑とも火葬骨をわずかに含んでいた。SK08からは土師器の坏・皿が、



第6図 HZK2006地点A区土坑 SK03・04・ピット SP05・06・土坑 SK07平面・断面図

SK09からは土師器片が出土したが、小片で図化し得ない。

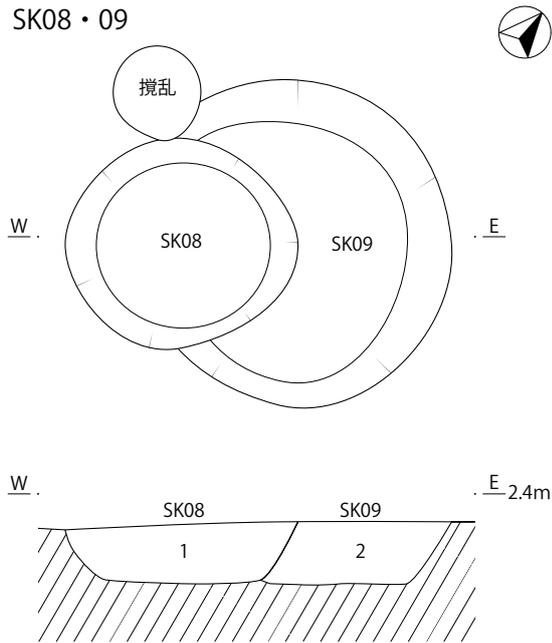
火葬土坑 SK10（第7図） 径81cm×74cmの円形土坑で、確認面からの深さは16cmである。上層から夥しい数の火葬骨片が出土した。特に土坑中央部の、同一レベルに集中がみられることから、火葬土坑の可能性が高い。SK10からは土師皿、磁器片が出土したが、いずれも小片で図化し得ない。

土坑 SK11（第7図） 長軸115cm、短軸85cmの楕円形土坑で、確認面からの深さは25cmである。確認面に近い位置で、火葬骨や瓦質土器が出土している。SK11からは土師器片、瓦質土器の火鉢、瓦が出土したが、いずれも小片で図化し得ない。
（齋藤瑞穂・谷 直子）

土坑 SK12・SK18（第7・8図） SK18が古く、SK12がそれを切る。SK12は長軸160cm、短軸

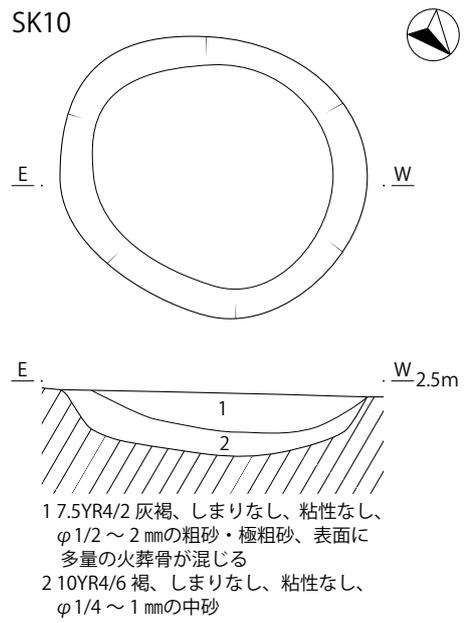
II HZK2006地点 (本部第二庁舎地点)

SK08・09



《SK08》
 1 10YR4/6 褐、しまりふつう、粘性なし、 ϕ 1/4 ~ 2 mmの中砂~極粗砂
 《SK09》
 2 10YR5/3 にぶい黄褐、しまりふつう、粘性なし、 ϕ 1/4 ~ 1/2 mmの中砂に ϕ 2 mm以上の小礫が混じる

SK10

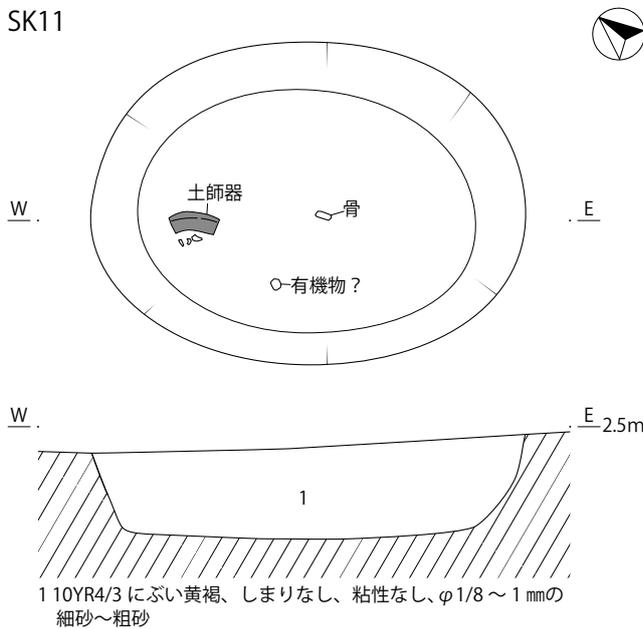


1 7.5YR4/2 灰褐、しまりなし、粘性なし、 ϕ 1/2 ~ 2 mmの粗砂・極粗砂、表面に多量の火葬骨が混じる
 2 10YR4/6 褐、しまりなし、粘性なし、 ϕ 1/4 ~ 1 mmの中砂

0 (SK10・11:1/20) 50cm

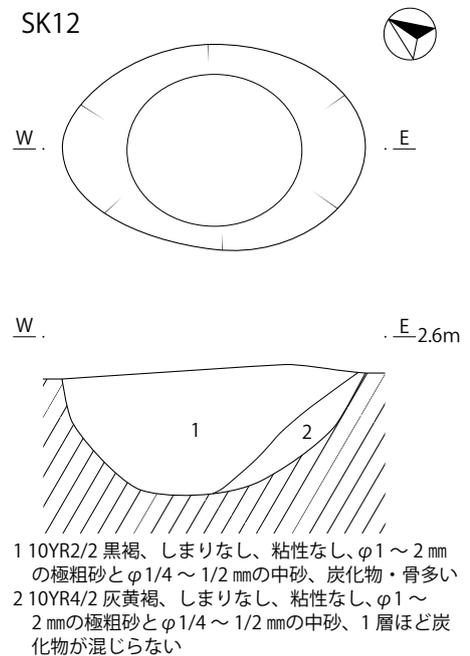
0 (SK08・09・12:1/40) 1m

SK11



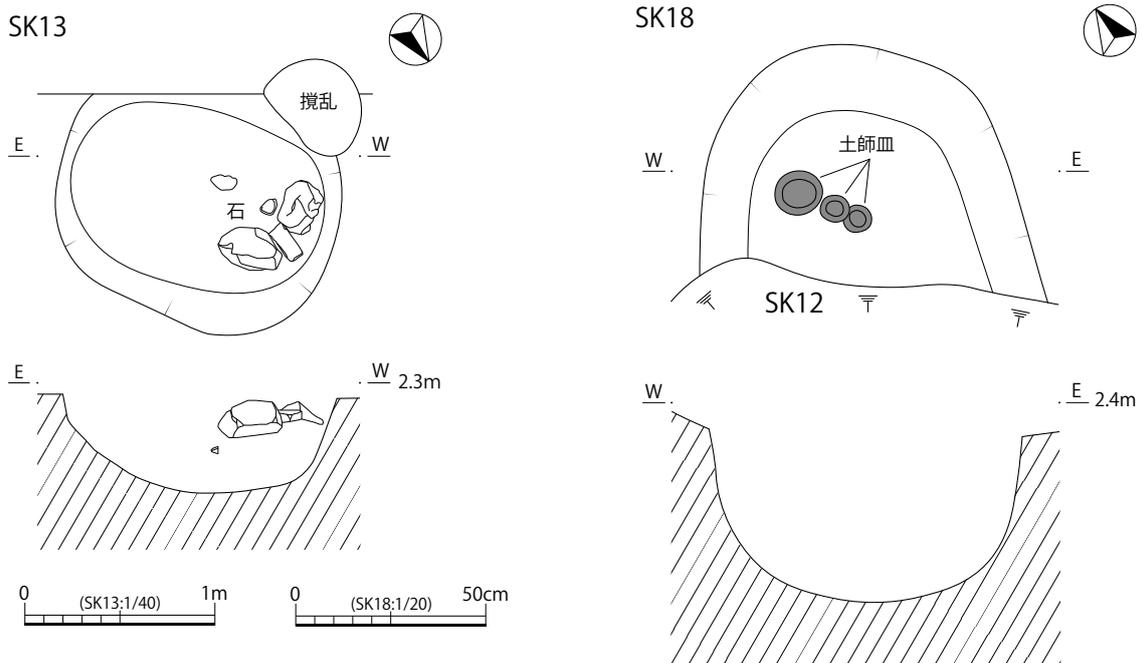
1 10YR4/3 にぶい黄褐、しまりなし、粘性なし、 ϕ 1/8 ~ 1 mmの細砂~粗砂

SK12

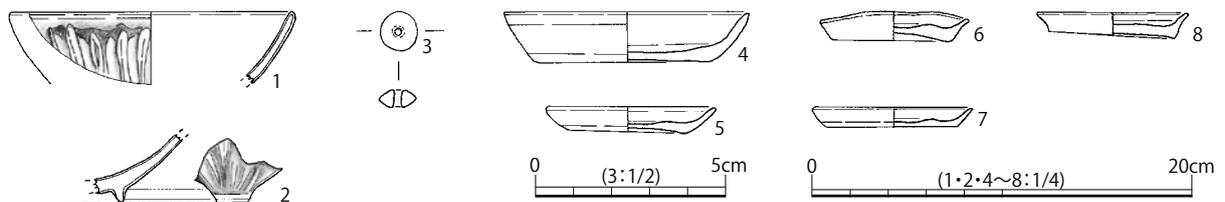


1 10YR2/2 黒褐、しまりなし、粘性なし、 ϕ 1 ~ 2 mmの極粗砂と ϕ 1/4 ~ 1/2 mmの中砂、炭化物・骨多い
 2 10YR4/2 灰黄褐、しまりなし、粘性なし、 ϕ 1 ~ 2 mmの極粗砂と ϕ 1/4 ~ 1/2 mmの中砂、1層ほど炭化物が混じらない

第7図 HZK2006地点 A区土坑 SK08・09・火葬土坑 SK10・土坑 SK11・12平面・断面図



第8図 HZK2006地点 A 区土坑 SK13・18平面・断面図



第9図 HZK2006地点 A 区土坑 SK12・18出土遺物

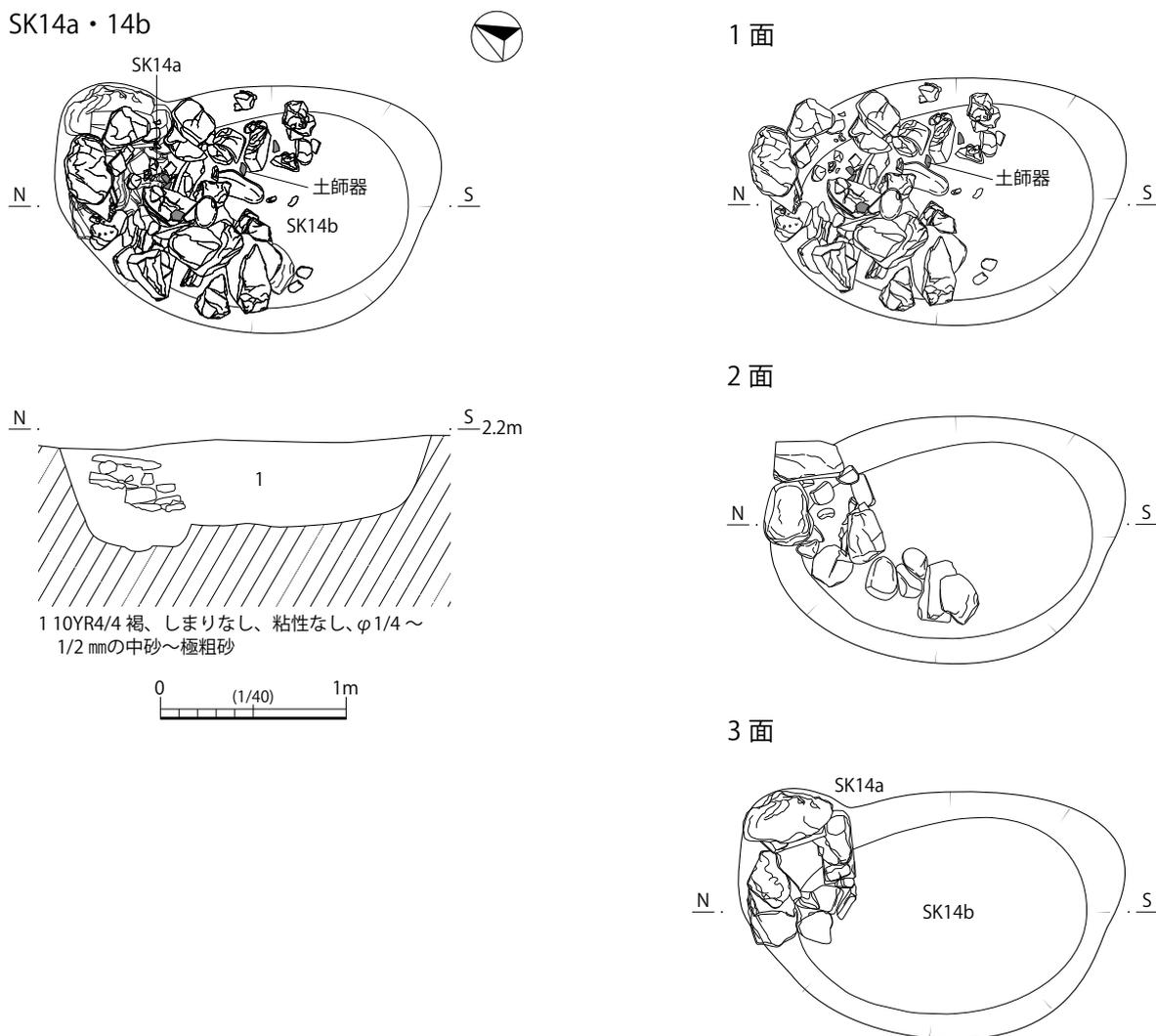
109cmの楕円形土坑である。確認面からの深さは66cmで、播鉢状に開く。覆土は焼土や炭化物を多く含むが、火葬骨片は少ない。SK18は、SK12の掘削時に壁面で検出し得た遺構である。東西90cmを測り、確認面からの深さは48cmである。土師皿が3枚並び、1枚がその下に重なる。(齋藤瑞穂)

出土遺物(第9図) 1～3はSK12出土である。1・2は鎬蓮弁の青磁碗で同一個体と思われる。いずれも釉は厚くかかり、青緑色を呈す。蓮弁の幅は細く、大宰府編年の龍泉窯系青磁碗Ⅲ-2類で、13世紀中頃から14世紀初頭の所産である(宮崎編 2000)。3は断面が楕円形のガラス製の玉である。4～8はSK18出土で、糸切り底の土師器である。4は坏、5～8は皿である。(谷 直子)

土坑 SK13(第8図) 東西151cmを測り、南北は128cm以上となる。確認面からの深さは52cmである。火を受けた大型の礫が西方から流れ込んでおり、これらは火葬土坑の棺台として用いられたものと推測される。火葬骨が少量出土している。SK13からは土師器の坏・皿、陶器壺、瓦が出土したが、小片で図化し得ない。(齋藤瑞穂・谷 直子)

土坑 SK14a・SK14b(第10図) 当初、礫が集中する土坑として検出した遺構である。礫は特に土坑の北側に集中するが(1面)、確認面の礫を外していくと、北壁に沿って方形の石組が検出され、石組が南に向かって崩された様子が確認された(2面)。すなわちSK14は、石組を設置した当初の土坑(SK14a)と、その後石組が崩される要因となった再掘削時の土坑(SK14b)との2回の行為の

SK14a・14b



第10図 HZK2006地点 A 区土坑 SK14a・14b 平面・断面図

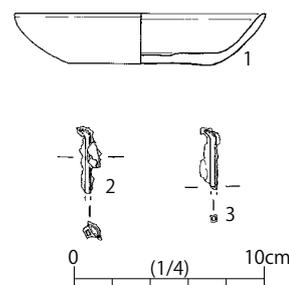
結果とみられる。SK14a は長軸80cm、短軸66cm の楕円形土坑として復原し得る。壁に沿って石組を作る。5段積み上げ、内部は1辺30cm 四方の小さな室を形成するが、何も残されていない（3面）。石組を破壊したSK14b の形成時に持ち去られた可能性が考えられよう。SK14b は長軸189cm、短軸134cm の楕円形プランで、確認面からの深さは47cm である。少量の火葬骨と、土器片等が出土した。

（齋藤瑞穂）

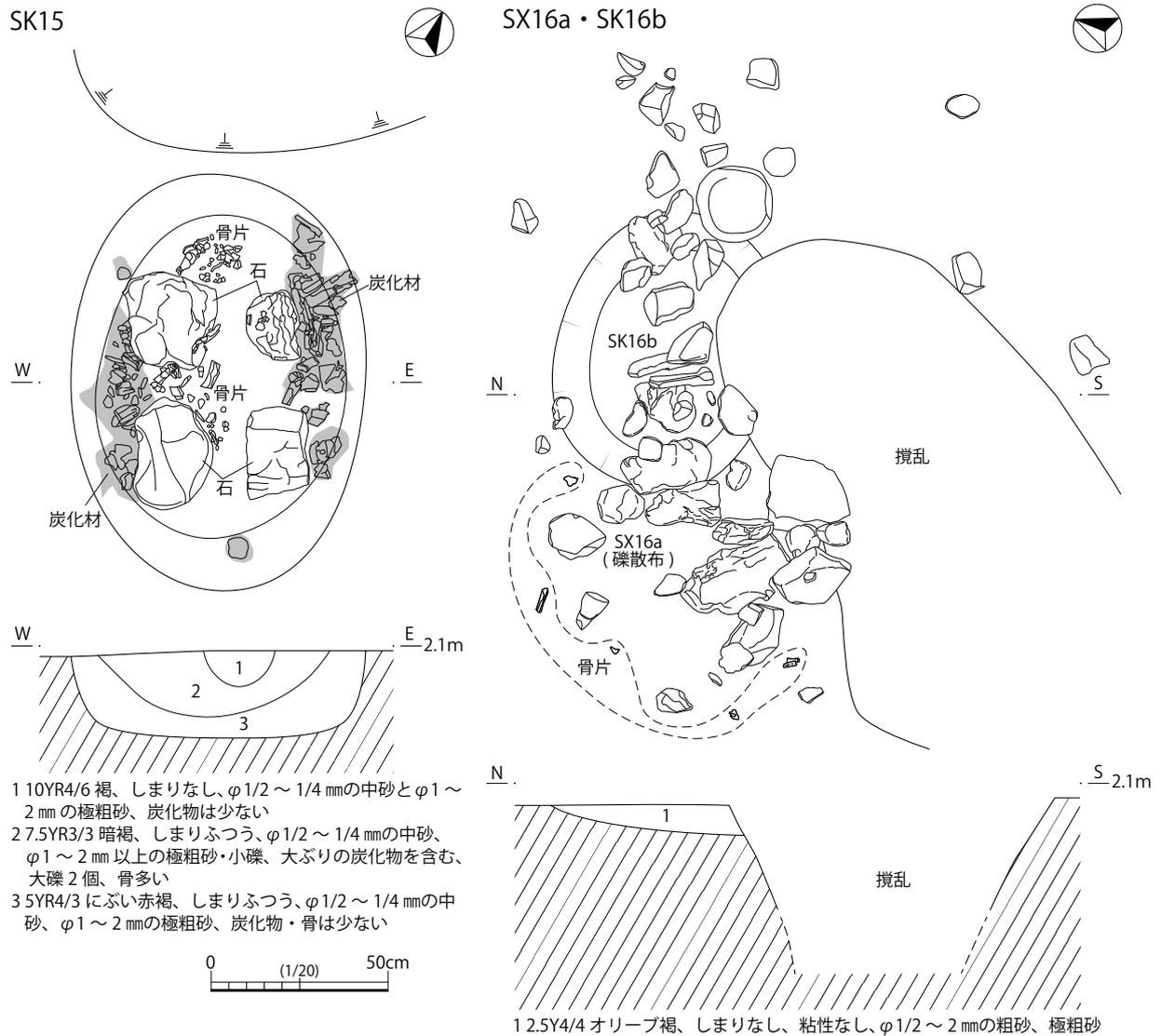
出土遺物（第11図） 1～3はSK14b 出土である。1は糸切り底の土師器の坏である。2・3は鉄釘で、いずれも断面四角形で、頂部を折り曲げている。

（谷 直子）

火葬土坑 SK15（第12図） 長軸118cm、短軸83cm の楕円形を呈する。確認面からの深さは25cm で、坑底に平坦面を有する。棺台の4石は上面のレベルを揃えて据えられ、この上面が特に被熱している。火葬骨片は1層・2層に集中し、3層は少ない。炭化材もまた1層・2層に集中し、特に棺台の周囲にまとまる。土師器片が出



第11図 HZK2006地点 A 区土坑 SK14b 出土遺物



第12図 HZK2006地点 A 区火葬土坑 SK15・礫集中 SX16a・土坑 SK16b 平面・断面図

土したが、小片で図化し得ない。

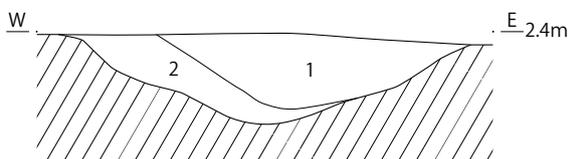
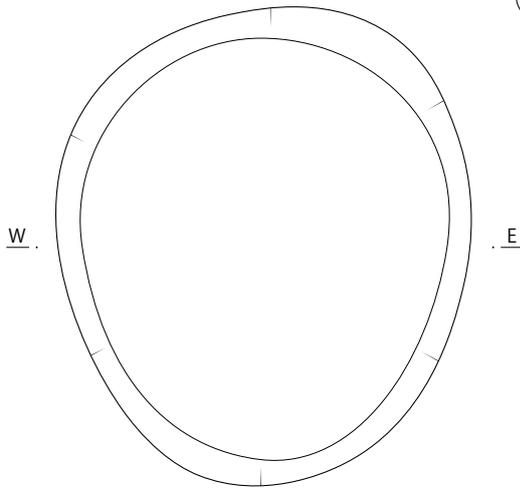
礫集中 SX16a・土坑 SK16b (第12図) 東西220cm、南北150cmの範囲で礫の集中が検出された。これを礫集中 SX16a と呼ぶ。小砂利が散布し、その下方に大ぶりの礫が散らばる。礫に加え、石塔の部材もみられるが、並べたようではない。この下方に、浅い土坑が検出された。これを SK16b と呼ぶ。東西80cm、検出面からの深さは8cm にすぎない。SX16a における礫の間隙や、SK16b 内からは火葬骨や土師器片が出土している。ただし、小片で図化し得ない。(齋藤瑞穂・谷 直子)

土坑 SK17 (第13図) 長軸256cm、短軸223cmの楕円形土坑で、確認面からの深さは48cmである。焼土混じりの砂が東側から流れ込む。火葬骨や土師器が出土している。(齋藤瑞穂)

出土遺物 (第14図) 1～6は糸切り底の土師器の坏である。7は糸切り底の土師皿。8・9は断面四角形の鉄釘で木質が付く。(谷 直子)

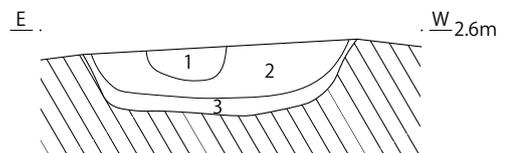
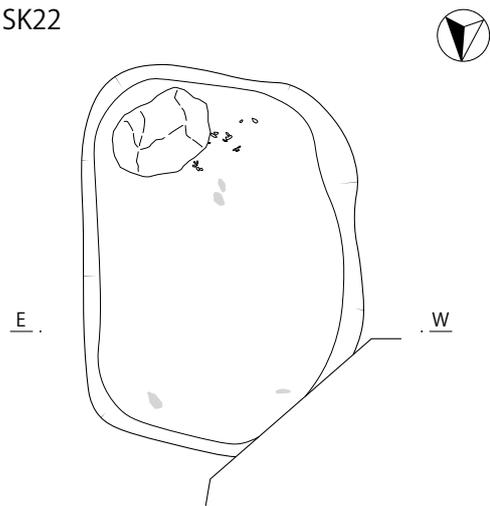
ピット SP19 (第13図) 長軸43cm、短軸30cmの楕円形ピットで、確認面からの深さは18cmを測る。

SK17



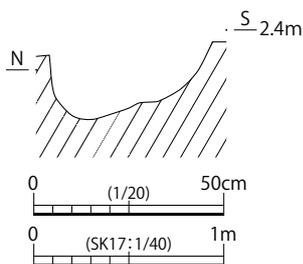
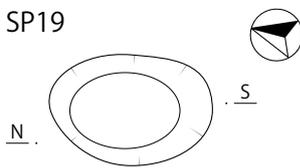
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐、しまりなし、粘性なし、 ϕ 1/4 ~ 2mmの中砂~極粗砂、遺物・礫の殆どはこの層
- 2 10YR3/2 黒褐、しまりなし、粘性なし、 ϕ 1/4 ~ 1mmの中砂、粗砂

SK22

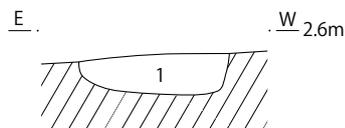
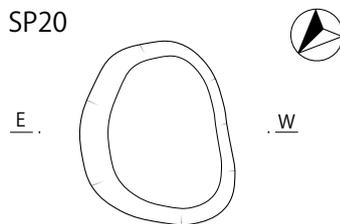


- 1 10YR5/6 黄褐、しまりなし、粘性なし、 ϕ 1/4 ~ 1mmの中砂、粗砂
- 2 7.5YR2/2 黒褐、黒褐だが少し赤味がある、しまりふつう、粘性なし、 ϕ 1/4 ~ 2mmの中砂~極粗砂、炭化物・火葬骨が多量、礫あり
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐、しまりなし、粘性なし、炭化物あり

SP19

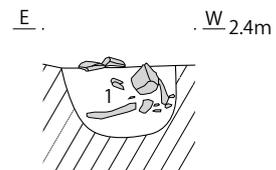
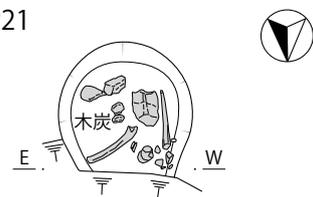


SP20



- 1 7.5YR5/4 にぶい褐、しまりなし、粘性なし、 ϕ 1/4 ~ 1/2mmの中砂、骨含む

SP21

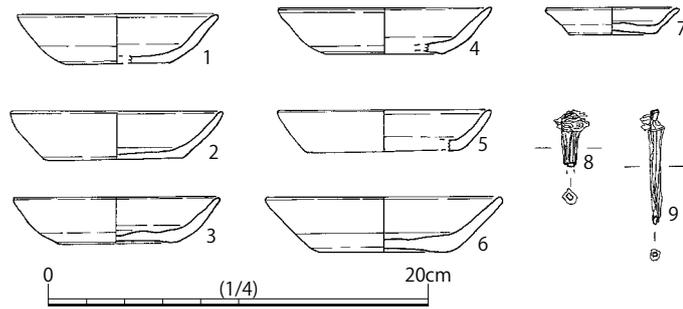


- 1 10YR4/3 にぶい黄褐、しまりなし、粘性なし、 ϕ 1/4 ~ 1mmの中砂、粗砂、炭化材・火葬骨含む

第13図 HZK2006地点 A 区土坑 SK17・ピット SP19~21・火葬土坑 SK22平面・断面図

SP19からは遺物は出土していない。
 ピット SP20 (第13図) 長軸48cm、短軸40cmの楕円形ピットで、確認面からの深さは11cmを測る。SP20からは遺物は出土していない。

ピット SP21 (第13図) 北側が失われた小ピットで、径は36cmほどと推測される。確認面からの深さは18cmを測る。炭化材と火葬骨片を含む。SP21からは遺物は出土していない。



第14図 HZK2006地点A区土坑SK17出土遺物

火葬土坑 SK22 (第13図) 長軸101cm、短軸74cmの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは19cmで、坑底に平坦面を有する。棺台は1石のみ遺り、覆土は炭化物・焼土・火葬骨片を含む。中央北寄りの位置に、地山の黄褐色砂が堆積している部分があり(1層)、火葬後に行われた何らかの行為を反映している可能性があるが、詳しくはわからない。土師器片が出土したが、小片で図化し得ない。(齋藤瑞穂・谷直子)

火葬土坑 SK23・土坑 SK24 (第15図) 2つの土坑と樹木による攪乱が重なる。SK24が最も古く、SK23がそれを切り、樹木が両遺構を攪乱しているらしい。SK24はほとんどが攪乱を受けているため、詳しい性格などはわからない。大ぶりの礫のほか、わずかに炭化物と火葬骨が出土している。SK24を切っているSK23は長軸110cm、短軸50cm、確認面からの深さは30cmを測る。南側に樹木の攪乱を受けているが、全体の形状からすると影響は少しにとどまったようである。SK24に伴う礫が一部顔を出し、SK23にかかる部分のみ被熱している。このほか中央に大ぶりの礫がある。棺台であろう。土坑としてはやや小ぶりであるが、炭化物、火葬骨に加え、被熱した礫や棺に用いたらしい鉄釘が認められることから、火葬土坑と理解したい。(齋藤瑞穂)

出土遺物 (第16図) 1・2はSK23出土の鉄釘である。断面四角形を呈す。他に土師皿が出土したが、小片で図化し得ない。SK24からは遺物は出土していない。(谷直子)

火葬土坑 SK25・SK30 (第15図) 当初近接する2つの土坑と推測していたが、精査の過程で重複することが判明した。SK25のプランは南側で、SK30に切られる。SK25は中央に棺台として設置した礫があり、その南側に火葬骨が集中する。長軸102cm、短軸76cmである。SK30は7石を棺台として配置した火葬土坑である。長軸111cm、短軸103cmの隅丸方形を呈する。棺台の下からも火葬骨が出てきており、棺台を追加して複数回の火葬が行われたことを示す。土坑内は炭化物や火葬骨を多数含む黒褐色砂で埋まる。ただし、地山の黄褐色砂が柱状に堆積した箇所がある点に注意したい(1層)。SK22の1層が椀状、本火葬土坑が柱状という違いはあるものの、何らかの共通する行為が行われたことを推測させる。(齋藤瑞穂)

出土遺物 (第16図) SK25からは土師皿が出土したが、小片で図化し得ない。5～14はSK30出土である。5・6は断面四角形の鉄釘である。6は先端が曲がっている。7～14は断面が楕円形を呈する木製玉で、13・14はつながった状態で出土した。一連のもので、数珠の一部と考えられる。他に土師器片が出土したが、小片で図化し得ない。(谷直子)

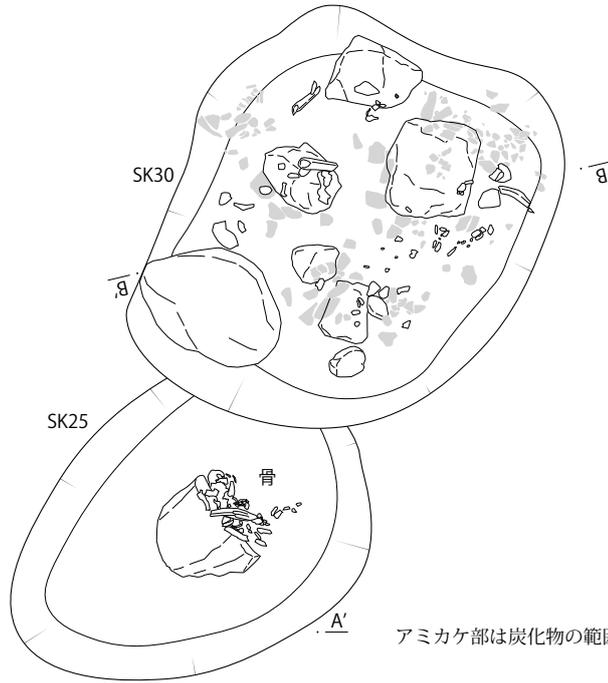
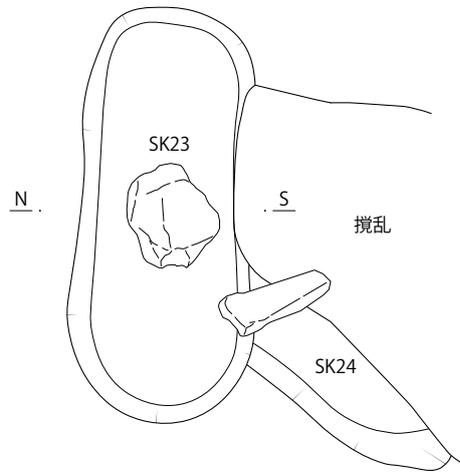
石塔 SX26 (第1図) 石塔部材の出土地点である。五輪塔の火輪が逆位で出土した。(齋藤瑞穂)

土坑 SK27 (第17図) 径50cm×46cmの円形土坑で、確認面からの深さは4.5cmである。大ぶり

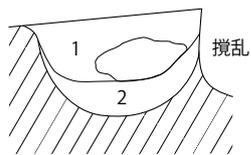
SK23・24



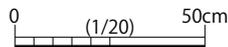
SK25・30



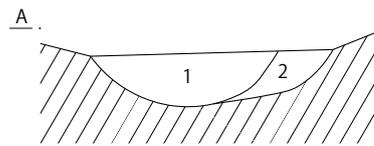
N . S 2.5m



1 10YR2/2 黒褐、しまりなし、粘性なし、φ1/4～1mmの中砂、粗砂で骨が多く含まれる
2 10YR4/3 にぶい黄褐、しまりなし、粘性なし、φ1/4～1mmの中砂、粗砂

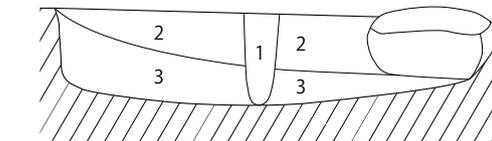


A . A' 2.3m



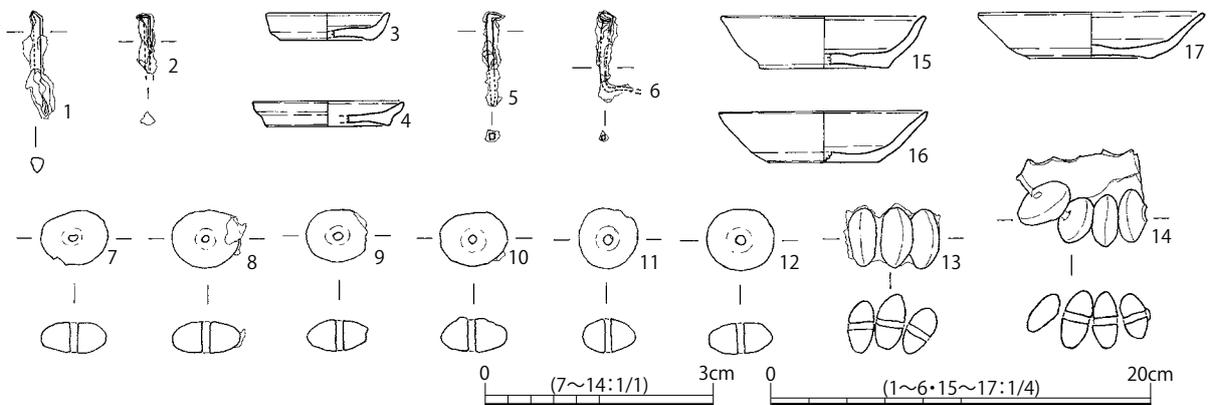
アミカケ部は炭化物の範囲
1 10YR2/2 黒褐、しまりなし、粘性なし、φ1/4～1mmの粗砂、中砂、大ぶりの火葬骨を多量に含む、赤変した焼土含む
2 10YR4/4 褐、しまりなし、粘性なし、φ1/4～1mmの粗砂、中砂、骨含む

B . B' 2.5m



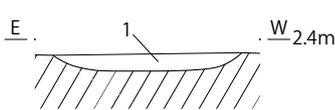
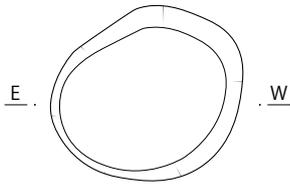
1 10YR5/6 黄褐、しまりなし、粘性ふつう、φ1/4～1mmの中砂、粗砂
2 7.5YR2/2 黒褐、しまり強い、粘性なし、φ1/4～1/2mmの中砂で粒径は均一的、炭化物・骨はほとんどこの層に含まれる
3 10YR4/3 にぶい黄褐、しまりなし、粘性なし、φ1/4～1mmの中砂でφ2mm以上の小礫が少し混じる、骨・遺物はほほない

第15図 HZK2006地点 A区火葬土坑 SK23・土坑 SK24・火葬土坑 SK25・30平面・断面図



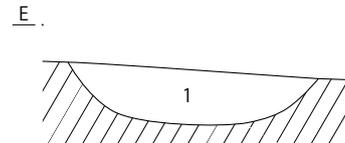
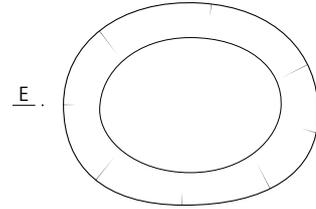
第16図 HZK2006地点 A区火葬土坑 SK23・土坑 SK29・火葬土坑 SK30・礫集中 SX32a 出土遺物

SK27



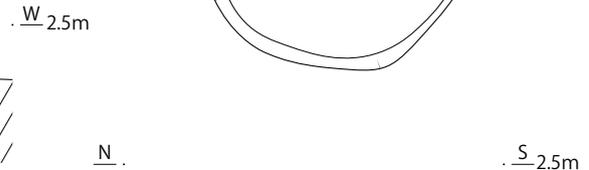
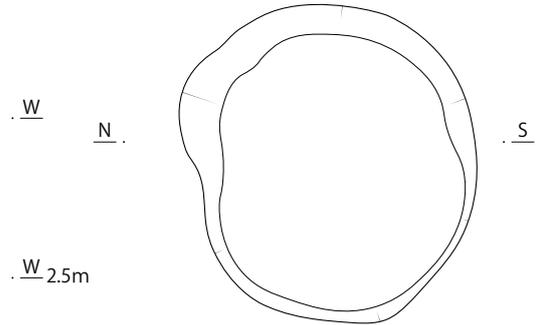
1 2.5Y4/4 オリーブ褐、しまりなし、粘性なし、 ϕ 1/4 ~ 1 mmの中砂、粗砂

SK28



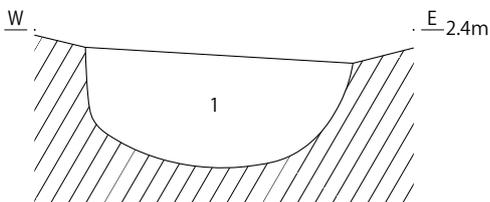
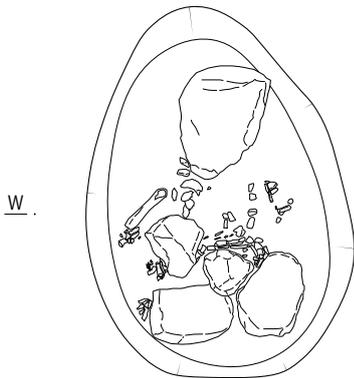
1 2.5Y3/3 暗オリーブ褐、 ϕ 1/4 ~ 1 mmの中砂、粗砂に ϕ 1 ~ 2 mmの極粗砂混じる

SK29

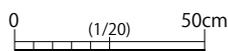


1 10YR4/3 にぶい黄褐、しまりなし、粘性なし、 ϕ 1/4 ~ 1 mmの中砂、粗砂で混じりはない

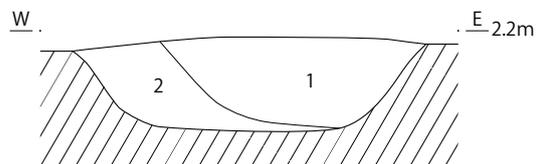
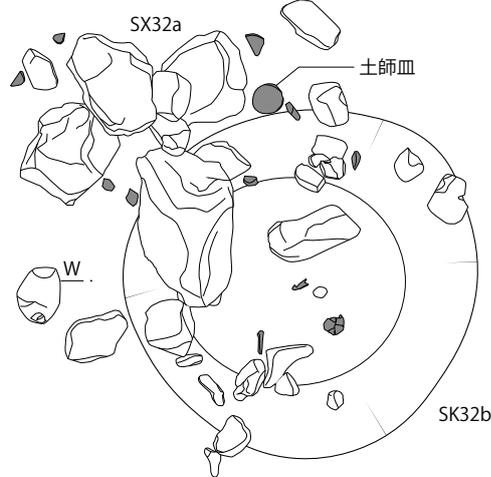
SK31



1 7.5YR4/2 灰褐、しまりなし、粘性なし、 ϕ 1/4 ~ 1 mmの中砂、粗砂



SX32a・SK32b



1 2.5Y4/4 オリーブ褐、しまりふつう、粘性なし、 ϕ 1/4 ~ 1 mmの粗砂、中砂に ϕ 2 mm程度の極粗砂が混じる
2 10YR4/3 にぶい黄褐、しまり弱い、粘性なし、 ϕ 1/4 ~ 1 mmの粗砂、中砂に ϕ 1 ~ 2 mmの極粗砂を含む

第17図 HZK2006地点 A 区土坑 SK27~29・火葬土坑 SK31・礫集中 SX32a・土坑 SK32b 平面・断面図

の礫が1層から出土しているが、被熱していない。このほか、火葬骨や土師器片が出土したが、小片で図化し得ない。

土坑 SK28（第17図） 長軸68cm、短軸52cmの楕円形土坑で、確認面からの深さは14cmである。火葬骨が出土している。SK28からは土師器片が出土したが、小片で図化し得ない。

（齋藤瑞穂・谷 直子）

土坑 SK29（第17図） 長軸84cm、短軸77cmの楕円形土坑である。確認面からの深さは33cmで、覆土に火葬骨を含む。

（齋藤瑞穂）

出土遺物（第16図） 3・4はSK29出土の糸切り底の土師皿である。

（谷 直子）

火葬土坑 SK31（第17図） 長軸100cm、短軸75cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは30cmである。棺台の5石は、上面のレベルを揃えて据えられる。棺台の間から火葬骨がまとめて出土した。SK31からは土師器片が出土したが、小片で図化し得ない。

（齋藤瑞穂・谷 直子）

礫集中 SX32a・土坑 SK32b（第17図） 径120cmの範囲で礫の集中が検出された。これを礫集中 SX32aと呼ぶ。砂岩・礫岩が多い。礫は被熱した痕跡があるものの並べたものでないため、火葬土坑とは評価できない。礫の周囲から出土した火葬骨の細片とともに、火葬土坑から移して投棄したものと推測し得る。これらの礫群を除けると、下方に土坑が検出された。これをSK32bと呼ぶ。径92cm、確認面からの深さは26cmを測る。礫集中の中心と、土坑の中心とは若干のズレがあって、一連の施設ではないらしい。火葬骨と土師器の小片が出土している。

（齋藤瑞穂）

出土遺物（第16図） 15～17はSX32a出土の糸切り底の土師器の坏である。他に土師質の鍋、陶器碗、近代の磁器片が出土したが、小片で図化し得ない。

（谷 直子）

土坑 SK33（第18図） 長軸71cm、短軸30cmの楕円形の土坑で、確認面からの深さ21cmを測る。SK33からは遺物は出土していない。

土坑 SK34（第18図） 長軸64cm、短軸57cmの楕円形の土坑で、確認面からの深さ12cmを測る。炭化物や火葬骨が出土している。SK34からは土師器片が出土したが、小片で図化し得ない。

土坑 SK35（第18図） 径108cm×106cmの隅丸方形を呈する土坑で、確認面からの深さは32cmである。炭化物や火葬骨が出土している。SK35からは土師器片が出土したが、小片で図化し得ない。

火葬土坑 SK36（第18図） 東西67cmを測る火葬土坑である。北側は攪乱により失われているが、南北70cm前後となり、隅丸方形を呈するものと見込まれる。確認面からの深さは18cmである。坑底に平坦面を有し、4石を棺台として設置する。棺台として用いた礫は被熱し、上面のレベルが揃う。火葬骨が出土している。SK36からは遺物は出土していない。

火葬土坑 SK37（第18図） 長軸115cm、短軸56cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは23cmである。坑底に平坦面を有し、間隔を空けて4石を棺台として設置する。棺台として用いた礫は被熱していて、上面のレベルが揃う。炭化材が土坑の壁に沿って検出され、火葬骨は特に中央部分にまとまる。SK37からは土師器片、陶器片が出土したが、小片で図化し得ない。

（齋藤瑞穂・谷 直子）

土坑 SK38（第19図） 径54cm×49cmの円形土坑で、確認面からの深さは24cmである。やや上方で土師皿が出土したほか、火葬骨が出土している。

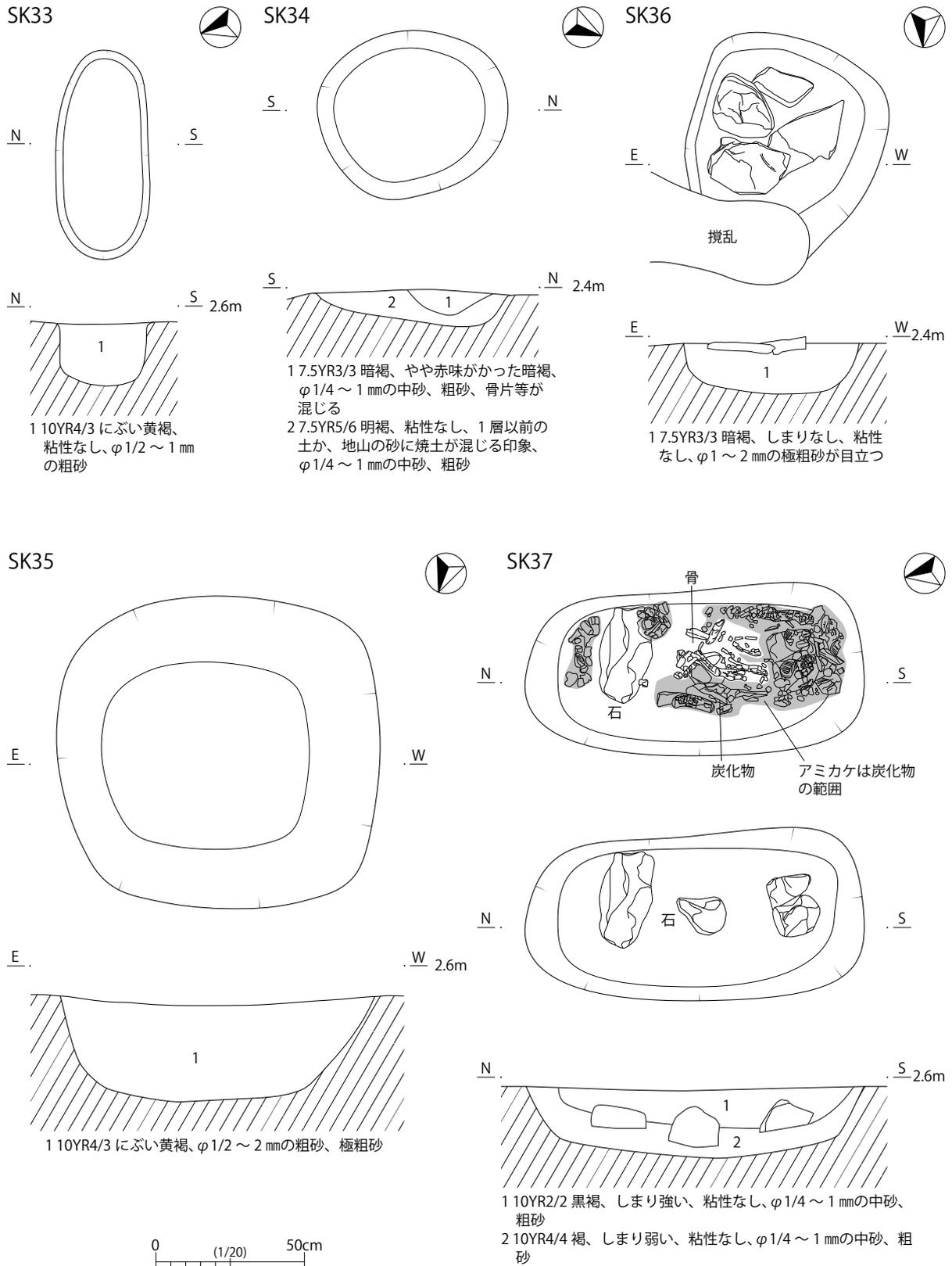
（齋藤瑞穂）

出土遺物（第20図） 1はSK38出土の糸切り底の土師皿である。

（谷 直子）

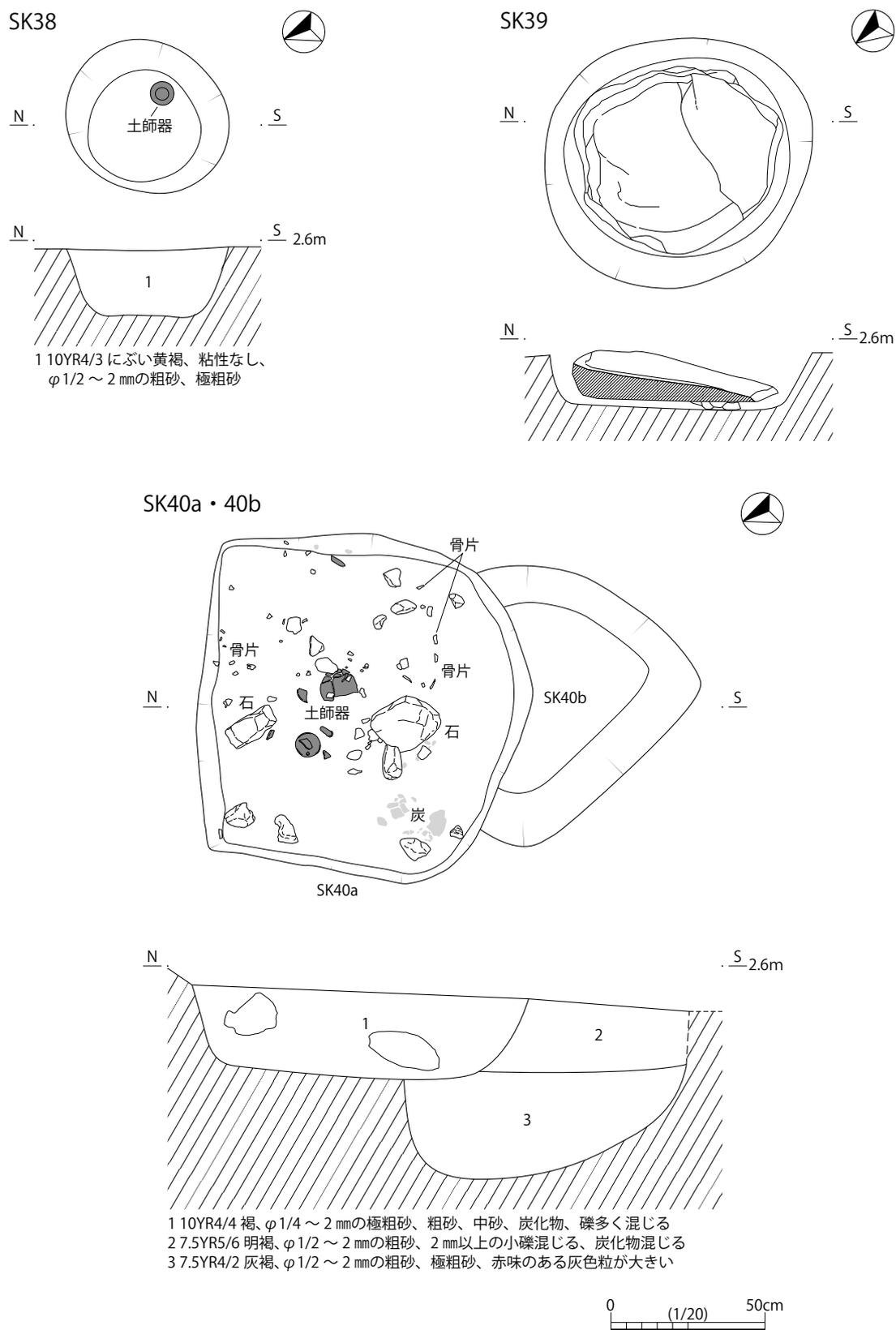
土坑 SK39（第19図） 径81cmの円形土坑で、確認面からの深さは19cmである。土坑全体を充たすようにして、平たい大ぶりの礫が据えてあった。礎石のように思われるが周囲に対応する柱穴は見当らない。礫を外すと南側にやや小さい礫が配置されてあった。上面の大礫の傾きを調整する役割を果たすものと推測される。SK39からは遺物は出土していない。

（齋藤瑞穂・谷 直子）



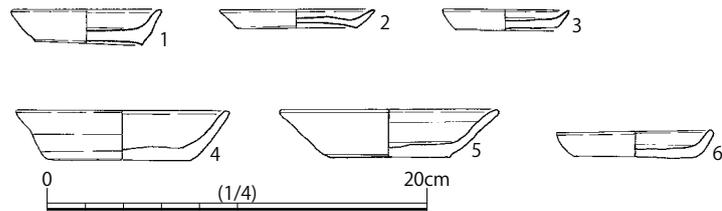
第18図 HZK2006地点 A 区土坑 SK33~35・火葬土坑 SK36・37平面・断面図

II HZK2006地点（本部第二庁舎地点）



第19図 HZK2006地点 A 区土坑 SK38～SK40a・40b 平面・断面図

土坑 SK40a・SK40b (第19図)
 確認面で土坑 SK40a が、同土坑の
 底面で土坑 SK40b がそれぞれ検
 出された。SK40a は、長軸116cm、
 短軸109cm の隅丸方形の土坑で、
 確認面からの深さは43cm である。
 覆土中に礫、土師器、炭化材、火



第20図 HZK2006地点 A 区土坑 SK38・40a・
 ピット SP49・土坑 SK58出土遺物

葬骨が散らばる。SK40b は、SK40a が掘り込まれた地山層に潜り込む。すなわち SK40b の埋没後、SK40a が掘削されるまでにある程度の間隔があったか、あるいは地均しがあったものとみられる。覆土に火葬骨や炭化材を多く含む。この SK40b は径92×90cm で、SK40a 底面からの深さは36cm である。火葬骨や焼土粒を多く含む。(齋藤瑞穂)

出土遺物 (第20図) 4～6 は SK40a 出土である。4・5 は糸切り底の土師器の坏で、6 は糸切り底の土師皿である。(谷 直子)

火葬土坑 SK41・SK42 (第21図) 重複する2つの火葬土坑で、SK41がSK42を切る。SK41は短軸72cm、長軸は109cm 以上が見込まれる。確認面からの深さは22cm で、底面に平坦面をもつ。棺台は東側の2石のみ遺り、西側には見当たらない。炭化材が土坑の壁に沿って検出され、内側に火葬骨が散らばる。SK42は、短軸64cm で、長軸は80cm 強になるとみられる。確認面からの深さは34cm で、板碑片などを使って棺台とする。SK41と比較しても火葬骨の量が少ない。(齋藤瑞穂)

出土遺物 (第22図) 1～7 は SK41出土の鉄釘である。いずれも断面四角形で、頂部が残存するものは折り曲げている。他に土師器片、磁器片が出土したが、小片で図化し得ない。

8 は SK42出土の鉄釘である。断面四角形で、頂部を折り曲げる。他に土師器片、陶器片が出土したが、小片で図化し得ない。(谷 直子)

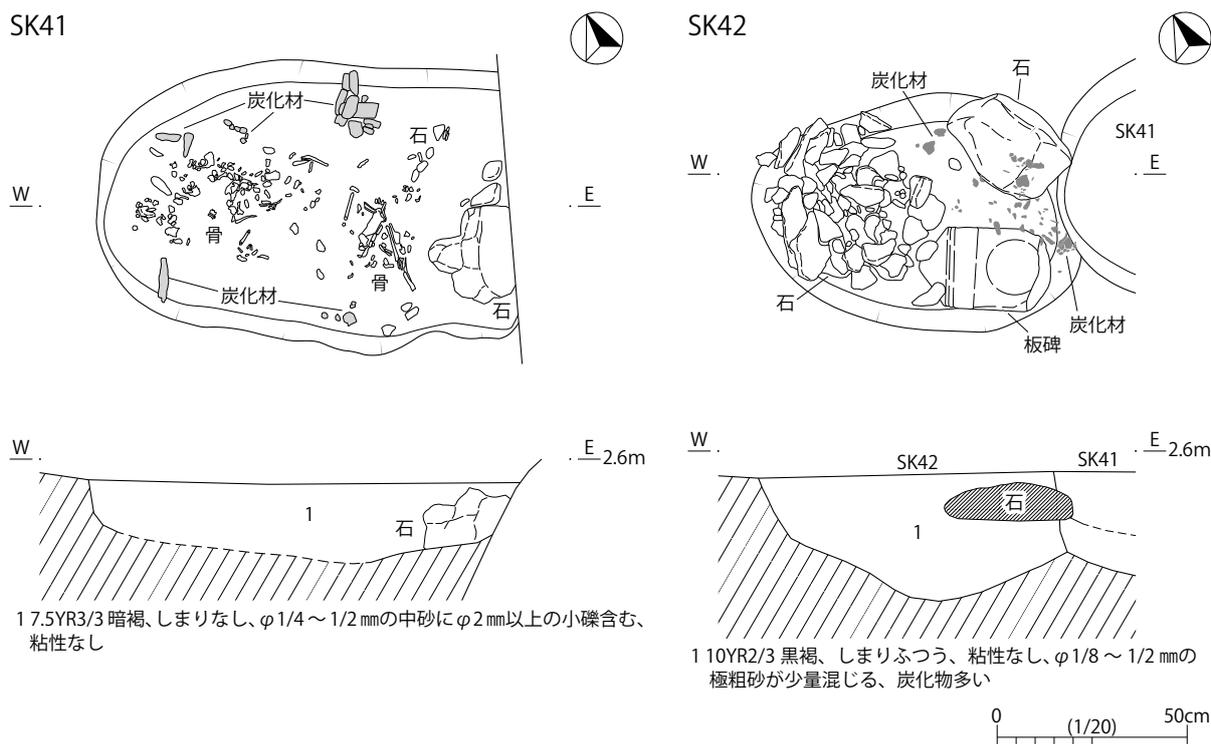
土坑 SK43・火葬土坑 SK44・礫集中 (石列) SX56・土坑 SK57a・SK57b・SK59 (第23・25 図) 調査区の北東で重複する遺構群である。SK43は径114cm×104cm の円形土坑で、確認面からの深さは25cm である。覆土を掘削し、底面に達すると礫が土坑のプランに沿っている様子が検出された。これは石列 SX56の一部をなすものであり、SK43はこれを切る形で構築されたようである。

火葬土坑 SK44は、長軸144cm、短軸75cm の楕円形を呈する。確認面からの深さは20cm で、底面に平坦面を有する。炭化物や火葬骨片は少なく、覆土に混じる焼土の量も乏しい。棺台として使われた石も遺っていないが、土坑の壁が赤変している点から、火葬土坑とみておきたい。

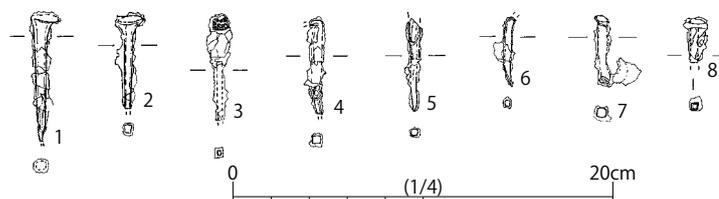
礫集中 (石列) SX56は、これらの両土坑に先立って作られたらしい。先に述べたようにSK43の坑底にその一部が現れること、また、SK44の範囲を除き、その周囲に礫が散らばっていることが、それを物語る。ただしレベル差は顕著でなく、大きな年代差は想定しにくい。SX56の礫の合間からも火葬骨が散見されるが、これらの礫自体は被熱していない。

SX56を除くと、3つの土坑が輪郭を表した。SK59はSK43・SX56に先行する土坑で、短軸40cm、長軸は60cm 以上となり、確認面からの深さは16cm を測る。底面から礫4点が検出された。被熱はしていない。火葬骨や土師器片が出土している。

SK57a・SK57b は当初1つの土坑とみて遺構番号を与えたものの、精査していくなかで2つの遺構の重複と判明したものである。SK57a はSK44・SX56・SK59に先行し、西側をSK44に切られる。径50cm 程を測り、検出面からの深さは6cm にすぎない。土師器のほか、火葬骨が出土している。SK57b は、SK57a に西側を、SK43・SK59に北側を切られる。短軸は106cm、長軸は120cm を超える



第21図 HZK2006地点 A区火葬土坑 SK41・42平面・断面図



第22図 HZK2006地点 A区火葬土坑 SK41・42出土遺物

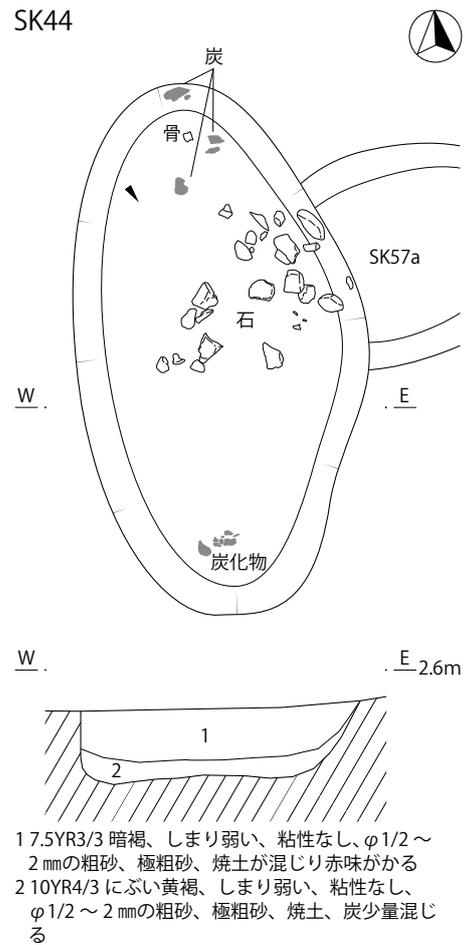
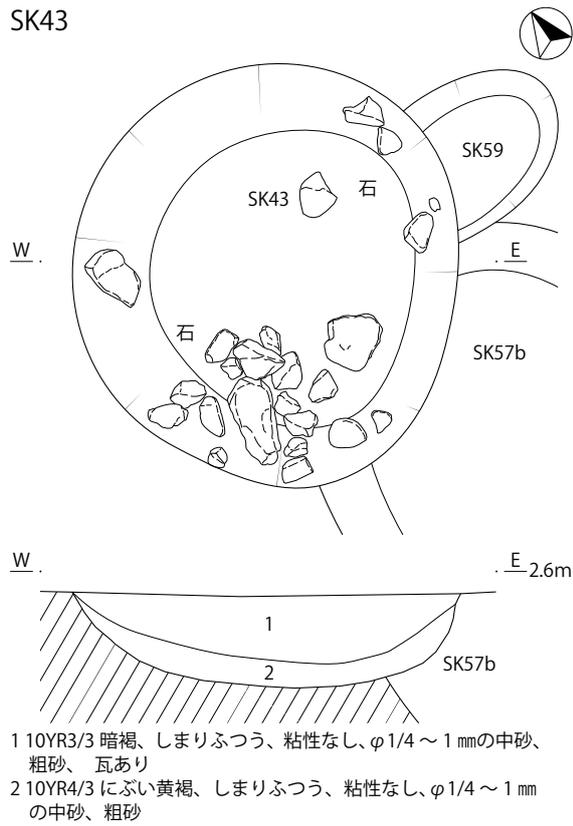
サイズとなろう。確認面からの深さは56cmである。火葬骨や土師器が含まれている。（齋藤瑞穂）

出土遺物（第24・26図）SK43からは土師器の皿・鍋、瓦が出土したが、小片で図化し得ない。第24図はSK44出土である。1は糸切り底の土師皿である。2～10はいずれも断面四角形の鉄釘で、頂部が残存するものは折り曲げている。SX56からは土師器片の他、中世の所産と思われる瓦が出土したが、破片のみで図化に耐えない。第26図はSK57出土である。1・2は糸切り底の土師器で、1が皿、2が坏である。3は加工された金属の板であるが、用途などは不明。側縁の丸くカーブする部分は銅板を折り曲げて成形している。SK59からは土師器片が出土したが、小片で図化し得ない。

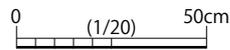
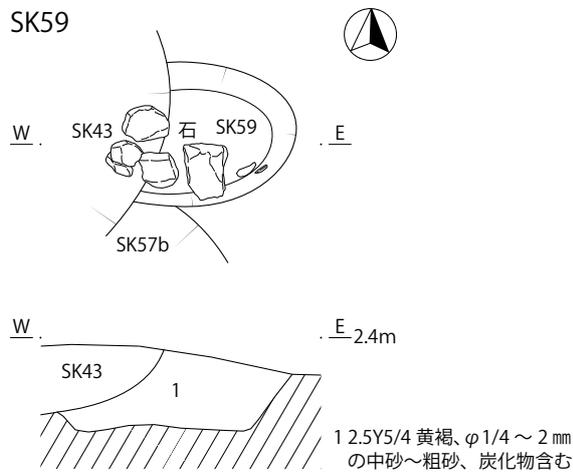
（谷 直子）

土坑 SK45（第27図） 径85cmの円形土坑で、東側が攪乱を受けている。確認面からの深さは30cmである。SK45からは遺物は出土していない。

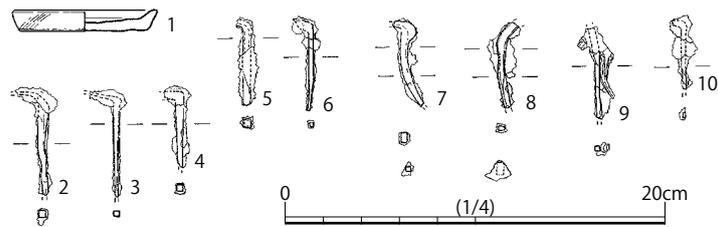
溝 SD46（第27図） 幅57cmの溝で、長さは119cm以上となる。溝の南端は、すでに深く掘削しており検出できなかった。確認面からの深さは22cmである。焼土・火葬骨を覆土に含む。SD46からは土師器片が出土したが、小片で図化し得ない。



※凡例は例言を参照

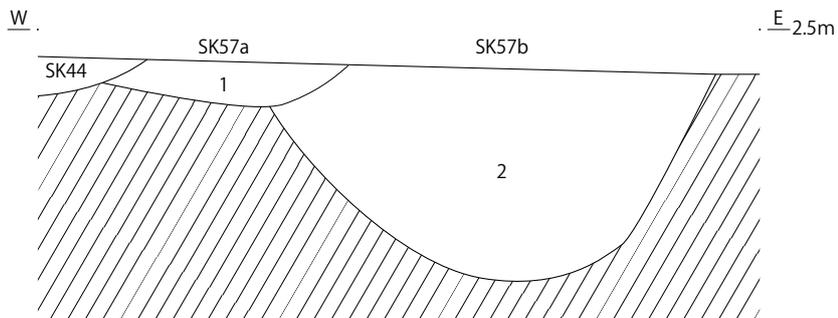
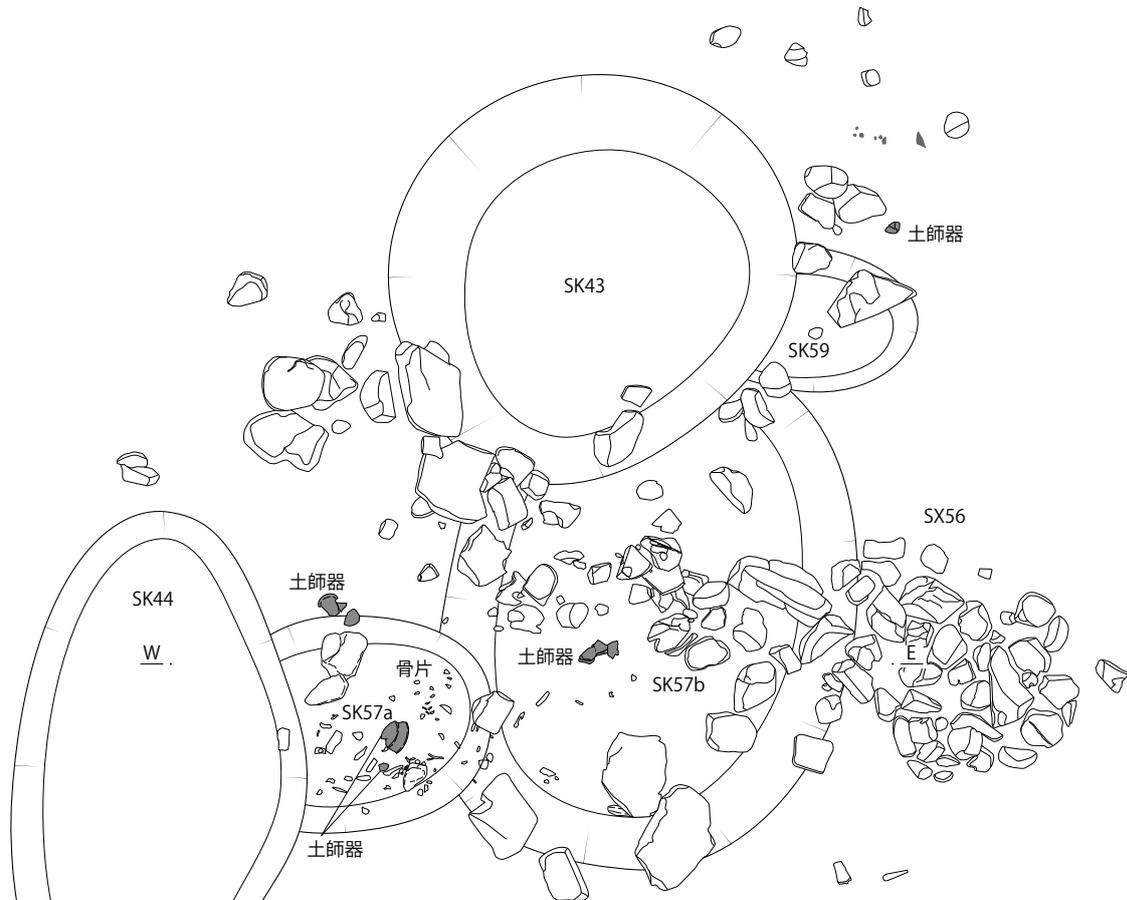


第23図 HZK2006地点 A 区土坑 SK43・火葬土坑 SK44・土坑 SK59平面・断面図

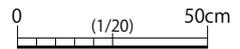


第24図 HZK2006地点 A 区火葬土坑 SK44出土遺物

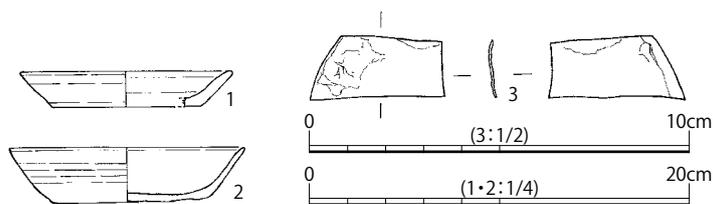
SX56・SK57a・57b



1 2.5Y4/2 暗灰黄、しまりなし、粘性なし、 $\phi 1/2 \sim 2$ mmの粗砂、極粗砂
 2 10YR4/6 褐、しまり多い、粘性なし、 $\phi 1/4 \sim 1$ mmの中砂、粗砂、 $\phi 1 \sim 2$ mmの極粗砂は少ない、炭化物含む、骨含む、大ぶりの礫あり



第25図 HZK2006地点 A 区礫集中 SX56・土坑 SK57a・57b 平面・断面図



第26図 HZK2006地点 A 区土坑 SK57出土遺物

ピット SP47 (第27図) 径35cm×30cmの円形ピットで、確認面からの深さは11cmである。SP47からは遺物は出土していない。

土坑 SK48 (第27図) 長軸80cm、短軸60cm程度の楕円形土坑で、東側が攪乱を受けている。確認面からの深さは17cmを測る。火葬骨が出土している。SK48からは土師器の坏が出土したが、小片で図化し得ない。(齋藤瑞穂・谷 直子)

ピット SP49 (第27図) 径27cm×26cmの円形ピットで、確認面からの深さは14cmである。火葬骨が出土している。(齋藤瑞穂)

出土遺物 (第20図) 2はSP49出土の糸切り底の土師皿である。(谷 直子)

ピット SP50 (第27図) 径26cm×22cmの円形ピットで、確認面からの深さは11cmである。SP50からは遺物は出土していない。

ピット SP51 (第28図) 径19cmの円形ピットで、確認面からの深さは9cmである。火葬骨が出土している。SP51からは遺物は出土していない。

ピット SP52 (第28図) 長軸33cm、短軸27cmの楕円形ピットで、確認面からの深さは12cmである。SP52からは遺物は出土していない。

礫集中 SX53 (第28図) 10石ほど集中した部分をSX53として把握する。プランは見えない。並べたようではあるが、被熱していない。火葬骨や遺物も見当たらない。

ピット SP54 (第28図) 径54cm×50cmを測る。確認面からの深さは12cmである。調査時には円形ピットとして記録をしたが、サイズからすると土坑と言った方がよいかもしれない。遺物は出土していない。火葬骨もわずかに出土しているが、意図的に投げ込んだというものでなく、流れ込み程度の量にすぎず、遺構の性格は詳らかでない。

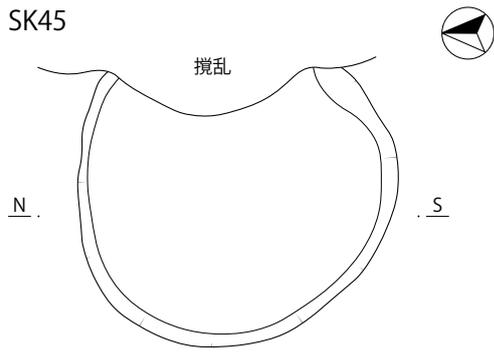
火葬土坑 SK55 (第28図) 長軸70cm、短軸62cmの隅丸方形で、南側は攪乱を受けている。確認面からの深さは9cmである。坑底に平坦面を有する。焼土、炭化物、火葬骨が散らばる。棺台などは残っていないが、遺構壁面の赤変ぶりや坑底が平坦であることなどから、坑底部分のみ遺存した火葬土坑とみておく。SK55から土師器片が出土したが、小片で図化し得ない。(齋藤瑞穂・谷 直子)

土坑 SK58 (第1図) SK55北東の攪乱坑の側に存在していたとみられる土坑である。調査時に遺構の規模などを記録できなかった。当初、掘削に着手した際にビニール片が出土したことから、攪乱の続きであると評価した。しかし、それは攪乱部分と接している部分での出土であり、確認のため覆土部分を粗掘りしていくと、土師皿の完形品が含まれていたことから、何らかの土坑があったものと推測される。(齋藤瑞穂)

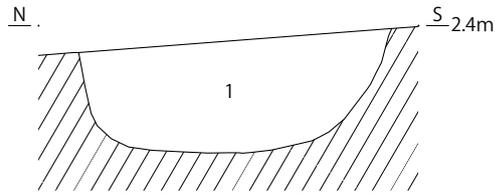
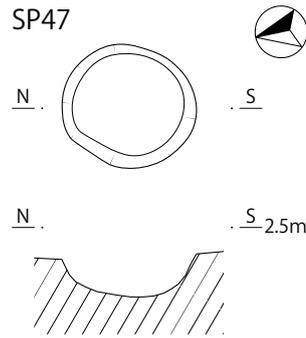
出土遺物 (第20図) 3はSK58出土の糸切り底の土師皿である。

遺構外出土遺物 (第29図) 1は鎬蓮弁の青磁碗で、角高台が付く。大宰府編年の龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類である(宮崎編 2000)。2・3は糸切り底の土師器の坏である。4は糸切り底の土師皿である。5・6はガラス製の玉で5はビー玉、6はおはじきである。7は丸玉でべっ甲製かと思われ茶褐色を呈する。8は銅製の金具で、細長い棒状の金具を、目釘で留めたような形をしている。9・10は断面四角形の鉄釘で木質が残る。(谷 直子)

SK45

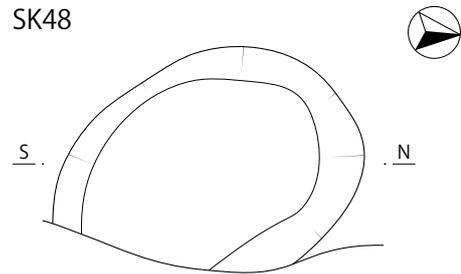


SP47

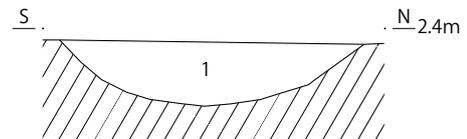
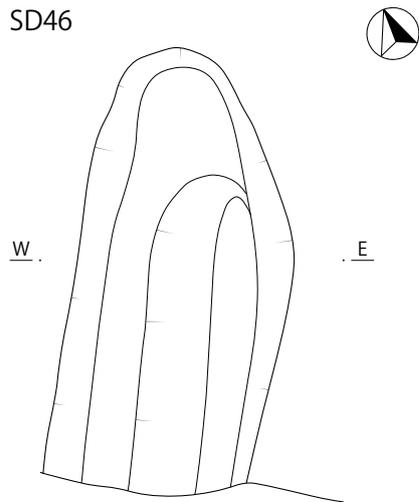


1 10YR3/4 暗褐 3/3 よりもう少し黄色味が強い、しまりなし、粘性なし、 ϕ 1/2 ~ 2mmの粗砂、極粗砂

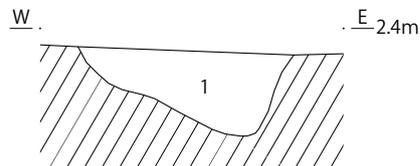
SK48



SD46

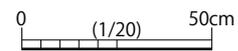
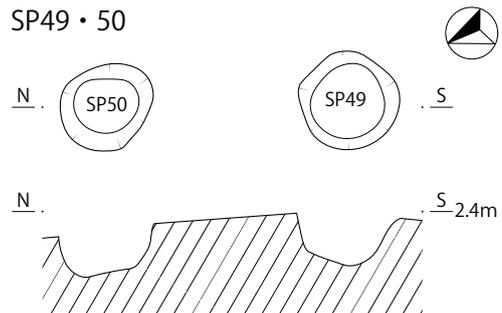


1 10YR4/4 褐、しまりなし、粘性なし、 ϕ 1/2 ~ 2mmの極粗砂、粗砂

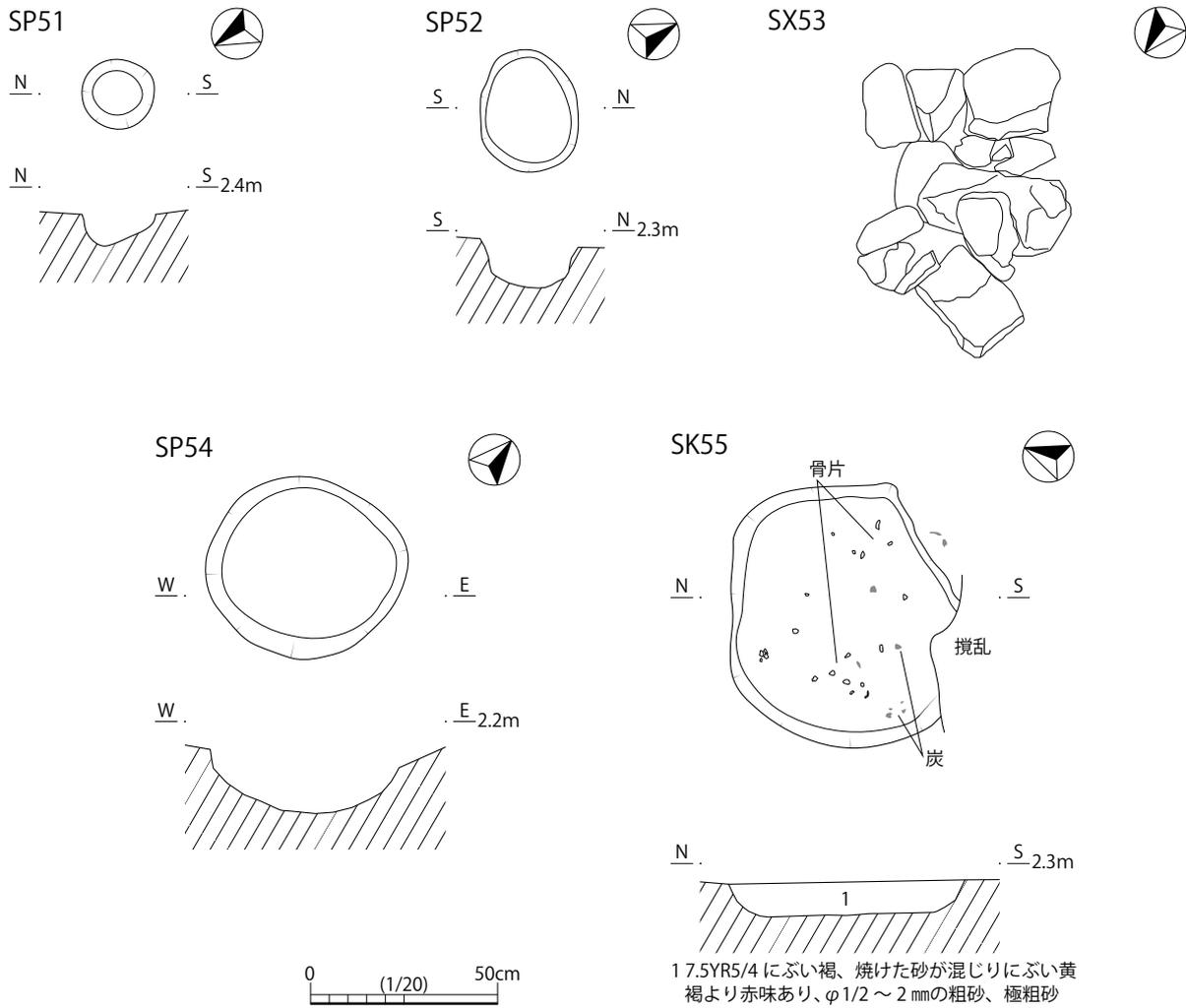


1 10YR3/3 暗褐、しまりふつう、粘性なし、 ϕ 1/4 ~ 1mmの中砂、粗砂に ϕ 2mmの極粗砂が混じる

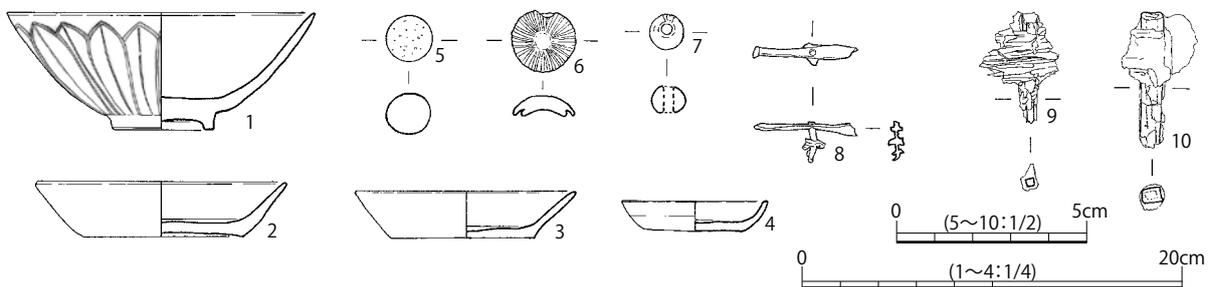
SP49・50



第27図 HZK2006地点 A区土坑 SK45・溝 SD46・ピット SP47
土坑 SK48・ピット SP49・50平面・断面図



第28図 HZK2006地点 A区ピット SP51・52・礫集中 SX53・ピット SP54
火葬土坑 SK55平面・断面図



第29図 HZK2006地点 A区遺構外出土遺物

G 区

（1）火葬土坑

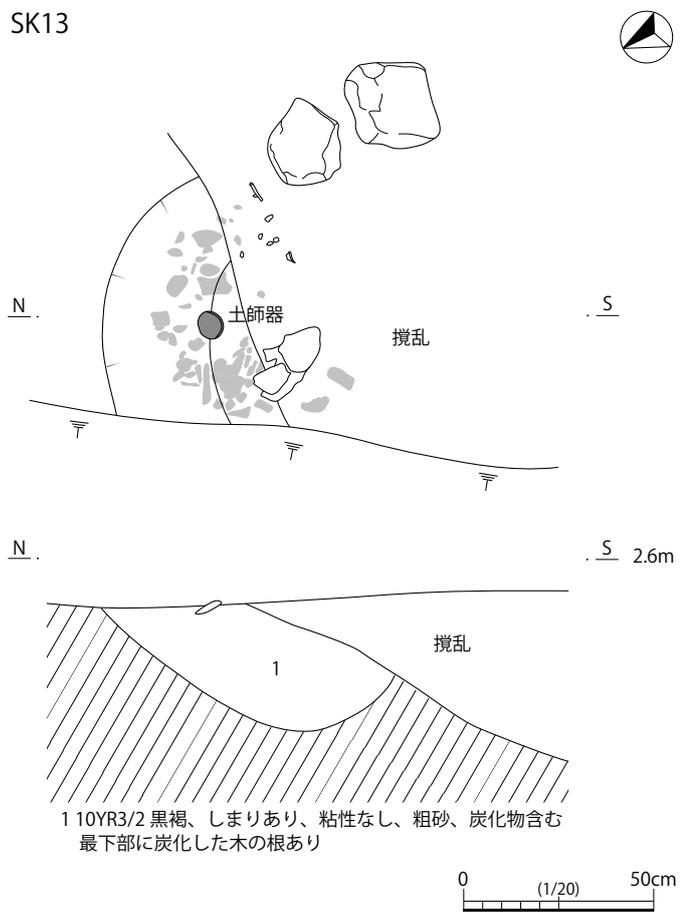
火葬土坑（茶毘の場）と判断した遺構は、全部で4基である。数が少ないため判断が難しいが、調査区中央部に集中する傾向が認められる。

火葬土坑から遺物が出土することは稀であり、遺構の時期比定が難しい。そこで、火葬土坑から出土した炭化物に対して放射性炭素年代測定を実施した。SK13・SK19の分析結果に関してはすでに報告しているが（パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ2023）、SK16・SK33に関してはまだ報告していない。当該遺構の分析結果については、2025年度刊行予定の報告書に掲載する予定である。

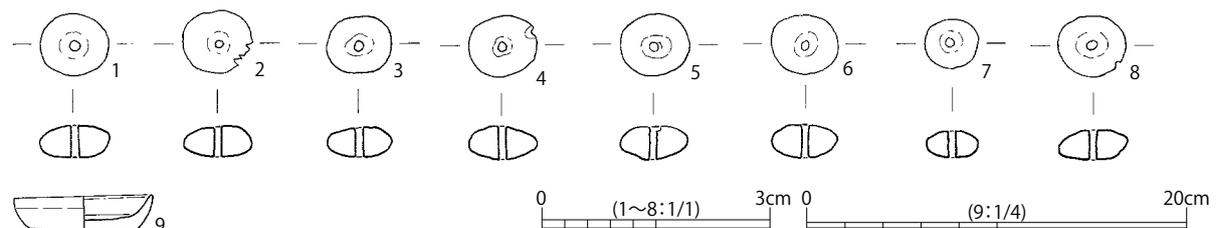
火葬土坑 SK13（第30図） 遺構の西側と南側が近現代の攪乱によって破壊されている。遺構平面プランは円形を呈する。埋土は1層のみで、炭化物が多数出土しており、比較的大形の炭化材も含む。焼骨片が出土しているが、その出土量は極めて少ない。大形の礫が複数出土しており、その配置に規則性は認められない。これらの礫が棺をのせる台石としての機能を果たしていたかどうか不明である。

遺構上部でほぼ完形の土師皿が1枚出土している。意図的に置かれたような状態で出土しており、何らかの儀礼的行為の痕跡の可能性もある。また、炭化材などに紛れて、数珠玉が8点出土した。ある程度まとまって出土しているが、連なった状況は確認できない。

遺物の出土が限られており、遺構の時期を絞り込むことが困難である。そこで、出土した炭化物に対して放射性炭素年代測定を実施した。出土した炭化物3点の測定値は、1321-1358 cal AD（61.55%）、1396-1432 cal AD（93.17%）、1409-1441 cal AD（95.45%）であった¹⁾。これらの分析試料はいずれも最終形成年輪が残っ



第30図 HZK2006地点 G 区火葬土坑 SK13平面・断面図



第31図 HZK2006地点 G 区火葬土坑 SK13出土遺物

ており、測定値は枯死もしくは伐採年代を示すとのことである。本分析結果から、当該遺構は15世紀前半の所産と考えられる。(福永将大)

出土遺物(第31図) 1~8は木製の玉でやや丸いそろばん玉状を呈する。比較的大きさが揃っており、一連の数珠玉と考えられる。9は糸切り底の土師皿である。器壁がやや厚く丸みを持つ。

(谷 直子)

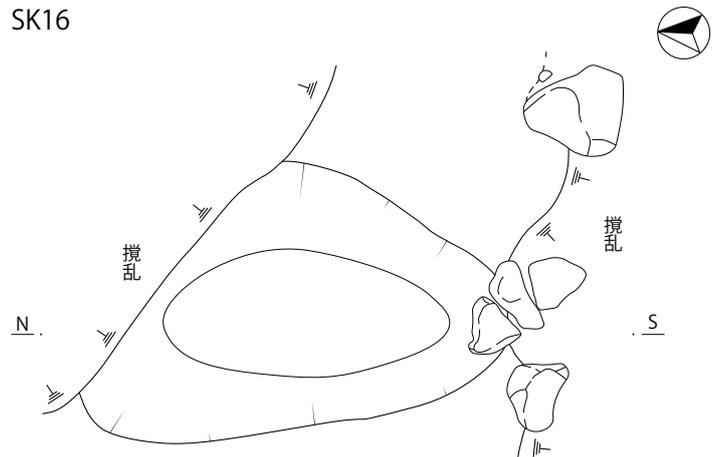
火葬土坑 SK16(第32図) 遺構の北東側と南側が近現代の攪乱によって破壊されている。遺構平面プランは楕円形を呈する。遺構南側で、攪乱層と遺構埋土にまたがるような形で20cm四方の礫が出土している。一部被熱痕跡が認められることから、本来はSK16に伴うもので、後世の攪乱によって動かされたものと考えられる。

遺構埋土は2つの層に区分したが、層からは焼骨片の出土はなく、炭化物の出土も少量にとどまる。2層に関しては、遺構埋土ではなく、1層から微細な炭化物が浸透するなどの影響を受けた自然堆積層である可能性も否定できない。1層からは、比較的大きな炭化材が出土しているが、SK13に比べて少ない。焼骨片は1層上部での出土がほとんどであり、出土量も少ない。

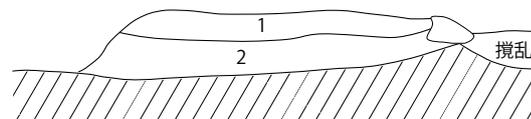
火葬土坑 SK19(第33図) 遺構東側が近現代の攪乱によって破壊されているが、平面プランは楕円形を呈すると考えられる。大形の礫が多数出土しており、それらの中には被熱痕跡が認められるものも存在する。しかし、棺をのせる台石として機能していたかどうか不明である。

遺構埋土は2つに分層した。1層からは炭化物が多量に出土しており、大形の炭化材も出土している。焼骨片は1層上部からの出土がほとんどであり、出土量

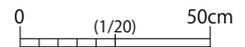
SK16



N. S. 2.7m

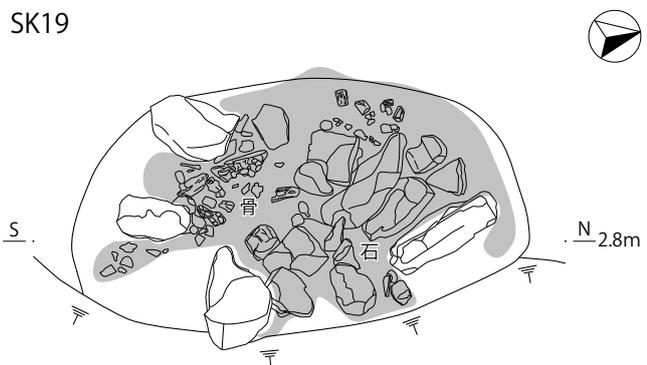


- 1 10YR3/2 黒褐、しまりややあり、粘性なし、粗砂~中砂(中砂多い)、炭化物を非常に多く含む、比較的大きな炭化材や小礫を含む
- 2 10YR6/6 明黄褐、しまり多い、粘性なし、粗砂、10YR3/2 黒褐の中砂~粗砂をブロック状に含む



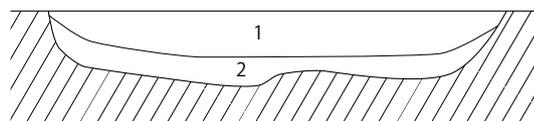
第32図 HZK2006地点 G 区火葬土坑 SK16平面・断面図

SK19

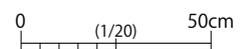


*灰色部分：炭化物出土集中箇所

S. N. 2.8m



- 1 2.5Y3/1 黒褐、しまり弱い、粘性なし、粗砂~中砂、炭化物を非常に多く含む、炭化材(大形)や礫を多く含む
- 2 10YR6/4 にぶい黄橙、しまり多い、粘性なし、粗砂、2.5Y3/1 黒褐の中砂~粗砂をブロック状に含む



第33図 HZK2006地点 G 区火葬土坑 SK19平面・断面図

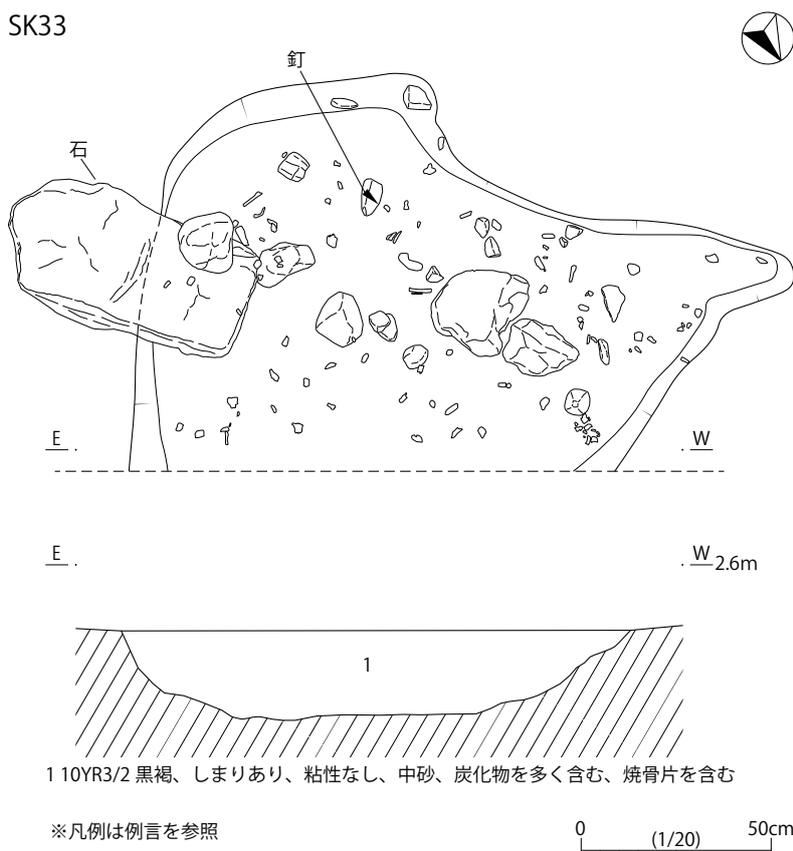
も少ない。2層から大形の礫や焼骨片は出土しておらず、SK16と同様、この2層に関しては、遺構埋土ではない可能性もある。

遺物が出土しておらず、遺構の時期を絞り込むことが困難である。そこで、出土した炭化物に対して放射性炭素年代測定を実施した。出土した炭化物3点の測定値は、1306-1364 cal AD (76.58%)、1393-1420 cal AD (48.93%)、1318-1360 cal AD (66.95%)であった。これらの分析試料はいずれも最終形成年輪が残っており、測定値は枯死もしくは伐採年代を示すとのことである。本分析結果から、当該遺構は15世紀前半の所産と考えられる。

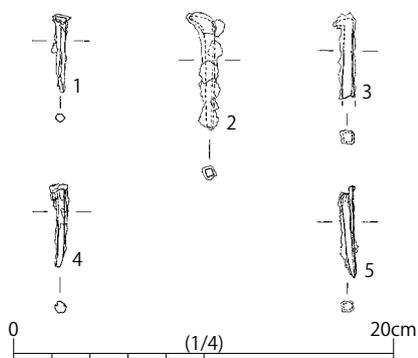
火葬土坑 SK33（第34図） 木の根によって堆積が乱されており、遺構プランを明確におさえることが困難であった。炭化物や焼骨片がある程度まとまって出土していることから、火葬土坑として取り扱ったものの、遺構平面プランや炭化物・焼骨片・礫の出土状況など、上述したSK13・SK16・SK19とは様相が異なる。茶毘の場ではない可能性もあり、土坑と認定したほうが良いかもしれない。

遺構埋土から鉄釘が出土している。また、遺構東壁から突き出るように大きな板状の石（全長約70cm×幅約30cm）が出土しており、サブトレンチを入れて確認したところ、石はSK33の遺構プランから40cmほどはみ出している。当該石は、SK33構築の際に設置したものではなく、構築以前からこの場所にあったものと考えられる。SK33の遺構内に突き出ている部分の一部に、赤みを帯びた部分があるが、被熱痕跡と断定することはできない。（福永将大）

出土遺物（第35図） 1～5はSK33出土の鉄釘である。いずれも断面四角形で、頂部が残存するものは折り曲げている。他に土師器片が出土したが、小片で図化し得ない。（谷 直子）



第34図 HZK2006地点 G 区火葬土坑 SK33平面・断面図



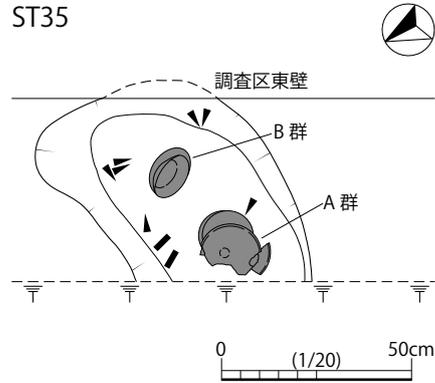
第35図 HZK2006地点 G 区火葬土坑 SK33出土遺物

(2) 木棺墓

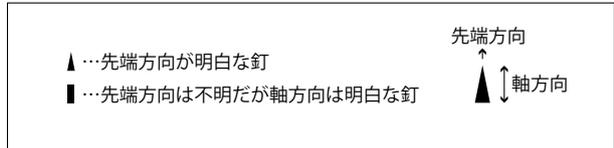
木棺墓 ST35 (第36図)

砂丘の堆積状況や形成過程を確認するため、調査区内を重機で深掘りしていた際に、ほぼ完形の白磁が出土した。出土状況の写真を撮るため周辺を清掃していると、白磁が重なった状態で複数点出土し、さらに木質が付着した鉄釘も多数出土した。そのため、当該遺構を「木棺墓 ST35」として認識を改め、精査することとした。

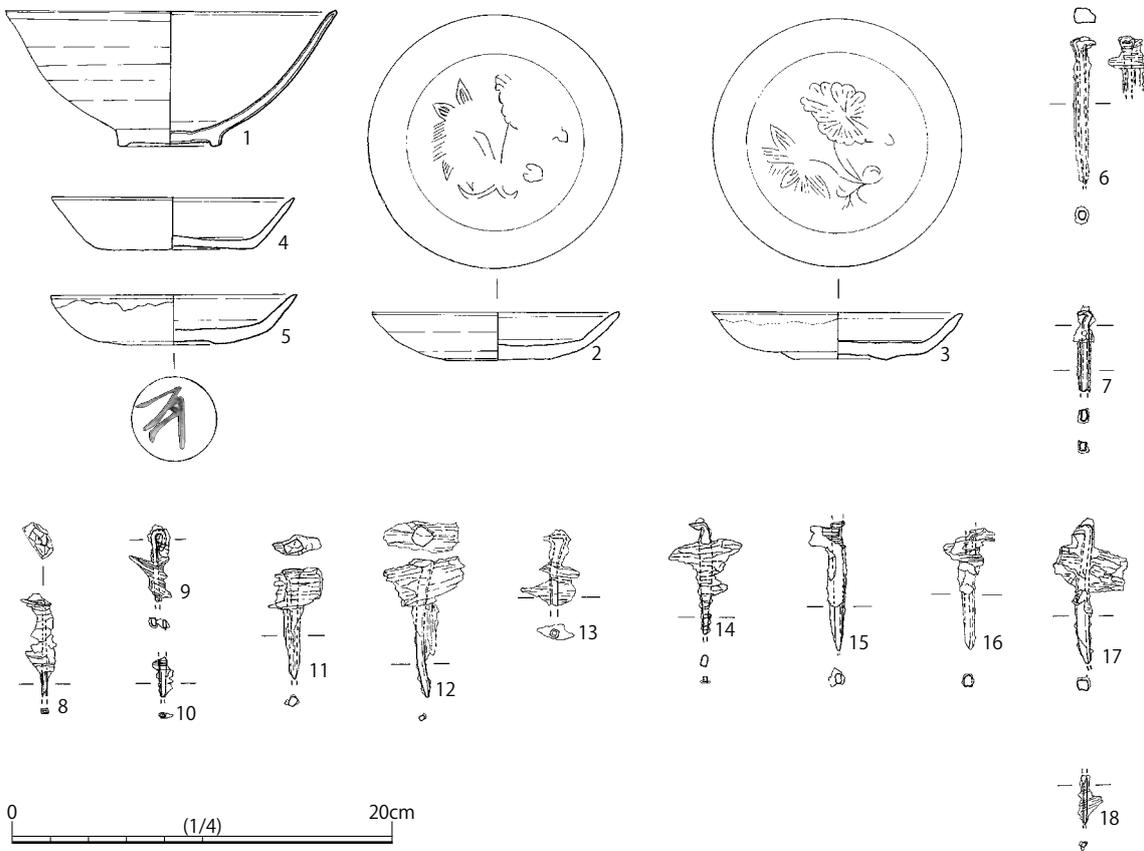
木の根が多数入り込んで堆積が乱されていたこともあり、遺構埋土と自然堆積層との区別は容易ではなかった。遺構埋土は10YR5/6黄褐の中砂～粗砂で、自然堆積層は10YR6/4にぶい黄橙の中砂～粗砂。両者の差異は明瞭ではなく、色調によってかろうじて区別できる程度であった。遺構を認識した時には、遺構の大半を重機で破壊しており、且つ、写真撮影の清掃などで遺構埋土に相当する部分の多くを掘削してしまっていたため、土層断面の記録を残すことができなかったことは悔やまれる。



<釘：凡例>



第36図 HZK2006地点 G 区木棺墓 ST35平面図



第37図 HZK2006地点 G 区木棺墓 ST35出土遺物

鉄釘が多数出土しており、木棺の棺材と考えられる木質が付着した鉄釘も見られる。付着した木質がラインを揃えるように出土しており、北側の木棺の壁面ラインを示すものと考えられる。

こうした鉄釘の出土状況と、上述した遺構埋土の認識によって、何とか遺構平面プランを把握することができた。重機掘削で破壊してしまった遺構西側を除いて、遺構の北壁・南壁・東壁それぞれの立ち上がりを確認している。短軸は南北50cm程度で、長軸は東西方向に残存長60cm程度である。人骨は出土していない。

副葬品である白磁が全部で5点出土している。遺構西側から3点、東側から2点出土しており、便宜的に前者をA群、後者をB群と呼称することにした。また、A群・B群ともに白磁が重なった状態で出土しており、それぞれ上からA-1・A-2・A-3、B-1・B-2として個体識別を行うこととした。A-1は口禿の白磁碗、A-2・A-3はともに見込みに文様を有する白磁皿、B-1は口禿の白磁皿、B-2は文様をもたない白磁皿である。

当該遺構周辺を重機で掘削した土を再度確認したが、人骨や副葬品と考えられる遺物などは認められなかった。破壊してしまった遺構西側には、元々人骨や副葬品は無かったものと推察される。

副葬品である白磁から判断して、遺構の時期は14世紀前半と考えられる。（福永将大）

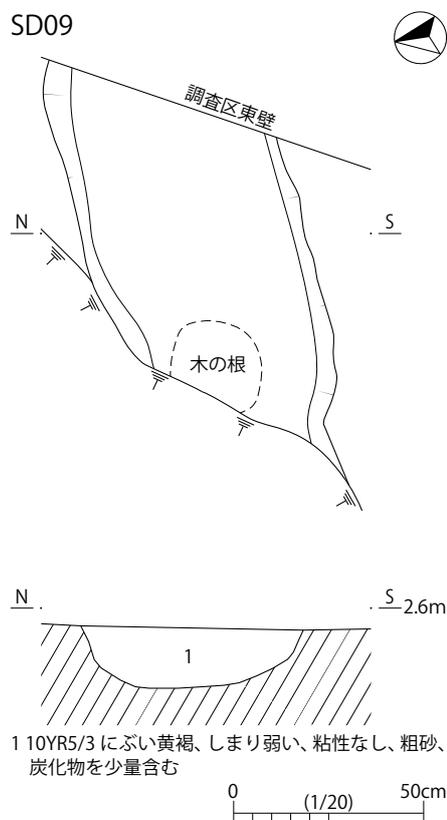
出土遺物（第37図） 1～18はST35出土である。1（A-1）は白磁の碗で口縁部が口禿となる。大宰府編年の白磁碗IX-1類で13世紀後半から14世紀前半に増加する。2～5は白磁の皿である。白磁皿2・3（A-2・A-3）の口縁部は直口で厚く施釉する。底部は平底で施釉後に釉を削り取る。内面見込みが平坦で草花文の凹印を施す。いずれも白磁皿VIII-2b類で12世紀中頃から後半の所産である。4（B-1）は口禿で、底部外面まで全面施釉し、底部外面は工具で釉をのぼす。白磁皿IX-1c類で、13世紀後半から14世紀前半に増加する。5（B-2）は口縁部が直口で厚く施釉する。底部は平底で露胎、底部外面に墨書が書かれている。内面見込み部分が平坦で無文。白磁皿VIII-2a類で12世紀中頃から後半の所産である（宮崎編 2000）。6～18は断面四角形の鉄釘で、頂部を折り曲げている。いずれも体部に木片が付着しており、木棺の釘であったと考えられる。（谷 直子）

（3）溝

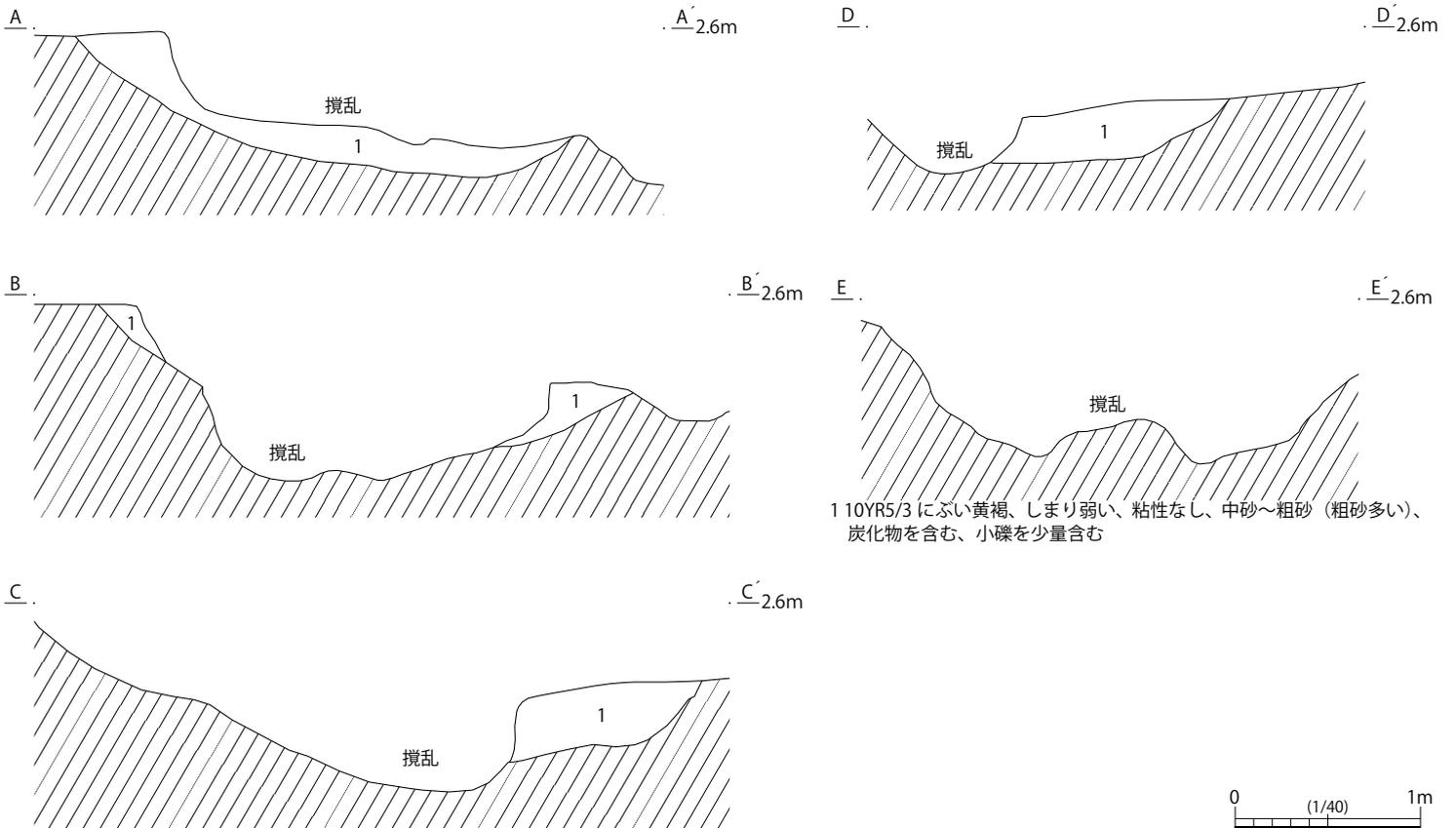
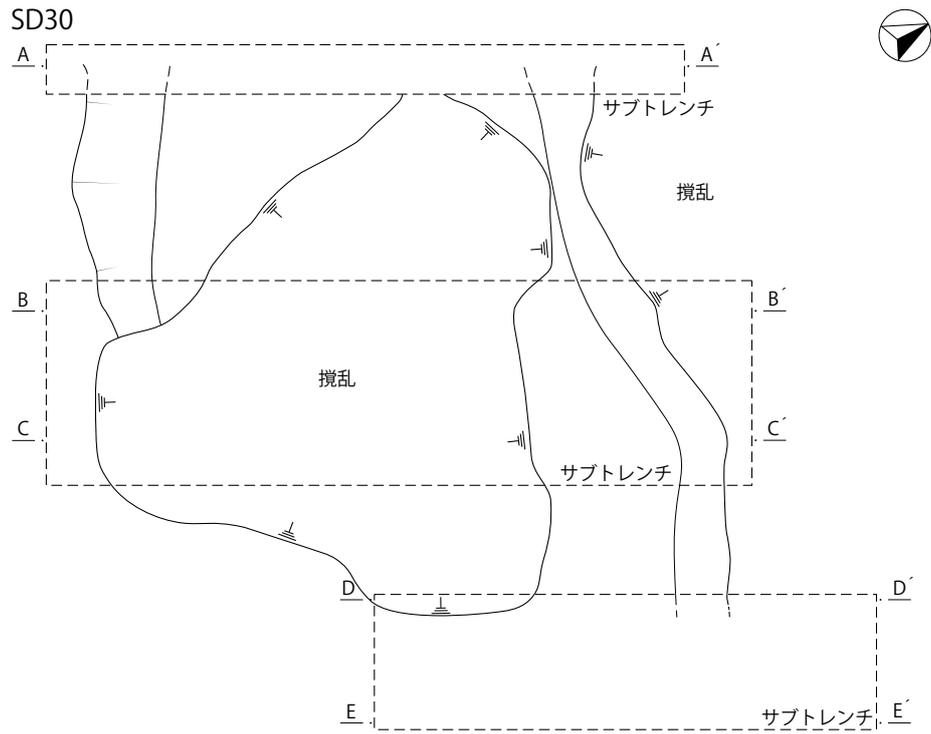
溝 SD09（第38図） 調査区南側の東壁沿いで検出した。遺構西側は近現代の攪乱で破壊されており、東側も調査区東壁のさらに東側へと続く。そのため、溝の長軸の規模はわからないが、溝の幅は南北60cm程度を測る。遺構西側が木の根の攪乱を受けている。

鉄釘や土師器小片が出土しているが、遺構の時期を絞り込むことは難しい。

溝 SD30（第39図） 大半が近現代の攪乱により破壊されており、遺構の残存状態は極めて悪い。遺構の長軸は東西方向で、残存長3mほどを測る。溝の残存幅は約2.9m。サブトレンチを3本入れて堆積状況を確認した。残存している遺構埋土は1層のみである。



第38図 HZK2006地点 G 区
溝 SD09平面・断面図



第39図 HZK2006地点 G 区溝 SD30平面・断面図

埋土から至道元寶・大観通寶やガラス玉などが出土している。遺構の時期は決め難い。
（福永将大）

出土遺物（第40図） 1～3はSD09出土の断面四角形の鉄釘で、いずれも体部に木質が付着している。他に土師器の小片が出土したが図化し得ない。

4～7はSD30出土である。4は糸切り底の土師皿である。5はガラス玉で、多面体にカットしている。中心部の孔は上部が狭く、下部に向かって広がる。6は北宋銭の至道元寶で、初鑄は995年。7は北宋銭の大観通寶で、初鑄は1107年である。他にサブトレンチから土師器片、染付の猪口、陶磁器の碗や甕、瓦、七輪の破片が出土したが、いずれも小片で図化し得ない。

（谷 直子）

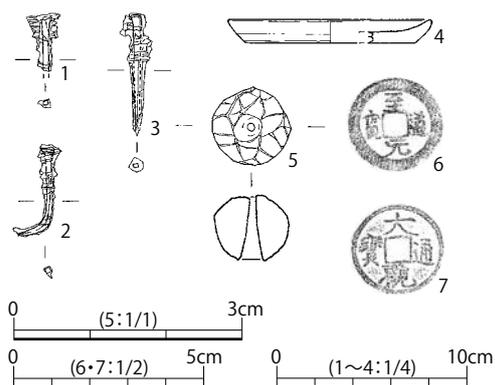
（4）土坑

土坑 SK01（第41図） 調査区南壁沿いで検出した。遺構の西側と東側は近現代の攪乱で破壊されている。調査区南壁とほぼ同じ位置で、遺構南側の立ち上がり部分を確認することができた。遺構埋土は1層で、最上部から大形の礫が1つ出土している。この礫の性格は不明である。

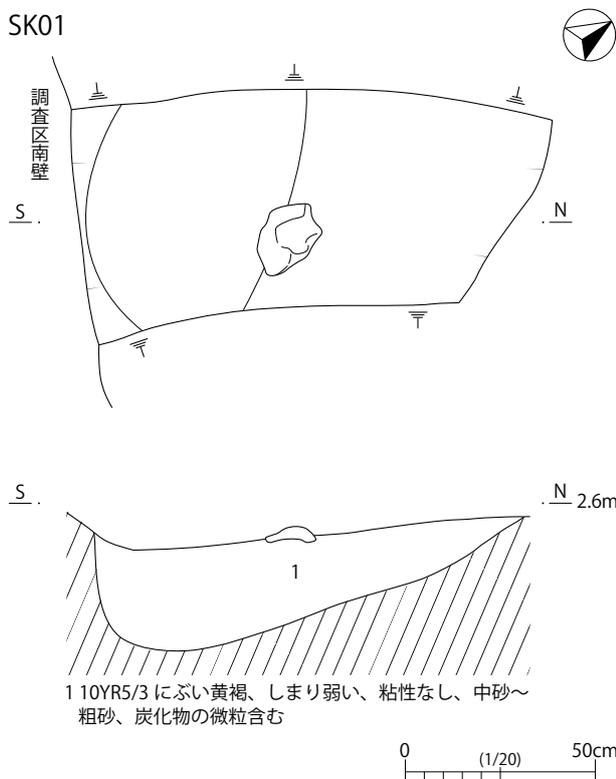
瓦の小片が出土しているが、遺構の時期を絞り込むのは難しい。

土坑 SK02（第42図） 遺構中央部が近現代の攪乱によって破壊されている。土層断面で堆積状況を確認したところ、3つの層に区分できることがわかった。1層は10cm 程度の小礫（円礫・角礫ともに含む）を多量に含んでおり、2層・3層に比べて遺物も多く出土する。遺構中央部の攪乱を境にして、東側と西側で土の色調がやや異なる。そのため、東側の1層を1a層、西側を1b層と区別して呼称することとしたが、1a層・1b層ともに堆積のコンテキストは同じと考えられる。なお、1b層のほうが1a層に比べて出土遺物が多い。2層は炭化物の微粒を多く含み、1層に比べて遺物の出土量が減少し、小礫も含まなくなる。3層は遺物も小礫も出土せず、2層と同質の土をブロック状に含んでいる。

1層は2層を切って堆積しており、堆積土の性質も異なっている。両者の関係性は不明だが、1層と2層の間に不連続があることは確かであろう。3層は遺構埋土ではなく、2層から微細な炭化物が浸透するなどの影響を受けた自然堆積層の可能性も否定できない。



第40図 HZK2006地点 G 区溝 SD09・30出土遺物



第41図 HZK2006地点 G 区土坑 SK01平面・断面図

1 10YR5/3 にぶい黄褐、しまり弱い、粘性なし、中砂～粗砂、炭化物の微粒含む

出土した青磁・白磁などの遺物から判断して、当該遺構は14世紀前半の所産と考えられる。

(福永将大)

出土遺物(第43図) 1は青磁の碗で、器身は浅く厚く釉がかかる。2は鎬蓮弁の青磁碗で、蓮弁はまだ簡略化しておらず、大宰府編年の龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類で、13世紀前半の所産である。3は鎬蓮弁の青磁の坏で、体部は丸みを持ち、口縁部を薄く引き出す。龍泉窯系青磁坏Ⅲ-5b類で13世紀中頃から14世紀初頭の所産。4は口禿の白磁皿で全面施釉し、底部裏面の釉をのぼす。口径11.6cmを測り、白磁皿Ⅸ-1c類である。13世紀後半から14世紀前半に増加する(宮崎編 2000)。5は陶器甕の底部である。薄く釉がかかり外面にハケメが残る。6~10は糸切り底の土師器の坏である。11は滑石製石鍋で鏝の下に補修孔がある。外面に工具によるケズリ痕が残る。(谷 直子)

土坑 SK03(第44図) 遺構平面プランは円形を呈する。検出面からの掘り込みの深さは20cm程度。土坑というよりピットとして扱ったほうが良いかもしれない。

土師器小片が出土しているが、遺構の時期を絞り込むのは難しい。

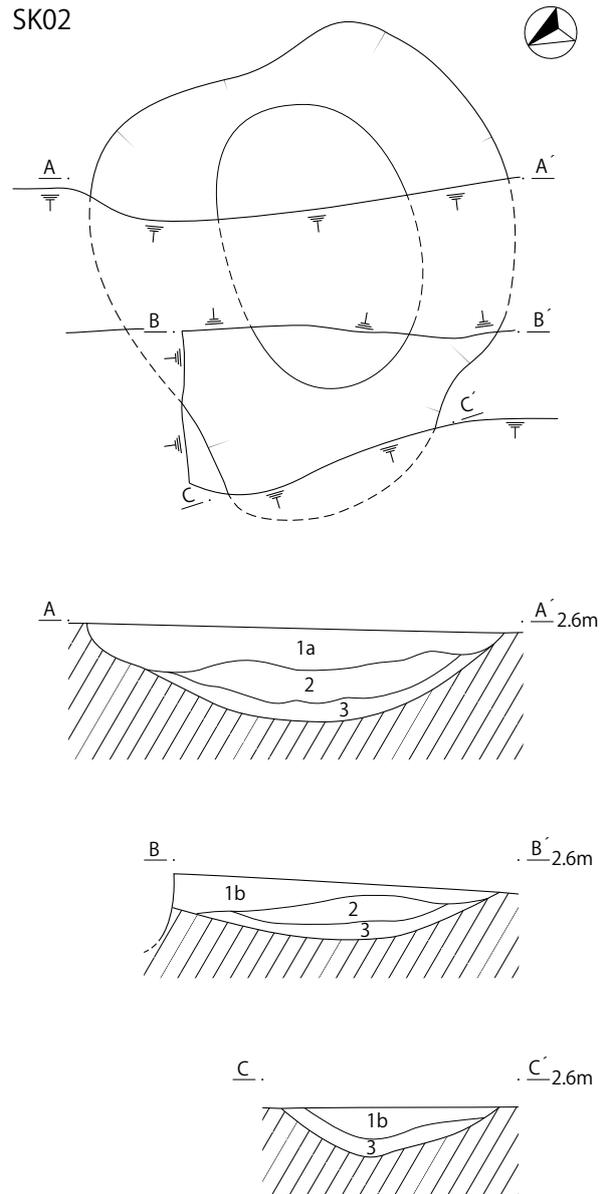
土坑 SK05・SK06(第45図) 両者は隣接して見つかっているが、切り合い関係にはない。SK06は遺構北側を近現代の攪乱に破壊されている。SK06の遺構埋土は2つの層に区分可能であり、1層と2層の間に、遺構東側から斜めに入り込んだと考えられる木の根の攪乱が認められる。

SK05から遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。SK06からは、土師器小片が出土しているが、遺構の時期を絞り込むのは難しい。

土坑 SK10(第46図) 遺構平面プランは不整形円形を呈する。検出面からの掘り込みの深さは10cm程度と浅い。

土師器小片が出土しているが、遺構の時期を絞り込むのは難しい。

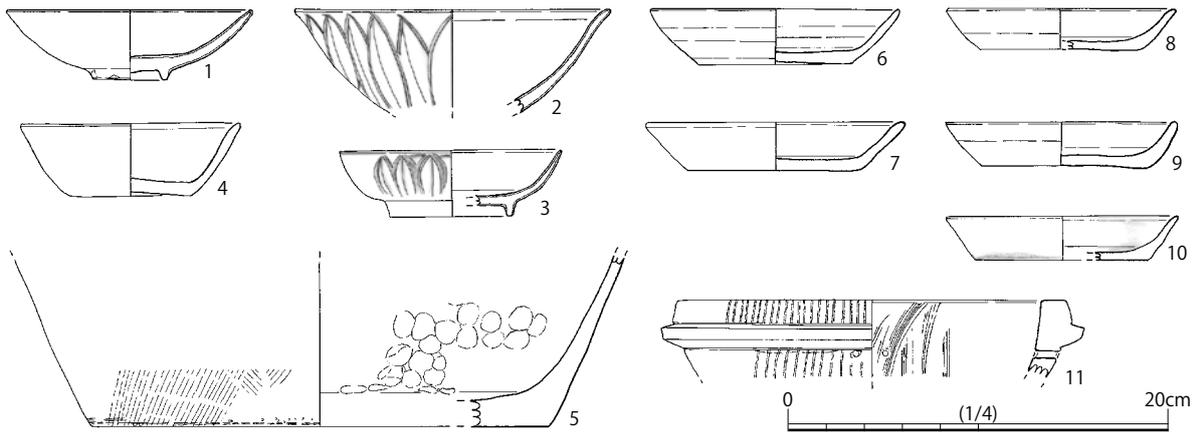
SK02



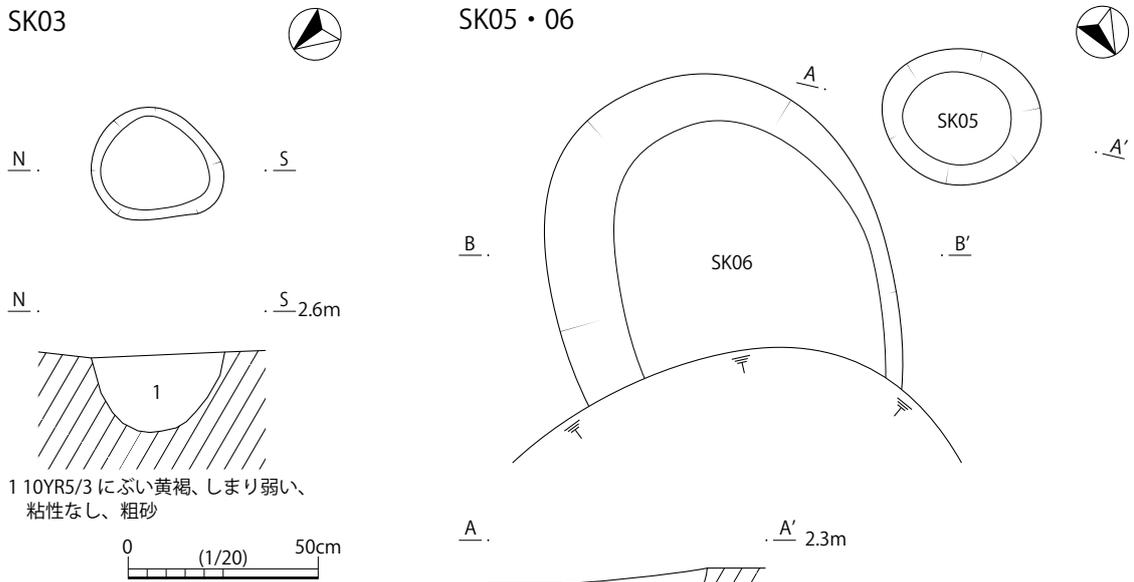
- 1a 10YR5/3 にぶい黄褐、しまりややあり、粘性なし、中砂～粗砂、10cm程度の小礫(円礫・角礫)を多量に含む、下層に比べて遺物を多く含む
 1b 10YR4/2 灰黄褐、その他の特徴は1a層と同様
 2 10YR3/2 黒褐、しまりややあり、粘性なし、中砂～粗砂、炭化物の微粒を含む、1a層に比べて遺物は少なく小礫もなし
 3 10YR5/4 にぶい黄褐、しまり弱い、粘性なし、粗砂、10YR3/2 黒褐の中砂～粗砂をブロック状に含む、遺物も小礫もなし

0 (1/40) 1m

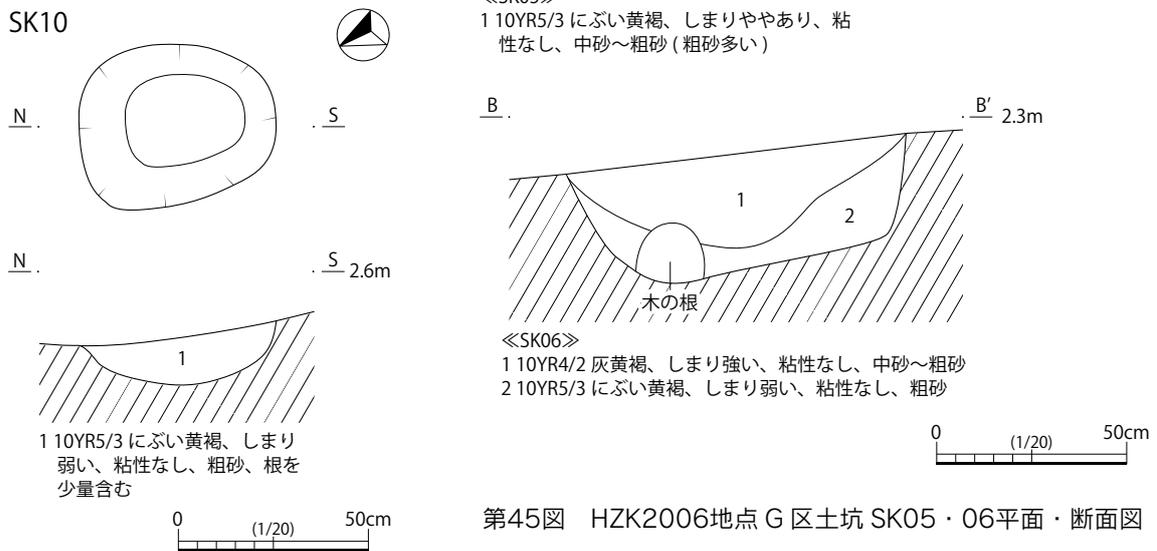
第42図 HZK2006地点G区
土坑 SK02平面・断面図



第43図 HZK2006地点 G 区土坑 SK02出土遺物

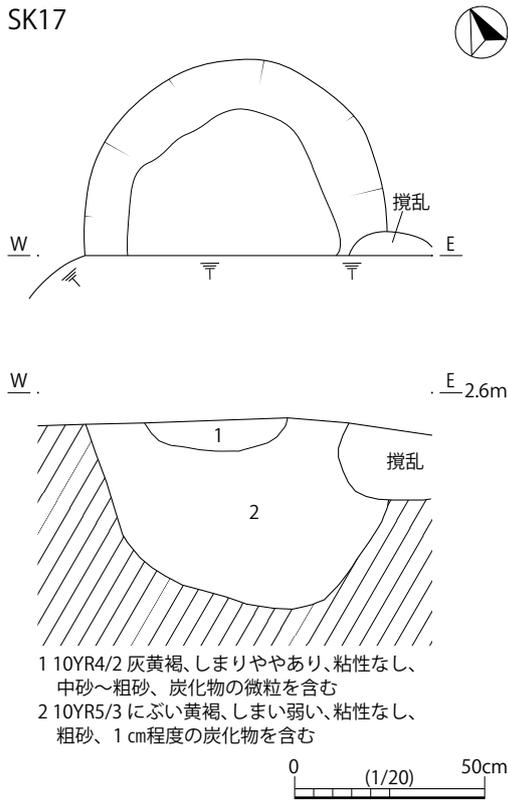


第44図 HZK2006地点 G 区
土坑 SK03平面・断面図

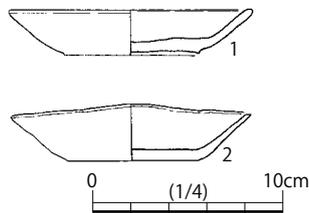


第45図 HZK2006地点 G 区土坑 SK05・06平面・断面図

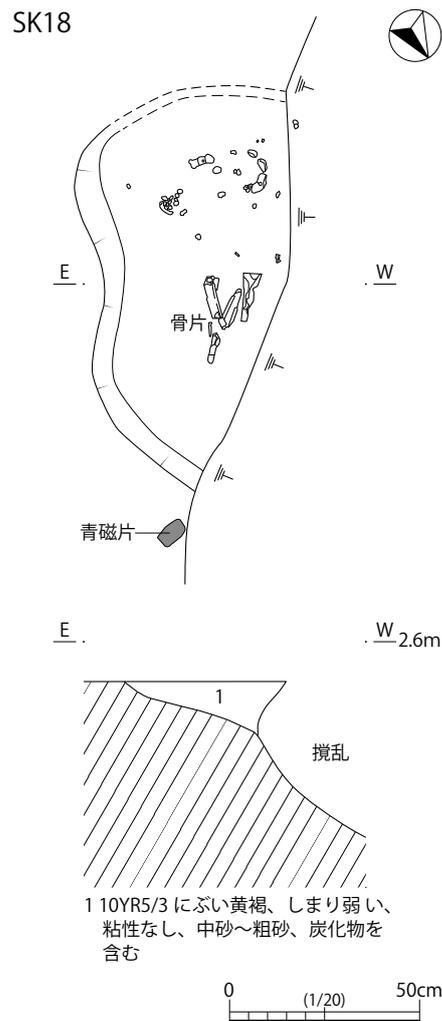
第46図 HZK2006地点 G 区
土坑 SK10平面・断面図



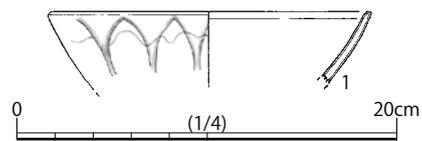
第47図 HZK2006地点 G 区
土坑 SK17平面・断面図



第48図 HZK2006地点 G 区
土坑 SK17出土遺物



第49図 HZK2006地点 G 区
土坑 SK18平面・断面図



第50図 HZK2006地点 G 区
土坑 SK18出土遺物

土坑 SK17 (第47図) 近現代の攪乱によって、遺構南側の大半が破壊されている。遺構埋土は2つに分層できる。1層は別の遺構として認識すべき掘り込みである可能性も考えたが、2層との境界は明瞭ではないため、同一遺構内での堆積層の違いと判断した。

2層からは完形の土師器が出土している。 (福永将大)

出土遺物 (第48図) 1・2はSK17出土の糸切り底の土師器の坏である。 (谷直子)

土坑 SK18 (第49図) 近現代の攪乱によって、遺構西側の大半が破壊されており、攪乱が遺構埋土を抉って、オーバーハングしている状態になっている。当初、攪乱の可能性も考えたが、攪乱を示すような堆積状況や遺物を確認することはできず、遺構として取り扱うこととした。

埋土から人骨と歯が出土した。埋葬された様子は窺えず、位置づけは不明である。

出土した青磁碗より、当該遺構は14世紀代の所産と考えられる。（福永将大）

出土遺物（第50図）片彫蓮弁文の青磁碗である。蓮弁の中心に鏝はない。釉調は黄褐色で半透明、胎土は黄灰でやや粗質である。大宰府編年の龍泉窯系青磁碗IV類で、14世紀初頭から後半の所産である（宮崎編 2000）。

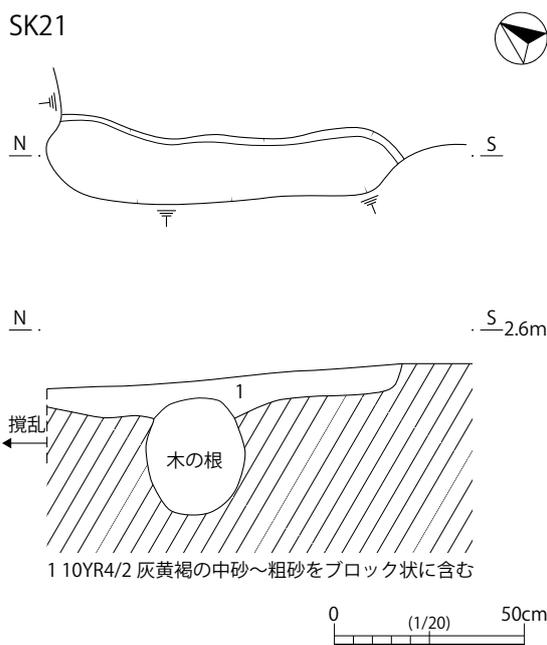
（谷 直子）

土坑 SK21（第51図）遺構西側の大半が、近現代の攪乱によって破壊されている。当初、攪乱の可能性も考えたが、攪乱を示すような堆積状況や遺物を確認することはできず、遺構として取り扱うこととした。遺構西側から斜めに入り込んだと考えられる木の根の攪乱が認められる。遺物は出土していない。

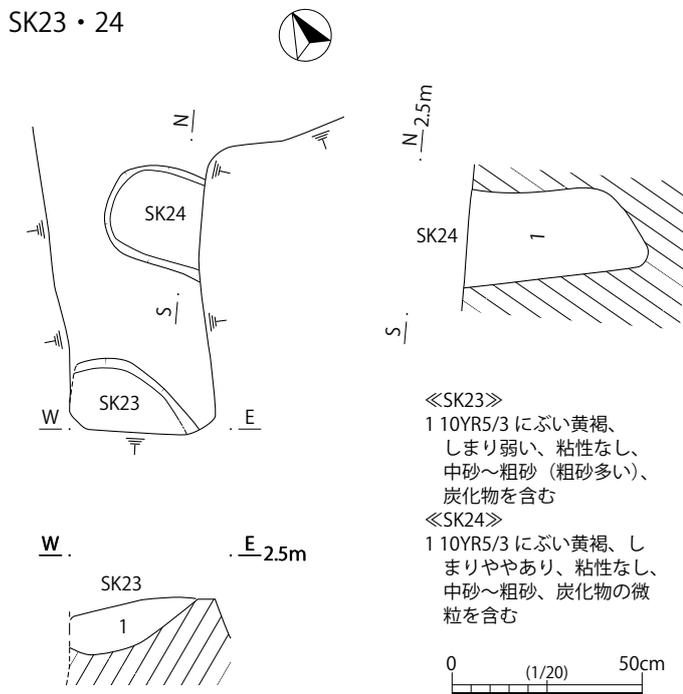
土坑 SK23・SK24（第52図）両者は隣接して見つかったが、切り合い関係にはない。SK23は遺構南側の大半を、SK24は遺構東側の大半を、近現代の攪乱によって破壊されている。SK24は、検出面からの掘り込みの深さは50cm程度と深い。

SK23から遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。SK24からは、土師器小片が出土しているが、遺構の時期を絞り込むのは難しい。

土坑 SK31（旧 SK27）・SK32（第53図）当初、SK27・SK31・SK32の3つの土坑が切り合っていると判断していた。サブトレンチを入れるなどして切り合い関係を精査した結果、SK31→SK32の順番で構築されることが判明した。また、SK27とSK31は切り合い関係にあると考えていたが、両者の埋土に明確な差異は認められないと考えるに至り、両者は同一遺構における堆積層の違いであると判断した。第53図 2-1 層



第51図 HZK2006地点 G 区
土坑 SK21平面・断面図



第52図 HZK2006地点 G 区
土坑 SK23・24平面・断面図

がSK27と認識していた堆積層である。

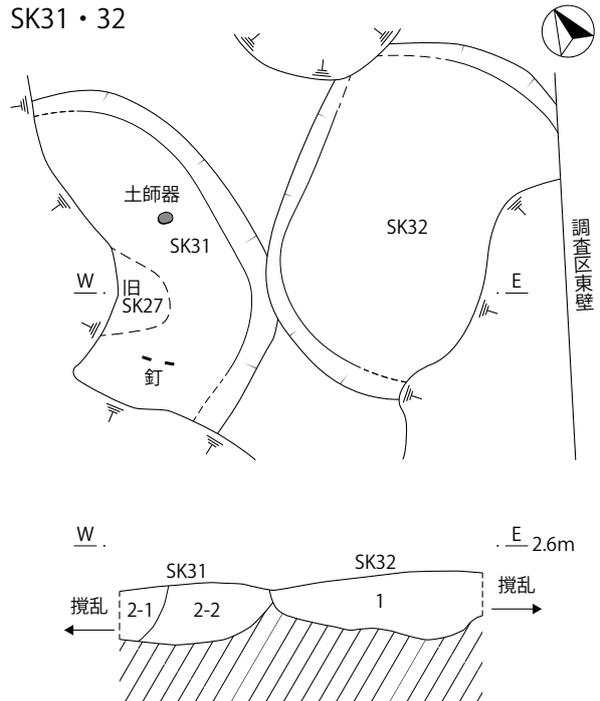
SK31からは、鉄釘が複数出土しており、検出面直下では完形の土師皿が出土している。SK32からは、土師器や陶器甕の小片が出土した。SK31・SK32ともに遺構の時期を絞り込むのは難しい。(福永将大)

出土遺物(第54図) 1～3はSK31の2-1層(旧SK27)出土の鉄釘である。いずれも断面四角形で体部に木質が付く。4～21はSK31の2-2層出土である。4は高台付の土師皿である。高台は断面三角形の輪高台で盃状を呈する。5～21は断面四角形の鉄釘で、頂部が残存するものは折り曲げている。いずれも体部に木質が付着しており、木棺の釘であったと考えられる。(谷 直子)

(5) その他出土遺物(第55図)

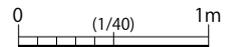
第55図は遺構外出土の遺物である。1は鎬蓮弁の青磁碗で、大宰府編年の龍泉窯系青磁碗Ⅱ類である。13世紀前半の所産(宮崎編 2000)。2は染付の小碗である。高台は高く、盃付は露胎である。見込みと体部外面に呉須で施文する。3は糸切り底の土師器の坏底部である。4は土師器の甕である。口縁部から頸部のみで全体の形は分からないが、器壁がやや薄く、古墳時代の土師器の可能性はある。5は陶器の甕口縁部である。口縁端面は露胎で、他は施釉される。均質な胎土や釉調から近代の所産である。6は大形の陶器の甕で、口縁部は粘土を帯状に貼り付けて、平坦に整形し頸部が屈曲する。不純物の少ない均質な胎土や釉調から近代の所産である。7は白磁の皿で見込みに菊花状の凹凸を施す。蛇の目で中央部が凹形になる高台の底部裏面に墨書が施される。高台形や釉調から近世以降の所産である。8は銅製の銚金具で、中央の孔に釘を刺して固定する。(谷 直子)

SK31・32

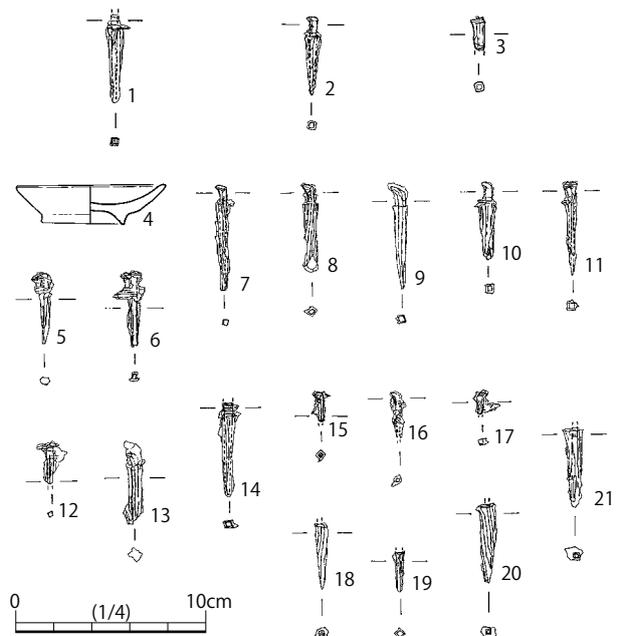


《SK32》
1 10YR4/2 灰黄褐、しまり弱い、粘性なし、中砂、こぶし大の礫を含む、炭化物を含む
《SK31》
2-1 10YR5/4 にぶい黄褐、しまり多い、粘性なし、中砂、小礫を含む
2-2 10YR5/3 にぶい黄褐、しまりややあり、粘性なし、中砂～粗砂、炭化物を含む(上層に多い)、焼骨片を含む、小礫を少量含む

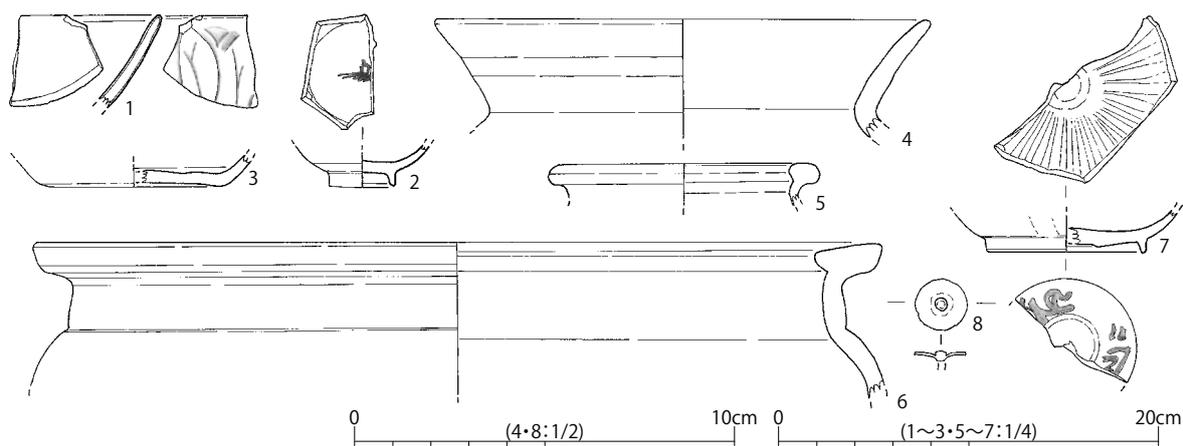
※凡例は例言を参照



第53図 HZK2006地点 G 区
土坑 SK31・32平面・断面図



第54図 HZK2006地点 G 区
土坑 SK31 (旧 SK27 含む) 出土遺物



第55図 HZK2006地点 G 区遺構外出土遺物

3. 小結

HZK2006地点（本部第二庁舎地点）は、旧工学部本館北東側周辺で2019年度に実施した立会調査地点（登録番号：1859）の東側に隣接している。立会調査では中世墓の存在が確認されており、本調査地点においても中世墓が見つかることが予想されていた。

本調査地点 A 区は、本部第 2 庁舎の北側に位置する。調査の結果、火葬土坑13基・木棺墓 1 基、溝 1 条、土坑32基、ピット11基、礫の集中 4 基を確認した。木棺墓 ST02は棺蓋を固定したと考えられる鉄釘が出土しており、副葬品から13世紀初頭以降の所産と考えられる。ほかに埋葬遺構 SX01では馬の骨 1 体分の下から人骨が出土した。SX01出土の馬の骨は放射性炭素年代測定によって江戸時代の可能性が高く、遺構から出土した炭化材はヒサカキ属で14世紀初頭～15世紀初頭の年代を示している。炭化材が人骨に伴うとすれば、馬の骨と人骨の埋没時期が異なる可能性が高い。また、火葬土坑 SK15・SK41・SK42はいずれも14世紀～15世紀中頃の年代値が出ている。（谷 直子）

本調査地点 G 区は、本部第 2 庁舎の南東側に位置している。調査の結果、火葬土坑 4 基・木棺墓 1 基・溝 2 条・土坑13基を検出した。木棺墓 ST35は、出土した副葬品から14世紀前半の所産と考えられる。十分な記録を残すことができなかったことは悔やまれるが、棺材と思われる鉄釘の出土状況から、木棺に遺体が埋葬されていたことは間違いなからう。

また、茶毘の場と考えられる火葬土坑が見つかったことも重要な成果である。出土した炭化物に対して放射性炭素年代測定を行ったところ、SK13・SK19ともに14世紀～15世紀前半の年代値が出ている。年代値から見ると、火葬土坑の出現は木棺墓 ST35に後出する可能性が高い。（福永将大）

註

1) 放射性炭素年代測定値については、パレオ・ラボ AMS 年代測定グループの報告（パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ2023）に基づき、 2σ 暦年代範囲を示した。以下同様。

引用文献

阿部泰之（編）2022『箱崎64—第92次・第102次・第108次発掘調査報告書—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1457集、福岡市教育委員会
 パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ 2023「箱崎遺跡 HZK1804・1903・2003・2006地点出土木材の放射性炭素年代

- 測定」谷直子（編）『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告7 箱崎遺跡—HZK1903・1904・2101地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第10集、九州大学埋蔵文化財調査室、238-255頁
- 福永将大（編）2021『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告4 箱崎遺跡—HZK1901・1905・2001・2002・2004地点—』九州大学埋蔵文化財調査室報告第5集、九州大学埋蔵文化財調査室
- 本田浩二郎（編）2023『箱崎68—第102次・第113次・第118次発掘調査報告書—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1485集、福岡市教育委員会
- 宮崎亮一（編）2000『大宰府条坊跡X V - 陶磁器分類編 -』大宰府市教育委員会

第1表 HZK2006地点A区出土遺物観察表

図	遺構・層位	種類	口径/ 長さ	底径/ 幅	器高/ 厚さ	胎土	焼成	色調	文様・調整	備考
3-1	SX01	土製品 泥面子	2.8	2.0	0.4	緻密	良好	表：10YR7/3にぶい黄橙 裏：10YR6/2灰黄褐	表：ナデ 裏：ナデ	
3-2	SX01	銅製品 金具	1.4	1.3	1.7					
3-3	SX01	銅製品 銭	2.7	3.6	0.7					2枚錆着
3-4	SX01	鉄製品 釘	[1.5]	[3.5]	0.9					木質付着
3-5	SX01	鉄製品 釘	[6.4]	[1.8]	0.3					木質付着
3-6	SX01	鉄製品 釘	[3.9]	[0.8]	0.5					
3-7	SX01	鉄製品 釘	[5.2]	[0.9]	0.6					木質付着
3-8	SX01	銅製品 銭	2.4	2.4	0.1					無文銭
5-1	ST02	青磁 碗	16.9	6.3	7.2	緻密	良好	5Y6/3オリーブ黄	外：施釉，露胎 内：施釉，施文	大宰府編年 龍泉窯系青磁碗 I-2a'類
5-2	ST02	土師器 皿	9.1	7.4	1.2	緻密，直径1～2mmの砂 粒を多く含む，雲母片 を少し含む	良好	7.5YR7/6橙	外：ナデ，摩滅，糸切り 内：ナデ，摩滅	
5-3	ST02	土師器 皿	9.1	7.7	1.2	緻密，直径1～2mmの砂 粒を多く含む，雲母片 を少し含む	良好	7.5YR7/6橙	外：ナデ，摩滅，糸切り 内：ナデ，摩滅	
5-4	ST02	土師器 皿	9.1	6.7	1.2	緻密，直径1～2mmの砂 粒・雲母片を多く含む	良好	7.5YR7/6橙	外：ナデ，摩滅，糸切り 内：ナデ，摩滅	
5-5	ST02	土師器 皿	8.6	7.0	1.2	緻密，直径1～2mmの砂 粒を多く含む	良好	7.5YR7/6橙	外：ナデ，摩滅，糸切り 内：ナデ，摩滅	
5-6	ST02	鉄製品 釘	[6.6]	[2.5]	1.1					木質付着
5-7	ST02	鉄製品 釘	[4.7]	[1.5]	0.7					木質付着
5-8	ST02	鉄製品 釘	[6.7]	[1.9]	1.0					木質付着
5-9	ST02	鉄製品 釘	[7.3]	[1.1]	1.6					木質付着
5-10	ST02	鉄製品 釘	[6.6]	[1.7]	0.9					木質付着
9-1	SK12	青磁 碗	(15.0)		[3.8]	緻密	良好	2.5GY7/1明オリーブ灰	外：施釉，施文 内：施釉	龍泉窯系青磁碗 III-2類
9-2	SK12	青磁 碗			[3.4]	緻密	良好	5GY7/1明オリーブ灰	外：施釉，施文，露胎 内：施釉	龍泉窯系青磁碗 III-2類
9-3	SK12	ガラス製 丸玉	1.0	1.0	0.5					0.61g
9-4	SK18	土師器 坏	12.8	9.0	2.6	緻密，直径1～2mmの砂 粒・雲母片・赤色粒子 を少し含む	良好	7.5YR7/6橙	外：ナデ，糸切り，板状圧痕 内：ナデ	
9-5	SK18	土師器 皿	8.9	6.2	1.3	緻密，直径2mm大の砂 粒・雲母片を含む	良好	7.5YR7/4にぶい橙	外：ナデ，糸切り，板状圧痕 内：ナデ	
9-6	SK18	土師器 皿	7.8	6.3	1.5	緻密，雲母片を含む	良好	7.5YR7/6橙	外：ナデ，糸切り，板状圧痕 内：ナデ	

II HZK2006地点（本部第二庁舎地点）

図	遺構・層位	種類	口径/ 長さ	底径/ 幅	器高/ 厚さ	胎土	焼成	色調	文様・調整	備考
9-7	SK18	土師器 皿	8.4	6.8	1.0	緻密、直径2mm大の砂 粒・雲母片を含む	良好	10YR7/3にぶい黄橙	外：ナデ、糸切り、板状圧痕 内：ナデ	
9-8	SK18	土師器 皿	7.9	6.5	1.3	緻密、雲母片を少し含 む	良好	7.5YR7/6橙	外：ナデ、糸切り、板状圧痕 内：ナデ	
11-1	SK14b	土師器 杯	13.1	7.7	2.6	緻密、直径1～3mmの砂 粒・雲母片を含む	良好	10YR7/6明黄褐	外：ナデ、糸切り、板状圧痕 内：ナデ、スス付着	
11-2	SK14b	鉄製品 釘	[3.6]	1.3	1.1					鉄の刃部状のもの の錆着
11-3	SK14b	鉄製品 釘	[3.3]	1.1	0.4					
14-1	SK17	土師器 杯	(10.5)	(5.6)	2.55	緻密、直径1～3mmの砂 粒・赤色粒子を含む	良好	外：7.5YR7/6橙 内：7.5YR8/6浅黄橙	外：ナデ、糸切り 内：ナデ	
14-2	SK17	土師器 杯	11.2	7.2	2.55	緻密、直径2mm大の砂 粒・雲母片を含む	良好	7.5YR7/4にぶい橙	外：ナデ、糸切り、板状圧痕 内：ナデ	
14-3	SK17	土師器 杯	(10.9)	(6.5)	2.45	緻密、赤色粒子を含む	良好	外：7.5YR7/4にぶい橙 内：7.5YR7/6橙	外：ナデ、糸切り 内：ナデ	
14-4	SK17	土師器 杯	(11.1)	(6.0)	2.4	緻密、直径1～2mmの砂 粒を少し含む、赤色粒 子を少し含む	良好	7.5YR7/4にぶい橙	外：ナデ、糸切り 内：ナデ	
14-5	SK17	土師器 杯	(11.2)	(7.8)	2.2	やや緻密	良好	7.5YR6/3にぶい褐	外：ナデ、糸切り、板状圧痕 内：ナデ	
14-6	SK17	土師器 杯	12.3	7.2	2.9	緻密、直径1～3mmの砂 粒・雲母片を少し含む	良好	7.5YR7/6橙	外：ナデ、糸切り、スス付着 内：ナデ	
14-7	SK17	土師器 皿	(6.9)	4.6	1.4	緻密、赤色粒子を含む	良好	外：7.5YR7/4にぶい橙 内：7.5YR7/3にぶい橙	外：ナデ、糸切り 内：ナデ	
14-8	SK17	鉄製品 釘	[3.0]	1.9	0.9					木質付着
14-9	SK17	鉄製品 釘	[6.2]	1.3	0.7					木質付着
16-1	SK23	鉄製品 釘	[5.6]	1.7	0.8					
16-2	SK23	鉄製品 釘	[3.3]	1.1	0.8					
16-3	SK29	土師器 皿	(6.5)	(5.0)	1.4	緻密、直径1～3mmの砂 粒を含む	良好	外：7.5YR6/4にぶい橙 内：7.5YR7/4にぶい橙	外：ナデ、糸切り 内：ナデ	
16-4	SK29	土師器 皿	(7.9)	(6.5)	1.3	緻密、直径1mm大の砂 粒・赤色粒子を含む	良好	7.5YR7/6橙	外：ナデ、糸切り 内：ナデ	
16-5	SK30	鉄製品 釘	[5.0]	1.2	0.6					
16-6	SK30	鉄製品 釘	[4.9]	2.0	0.6					
16-7	SK30	木製品 数珠玉	0.7	0.9	0.4					0.08g
16-8	SK30	木製品 数珠玉	0.8	0.9	0.4					0.12g
16-9	SK30	木製品 数珠玉	0.7	0.8	0.4					0.10g
16-10	SK30	木製品 数珠玉	0.7	0.9	0.5					0.11g
16-11	SK30	木製品 数珠玉	0.8	0.8	0.5					0.12g
16-12	SK30	木製品 数珠玉	0.8	0.9	0.4					0.10g
16-13	SK30	木製品 数珠玉	0.8	1.3	0.7					3つ連なってい る 0.29g
16-14	SK30	木製品 数珠玉	1.3	1.7	0.8					4つ連なってい る 0.46g
16-15	SX32a	土師器 杯	(10.6)	(6.8)	2.7	緻密、直径2mm大の砂 粒・雲母片を含む	良好	10YR7/4にぶい黄橙	外：ナデ、糸切り、板状圧痕 内：ナデ	
16-16	SX32a	土師器 杯	(11.0)	(5.8)	2.7	緻密、直径1～3mmの砂 粒を含む	良好	外：10YR7/4にぶい黄橙 内：7.5YR7/4にぶい橙	外：ナデ、糸切り 内：ナデ	
16-17	SX32a	土師器 杯	(11.9)	(7.0)	2.4	緻密、直径1～3mmの砂 粒を含む	良好	7.5YR7/4にぶい橙	外：ナデ、糸切り 内：ナデ	
20-1	SK38	土師器 皿	7.8	5.6	1.8	緻密、雲母片・赤色粒 子を少し含む	良好	外：10YR7/6明黄褐 内：5YR7/4にぶい橙	外：ナデ、糸切り、板状圧痕 内：ナデ	
20-2	SP49	土師器 皿	8.2	6.4	1.0	緻密、直径1～2mmの砂 粒を含む	良好	5YR6/6橙	外：ナデ、糸切り 内：ナデ	

図	遺構・層位	種類	口径/ 長さ	底径/ 幅	器高/ 厚さ	胎土	焼成	色調	文様・調整	備考
20-3	SK58	土師器 皿	6.7	5.1	1.1	緻密, 雲母片を少し含 む	良好	7.5YR7/6橙	外: ナデ, 糸切り 内: ナデ	
20-4	SK40a	土師器 坏	11.2	7.6	2.6	緻密, 直径1~3mmの砂 粒を多く含む, 雲母片 を含む	良好	外: 7.5YR7/6橙 内: 5YR6/6橙	外: ナデ, 糸切り, 板状圧痕 内: ナデ	
20-5	SK40a	土師器 坏	(11.5)	6.3	2.5	緻密, 直径1~4mmの砂 粒・雲母片を含む	良好	7.5YR7/4にぶい橙	外: ナデ, 糸切り 内: ナデ	
20-6	SK40a	土師器 皿	8.2	6.4	1.4	緻密, 雲母片を含む	良好	7.5YR7/6橙	外: ナデ, 摩滅, 糸切り 内: ナデ, 摩滅	
22-1	SK41	鉄製品 釘	[6.9]	1.6	0.6					
22-2	SK41	鉄製品 釘	[5.2]	1.6	0.6					
22-3	SK41	鉄製品 釘	[5.7]	1.5	0.7					骨付着
22-4	SK41	鉄製品 釘	[5.3]	[1.2]	0.9					
22-5	SK41	鉄製品 釘	[5.0]	1.1	0.5					
22-6	SK41	鉄製品 釘	[3.8]	1.2	0.6					
22-7	SK41	鉄製品 釘	[3.9]	2.5	0.9					
22-8	SK42	鉄製品 釘	[2.5]	1.4	0.9					
24-1	SK44	土師器 皿	7.6	6.7	1.1	緻密, 直径1~4mmの砂 粒・雲母片を含む	良好	外: 7.5YR7/4にぶい橙 内: 10YR7/3にぶい黄橙	外: 摩滅, 糸切り 内: 摩滅	
24-2	SK44	鉄製品 釘	[5.7]	[2.3]	1.0					
24-3	SK44	鉄製品 釘	[5.7]	[2.0]	0.4					
24-4	SK44	鉄製品 釘	[4.4]	[1.5]	0.6					
24-5	SK44	鉄製品 釘	[4.7]	[1.2]	0.7					
24-6	SK44	鉄製品 釘	[5.1]	[1.6]	0.5					
24-7	SK44	鉄製品 釘	[4.7]	[1.7]	0.8					
24-8	SK44	鉄製品 釘	[4.6]	[1.7]	1.1					
24-9	SK44	鉄製品 釘	[5.0]	2.0	0.7					木質付着
24-10	SK44	鉄製品 釘	[4.0]	[1.3]	0.7					
26-1	SK57	土師器 皿	(11.2)	(7.7)	1.8	緻密, 直径1~2mmの砂 粒を含む	良好	外: 7.5YR7/4にぶい橙 内: 7.5YR7/6橙	外: ナデ, 糸切り 内: ナデ	
26-2	SK57	土師器 坏	12.4	7.8	2.9	やや緻密, 直径3mm大 の砂粒・雲母片を含む	良好	7.5YR7/4にぶい橙	外: ナデ, 糸切り, 板状圧痕 内: ナデ	
26-3	SK57	銅製品 板状製品	3.6	1.7	0.04					
29-1	遺構外	青磁 碗	16.2	5.4	6.2	緻密	良好	5Y6/4オリーブ黄	外: 施釉, 施文 内: 施釉	大宰府編年 龍泉窯系青磁碗 II-b 類
29-2	遺構外	土師器 坏	13.2	8.4	2.9	やや緻密, 直径4mm大 の砂粒・雲母片を含む	良好	10YR8/4浅黄橙	外: ナデ, 糸切り, 板状圧痕 内: ナデ	
29-3	遺構外	土師器 坏	11.6	7.6	2.5	緻密, 直径2mm大の砂 粒・雲母片を含む	良好	5YR6/6橙	外: ナデ, 糸切り, 板状圧痕 内: ナデ	
29-4	遺構外	土師器 皿	7.8	5.3	1.6	緻密, 直径1mm大の砂 粒を少し含む, 雲母片 を多く含む	良好	外: 5YR7/4にぶい橙 内: 7.5YR7/3にぶい橙	外: ナデ, 糸切り, 板状圧痕 内: ナデ	
29-5	遺構外	ガラス製 ビー玉	1.2	1.2	1.2			青緑		1.99g
29-6	遺構外	ガラス製 おはじき	1.7	1.7	0.6			青		1.4g
29-7	遺構外	べっ甲製 ?丸玉	1.0	1.0	0.8			黒, 茶褐		0.68g
29-8	遺構外	銅製品 金具	1.1	2.8	0.5					

II HZK2006地点（本部第二庁舎地点）

図	遺構・層位	種類	口径/ 長さ	底径/ 幅	器高/ 厚さ	胎土	焼成	色調	文様・調整	備考
29-9	遺構外	鉄製品 釘	[3.0]	2.1	0.8					木質付着
29-10	遺構外	鉄製品 釘	[3.7]	2.0	0.7					木質付着

第2表 HZK2006地点 G 区出土遺物観察表

図	遺構・層位	種類	口径/ 長さ	底径/ 幅	器高/ 厚さ	胎土	焼成	色調	文様・調整	備考
31-1	SK13	木製品 数珠玉	0.8	0.9	0.45					0.13g
31-2	SK13	木製品 数珠玉	0.8	0.9	0.4					0.11g
31-3	SK13	木製品 数珠玉	0.8	0.85	0.4					0.11g
31-4	SK13	木製品 数珠玉	0.8	0.9	0.45					0.10g
31-5	SK13	木製品 数珠玉	0.8	0.9	0.43					0.12g
31-6	SK13	木製品 数珠玉	0.8	0.85	0.45					0.09g
31-7	SK13	木製品 数珠玉	0.65	0.7	0.35					0.03g
31-8	SK13	木製品 数珠玉	0.8	0.9	0.4					0.11g
31-9	SK13	土師器 皿	7.2	5.6	1.9	緻密	良好	内：7.5YR6/4にぶい橙 外：7.5YR7/6橙	外：ナデ，糸切り 内：ナデ	
35-1	SK33	鉄製品 釘	[4.2]	1.1	0.5					
35-2	SK33	鉄製品 釘	[6.1]	[2.1]	0.8					
35-3	SK33	鉄製品 釘	[4.6]	[1.3]	0.8					
35-4	SK33	鉄製品 釘	[4.4]	1.1	0.7					
35-5	SK33	鉄製品 釘	[5.1]	1.1	0.7					
37-1	ST35 A-1	白磁 碗	17.4	5.5	7.1	緻密	良好	5GY7/1明オリーブ灰	外：施釉，口禿，露胎 内：施釉	大宰府編年 白磁碗IX-1類
37-2	ST35 A-2	白磁 皿	13.0	5.2	2.5	緻密	良好	5Y7/1灰白	外：施釉，露胎 内：施釉，施文	白磁皿VIII-2b類
37-3	ST35 A-3	白磁 皿	13.1	4.6	2.5	緻密	良好	7.5Y7/2灰白	外：施釉，露胎 内：施釉，施文	白磁皿VIII-2b類
37-4	ST35 B-1	白磁 皿	12.8	7.7	2.8	緻密	良好	7.5GY8/1明緑灰	外：施釉，口禿，露胎 内：施釉	白磁皿IX-1c類
37-5	ST35 B-2	白磁 皿	13.0	4.3	2.6	緻密	良好	内：5Y7/2灰白 外：5Y8/1灰白， 10YR7/4にぶい黄橙	外：施釉，露胎 内：施釉	白磁皿VIII-2a類 底部外面に墨書 有
37-6	ST35	鉄製品 釘	[7.8]	[1.9]	1.0					木質付着
37-7	ST35	鉄製品 釘	[4.7]	[1.2]	0.7					木質付着
37-8	ST35	鉄製品 釘	[5.5]	[2.1]	0.3					木質付着
37-9	ST35	鉄製品 釘	[4.2]	2.3	0.6					木質付着
37-10	ST35	鉄製品 釘	[2.1]	1.3	0.4					木質付着
37-11	ST35	鉄製品 釘	[6.0]	[2.9]	0.7					木質付着

図	遺構・層位	種類	口径/ 長さ	底径/ 幅	器高/ 厚さ	胎土	焼成	色調	文様・調整	備考
37-12	ST35	鉄製品 釘	[7.5]	[4.3]	0.4					木質付着
37-13	ST35	鉄製品 釘	[4.1]	[3.1]	0.8					木質付着
37-14	ST35	鉄製品 釘	[5.9]	[3.9]	0.6					木質付着
37-15	ST35	鉄製品 釘	[6.9]	[2.0]	1.2					木質付着
37-16	ST35	鉄製品 釘	[6.5]	[2.8]	0.8					木質付着
37-17	ST35	鉄製品 釘	[7.8]	[4.0]	0.9					木質付着
37-18	ST35	鉄製品 釘	[2.7]	1.3	0.5					木質付着
40-1	SD09	鉄製品 釘	[3.2]	1.9	0.6					木質付着
40-2	SD09	鉄製品 釘	[5.0]	2.6	0.6					木質付着
40-3	SD09	鉄製品 釘	[6.5]	1.8	0.8					木質付着
40-4	SD30	土師器 皿	(10.8)	(8.9)	1.25	緻密, 赤色粒子を含む	良好	5YR6/6橙	外: ナデ, 糸切り 内: ナデ	
40-5	SD30	ガラス製 切子玉	1.1	1.1	1.0			淡黄		1.04g
40-6	SD30	銅製品 銭	2.5	2.4	0.1					至道元寶
40-7	SD30	銅製品 銭	2.3	2.4	0.1					大観通寶
43-1	SK02	青磁 碗	(13.1)	(4.0)	3.8	緻密	良好	10Y6/2オリーブ灰	外: 施釉, 露胎 内: 施釉	
43-2	SK02	青磁 碗	(16.6)		[5.5]	緻密	良好	外: 5Y5/2灰オリーブ 内: 5Y6/3オリーブ黄	外: 施釉, 施文 内: 施釉	大宰府編年 龍泉窯系青磁碗 II-b 類
43-3	SK02	青磁 坏	(11.8)	(6.5)	3.5	緻密	良好	2.5GY6/1オリーブ灰	外: 施釉, 施文, 露胎 内: 施釉	龍泉窯系青磁坏 III -5b 類
43-4	SK02	白磁 皿	11.6	6.3	3.8	緻密	良好	5GY8/1灰白	外: 施釉, 口禿, 露胎 内: 施釉	白磁皿IX-1c 類
43-5	SK02	陶器 甕		(24.0)	[9.0]	やや緻密, 直径1mm大の砂粒を多く含む	良好	外: 2.5Y7/3浅黄 内: 2.5Y8/3淡黄	外: 施釉, 露胎, ハケメ 内: 施釉	
43-6	SK02	土師器 坏	13.1	8.0	2.9	やや緻密, 直径1~3mmの砂粒・雲母片を含む	良好	外: 5YR6/6橙 内: 5YR6/8橙	外: ナデ, 糸切り, 板状圧痕 内: ナデ	
43-7	SK02	土師器 坏	13.6	9.0	2.5	緻密, 直径1mm大の砂粒・雲母片を少し含む	良好	内: 5YR7/4にぶい橙 外: 5YR6/4にぶい橙	外: ナデ, 糸切り, 板状圧痕, スス付着 内: ナデ	
43-8	SK02	土師器 坏	(12.1)	(8.3)	2.15	緻密, 直径1mm大の砂粒・雲母片を含む	良好	7.5YR6/6橙	外: ナデ, 糸切り, 板状圧痕 内: ナデ, スス付着	
43-9	SK02	土師器 坏	12.3	8.6	2.4	緻密, 直径1mm大の砂粒を含む, 雲母片を多く含む	良好	外: 7.5YR6/3にぶい褐 内: 7.5YR6/4にぶい橙	外: ナデ, 糸切り 内: ナデ	
43-10	SK02	土師器 坏	(12.2)	(9.2)	2.3	緻密, 直径3mm大の砂粒・雲母片を少し含む	良好	7.5YR5/3にぶい褐	外: ナデ, 糸切り, 板状圧痕, スス付着 内: ナデ, スス付着	
43-11	SK02	滑石製 石鍋	(20.4)		[4.0]				外: 工具痕, 補修孔	
48-1	SK17	土師器 坏	(12.6)	(7.1)	2.4	緻密, 直径1~2mmの砂粒を含む	良好	5YR7/8橙	外: ナデ, 摩滅, 糸切り 内: ナデ, 摩滅	
48-2	SK17	土師器 坏	12.6	6.8	3.0	緻密, 直径3mm大の砂粒・雲母片を含む	良好	7.5YR7/6橙	外: ナデ, 糸切り, 板状圧痕 内: ナデ	
50-1	SK18	青磁 碗	(17.0)		[3.7]	緻密	良好	2.5Y6/3にぶい黄	外: 施釉, 施文 内: 施釉	龍泉窯系青磁碗 IV類
54-1	SK31 2-1層 (旧 SK27)	鉄製品 釘	[4.6]	1.3	0.4					木質付着
54-2	SK31 2-1層 (旧 SK27)	鉄製品 釘	[4.1]	1.0	0.6					木質付着
54-3	SK31 2-1層 (旧 SK27)	鉄製品 釘	[1.8]	0.8	0.6					木質付着

II HZK2006地点（本部第二庁舎地点）

図	遺構・層位	種類	口径/ 長さ	底径/ 幅	器高/ 厚さ	胎土	焼成	色調	文様・調整	備考
54-4	SK31 2-2層	土師器 高台付皿	7.8	4.4	2.0	緻密, 雲母片を少し含 む	良好	外: 5YR6/4にぶい橙 内: 5YR6/6橙	外: ナデ 内: ナデ	
54-5	SK31 2-2層	鉄製品 釘	[3.8]	[1.2]	0.5					木質付着
54-6	SK31 2-2層	鉄製品 釘	[4.1]	1.8	0.5					木質付着
54-7	SK31 2-2層	鉄製品 釘	[5.7]	1.1	0.5					木質付着
54-8	SK31 2-2層	鉄製品 釘	[4.8]	1.0	0.6					木質付着
54-9	SK31 2-2層	鉄製品 釘	5.6	1.1	0.5					木質付着
54-10	SK31 2-2層	鉄製品 釘	[4.1]	[1.3]	0.6					木質付着
54-11	SK31 2-2層	鉄製品 釘	[5.0]	0.9	0.6					木質付着
54-12	SK31 2-2層	鉄製品 釘	[2.3]	1.6	0.3					木質付着
54-13	SK31 2-2層	鉄製品 釘	[4.4]	[1.2]	0.8					木質付着
54-14	SK31 2-2層	鉄製品 釘	[5.1]	1.3	0.5					木質付着
54-15	SK31 2-2層	鉄製品 釘	[1.6]	1.0	0.7					木質付着
54-16	SK31 2-2層	鉄製品 釘	[2.5]	[0.9]	0.6					木質付着
54-17	SK31 2-2層	鉄製品 釘	[1.3]	[1.5]	0.4					木質付着
54-18	SK31	鉄製品 釘	[3.6]	0.7	0.5					木質付着
54-19	SK31	鉄製品 釘	[2.2]	0.7	0.6					木質付着
54-20	SK31	鉄製品 釘	[4.2]	1.1	0.6					木質付着
54-21	SK31	鉄製品 釘	[4.2]	1.1	0.8					木質付着
55-1	遺構外	青磁 碗			[4.8]	緻密	良好	外: 7.5Y6/2灰オリーブ 内: 2.5GY7/1明オリーブ灰	外: 施釉, 施文 内: 施釉	大宰府編年 龍泉窯系青磁碗 Ⅱ類
55-2	遺構外	染付 碗		(3.5)	[2.2]	緻密	良好	10GY8/1明緑灰	外: 施釉, 施文, 露胎 内: 施釉, 施文	
55-3	遺構外	土師器 坏		(9.0)	[1.4]	やや緻密, 直径1~5mm の砂粒を多く含む	良好	7.5YR8/4浅黄橙	外: ナデ, 系切り 内: ナデ	
55-4	遺構外	土師器 甕	(13.0)		[3.1]	緻密, 直径3mm大の砂 粒・雲母片を含む	良好	外: 7.5YR6/3にぶい褐 内: 7.5YR6/4にぶい橙	外: ナデ 内: ナデ	古墳時代か?
55-5	遺構外	陶器 甕	(14.2)		[1.8]	緻密, 黒色粒子を含む	良好	2.5Y6/4にぶい黄	外: 施釉, 露胎 内: 施釉	
55-6	遺構外	陶器 甕	(44.7)		[7.5]	緻密	良好	2.5Y6/4にぶい黄	外: 施釉 内: 施釉	
55-7	遺構外	白磁 皿		(8.4)	[2.1]	緻密	良好	外: N8/ 灰白 内: 10GY8/1明緑灰	外: 施釉, 露胎 内: 施釉, 施文	底部外面に墨書 有
55-8	遺構外	銅製品 銚金具	1.4	1.5	0.3					



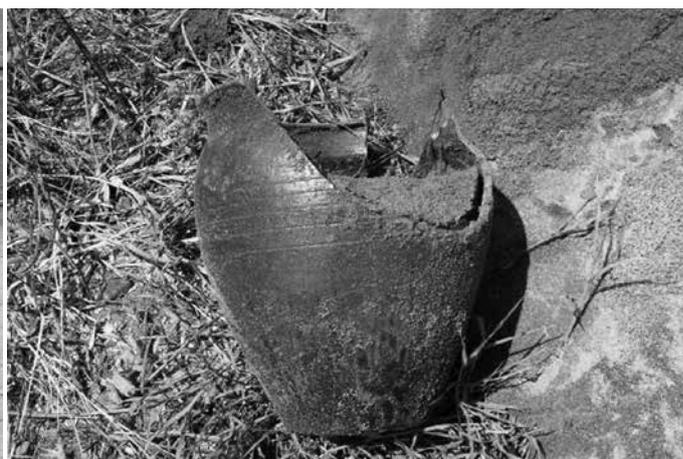
1-1 HZK1602地点 掘削状況（南から）



1-2 HZK1602地点 甕棺2検出状況（南西から）



1-3 HZK1602地点 甕棺3検出状況（南から）



1-4 HZK1602地点 出土甕棺3



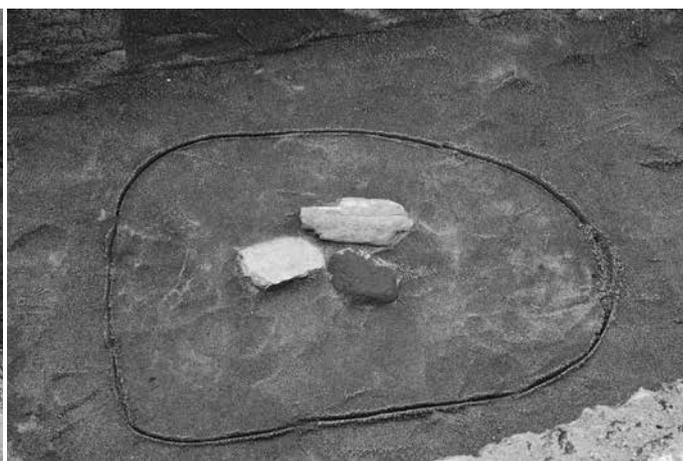
1-5 立試1849地点 立会地点（南東から）



1-6 立試1849地点 甕棺出土状況（南西から）



1-7 立試1859地点 土師器出土状況（南西から）



1-8 立試1859地点 SX02（北から）



2-1 立試1859地点 SX02人骨出土状況 (南西から)



2-2 立試1859地点 SX06人骨出土状況



2-3 立試1859地点 SX06完掘



2-4 立試1859地点 完掘 (南東から)



2-5 立試1859地点 完掘 (北西から)



2-6 立試1925地点 掘削状況 (西から)



2-7 立試1925地点 調査区 (北東から)



2-8 立試2010地点 境界塀撤去 (北西から)



3-1 HZK2006地点 A 区 調査区遠景 (北東から)



3-2 HZK2006地点 A 区 埋葬遺構 SX01馬骨 (北から)



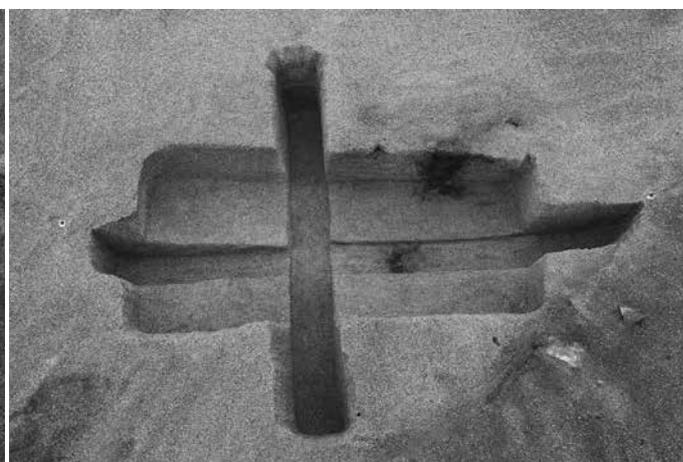
3-3 HZK2006地点 A 区 埋葬遺構 SX01石組 (西から)



3-4 HZK2006地点 A 区 埋葬遺構 SX01人骨 (南東から)



3-5 HZK2006地点 A 区 木棺墓 ST02遺物 (南西から)



3-6 HZK2006地点 A 区 木棺墓 ST02完掘 (西から)



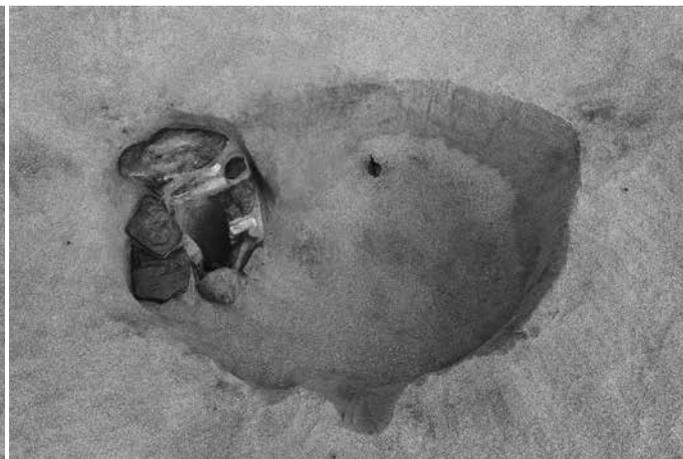
3-7 HZK2006地点 A 区 土坑 SK11遺物出土状況 (南から)



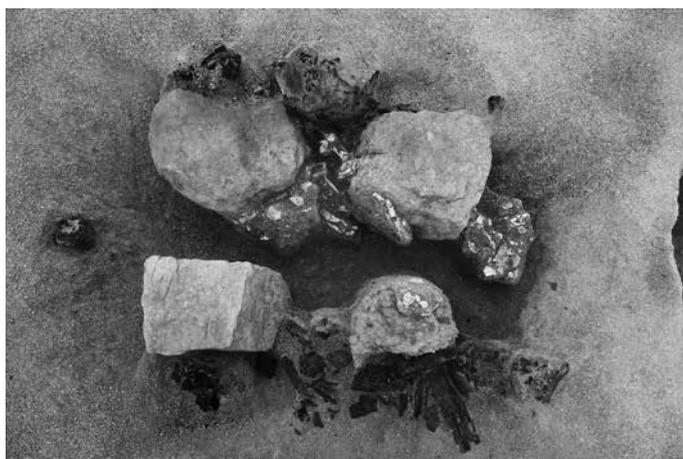
3-8 HZK2006地点 A 区 土坑 SK13 (北西から)



4-1 HZK2006地点 A 区 土坑 SK14 1面 (西から)



4-2 HZK2006地点 A 区 土坑 SK14 3面 (西から)



4-3 HZK2006地点 A 区 火葬土坑 SK15 (北東から)



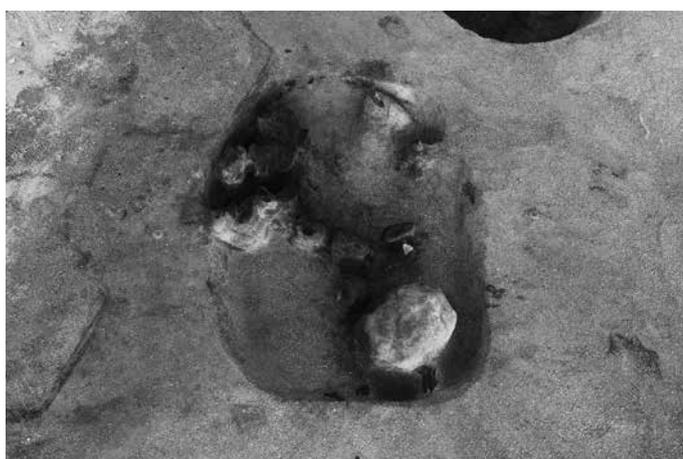
4-4 HZK2006地点 A 区 礫集中 SX16a (北西から)



4-5 HZK2006地点 A 区 ピット SP21 (北から)



4-6 HZK2006地点 A 区 火葬土坑 SK22半裁 (南東から)



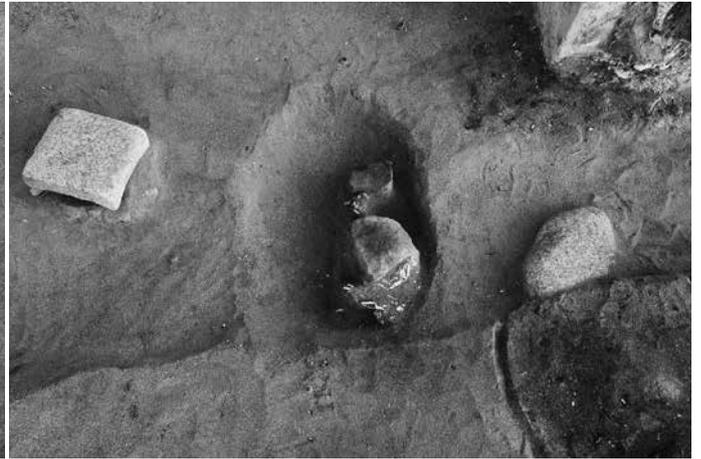
4-7 HZK2006地点 A 区 火葬土坑 SK22出土状況 (南から)



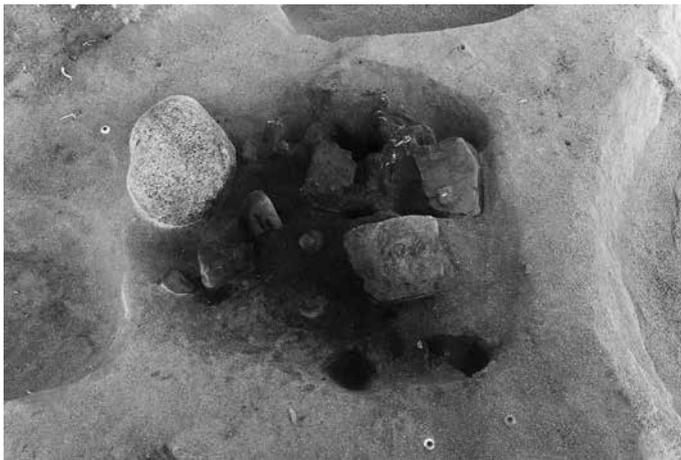
4-8 HZK2006地点 A 区 火葬土坑 SK23 (東から)



5-1 HZK2006地点 A 区 土坑 SK24 (南東から)



5-2 HZK2006地点 A 区 火葬土坑 SK25 (南から)



5-3 HZK2006地点 A 区 火葬土坑 SK30 (西から)



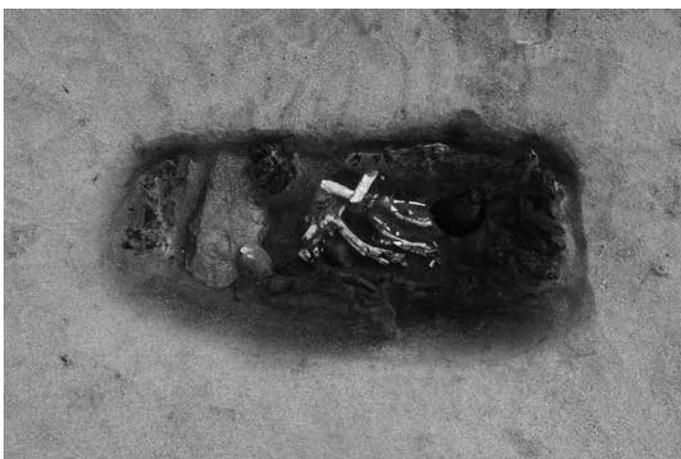
5-4 HZK2006地点 A 区 火葬土坑 SK31 (南東から)



5-5 HZK2006地点 A 区 礫集中 SX32a (南から)



5-6 HZK2006地点 A 区 火葬土坑 SK36 (東から)



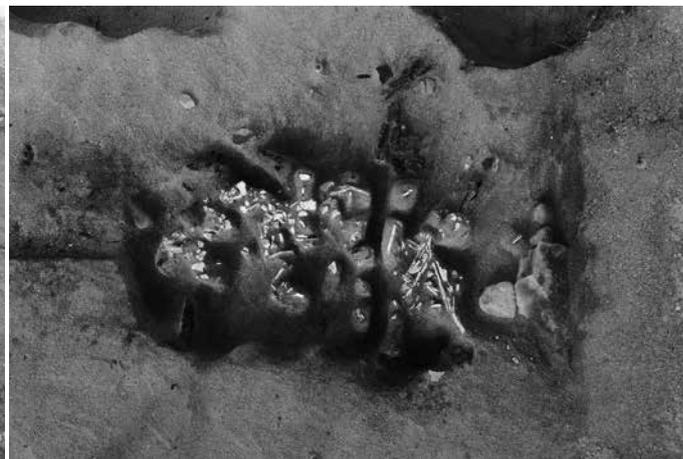
5-7 HZK2006地点 A 区 火葬土坑 SK37 (西から)



5-8 HZK2006地点 A 区 火葬土坑 SK37 (南から)



6-1 HZK2006地点 A 区 土坑 SK40a (南西から)



6-2 HZK2006地点 A 区 火葬土坑 SK41 (南西から)



6-3 HZK2006地点 A 区 火葬土坑 SK42 (南東から)



6-4 HZK2006地点 A 区 土坑 SK43 (西から)



6-5 HZK2006地点 A 区 火葬土坑 SK44 (東から)



6-6 HZK2006地点 A 区 礫集中 SX53 (北西から)



6-7 HZK2006地点 A 区 火葬土坑 SK55 (南西から)



6-8 HZK2006地点 A 区 礫集中 SX56 (南東から)



7-1 HZK2006地点 G 区 土坑 SK02断面 (北西から)



7-2 HZK2006地点 G 区 土坑 SK05・06 (北から)



7-3 HZK2006地点 G 区 溝 SD09 (西から)



7-4 HZK2006地点 G 区 火葬土坑 SK13 (北から)



7-5 HZK2006地点 G 区 火葬土坑 SK16断面 (西から)



7-6 HZK2006地点 G 区 火葬土坑 SK16完掘 (北西から)



7-7 HZK2006地点 G 区 土坑 SK17遺物出土状況 (南東から)



7-8 HZK2006地点 G 区 土坑 SK18人骨出土状況 (北西から)



8-1 HZK2006地点 G 区 火葬土坑 SK19半裁 (南東から)



8-2 HZK2006地点 G 区 火葬土坑 SK19 (南から)



8-3 HZK2006地点 G 区 溝 SD30 (東から)



8-4 HZK2006地点 G 区 土坑 SK31・32完掘 (北西から)



8-5 HZK2006地点 G 区 火葬土坑 SK33 (南から)



8-6 HZK2006地点 G 区 木棺墓 ST35遺物出土状況 (北西から)



8-7 HZK2006地点 G 区 木棺墓 ST35遺物出土状況 (西から)



8-8 HZK2006地点 G 区 調査区完掘 (北から)



第5図4



第5図4



第5図9



第5図5



第5図5



第5図10



第5図6



第5図6



第5図11



第5図7



第5図7



第5図12



第5図8



第5図8



第5図13



第5図15



第6図9



第6図10



第6図11



第6図12



第6図13



第6図16



第6図17



第6図18



第7図5



第7図6



第7図7



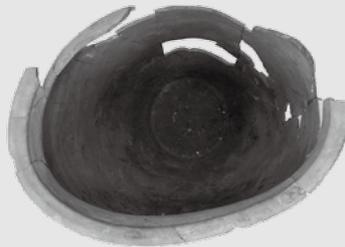
第7図12



第7図12



第7図13



第6図4



第7図1



第5図3





報告書抄録

ふりがな	はごぎいせき—HZK1602・2006ちてん—							
書名	箱崎遺跡—HZK1602・2006地点—							
副書名	九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告8							
シリーズ名	九州大学埋蔵文化財調査室報告							
シリーズ番号	第11集							
編著者名	谷 直子 (編)・宮本一夫・齋藤瑞穂・福永将大							
編集機関	九州大学埋蔵文化財調査室							
所在地	〒812-8581 福岡市東区箱崎6丁目10-1							
発行年月日	2025年4月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
はごぎいせき 箱崎遺跡 HZK2006地点	ふくおかしひがしく 福岡市東区 はごぎ 箱崎6丁目	40131	2639	33° 37' 24"	130° 25' 36"	2020.11.16 ～ 2021.3.31	1000	学術研究
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
HZK2006地点	集落跡・墓地	中世	火葬土坑・木棺墓・溝・土坑・ピット・礫集中	火葬人骨・馬骨・土師器坏・土師皿・白磁皿・青磁碗・鉄釘・数珠玉・炭化材				
要約	<p>HZK2006地点（本部第二庁舎地点）は、旧工学部本館北東側周辺で2019年度に実施した立会調査地点（登録番号：1859）の東側に隣接している。立会調査では中世墓の存在が確認されており、本調査地点においても中世墓が見つかることが予想されていた。</p> <p>本調査地点A区は、本部第2庁舎の北側に位置し、火葬土坑13基、木棺墓1基、溝1条、土坑32基、ピット11基、礫の集中4基を確認した。木棺墓ST02は棺蓋を固定したと考えられる鉄釘が出土しており、副葬品から13世紀初頭以降の所産と考えられる。ほかに埋葬遺構SX01では馬の骨1体分の下から人骨が出土した。SX01出土の馬の骨は放射性炭素年代測定によって江戸時代の可能性が高いが、馬の骨と出土炭化材の年代が異なるので、炭化材が人骨に伴うとすれば、馬の骨と人骨の埋没時期が異なる可能性が高い。また、火葬土坑SK15・SK41・SK42はいずれも14世紀～15世紀中頃の年代値が出ている。</p> <p>本調査地点G区は、本部第2庁舎の南東側に位置しており、火葬土坑4基、木棺墓1基、溝2条、土坑13基を検出した。木棺墓ST35は、出土した副葬品から14世紀前半の所産であり、棺材と思われる鉄釘の出土状況から、木棺に遺体が埋葬されていたと考えられる。</p> <p>また、茶毘の場と考えられる火葬土坑が見つかったことも重要な成果である。出土した炭化物に対して放射性炭素年代測定を行ったところ、SK13・SK19ともに14世紀～15世紀前半の年代値が出ている。年代値から見ると、火葬土坑の出現は木棺墓ST35に後出する可能性が高い。</p>							

箱崎遺跡

— HZK1602・2006 —

九州大学埋蔵文化財調査室報告 第11集

令和7年(2025)4月30日

発行 九州大学埋蔵文化財調査室
福岡市東区箱崎6-10-1

印刷 シモダ印刷株式会社
熊本県熊本市中央区上水前寺2丁目16-16

